木村英吉譯

聖金ロイオアン全集第五巻 聖詠講話上編

正教會編輯局

50
38

020898−001−1

特18−771

聖金ロイオアン全集　第5巻　上，中編

木村　英吉／訳

1冊（538）

M38，45

ABI−0732

特18
771

聖金口イオアン全集第五卷

聖詠講話上編

緒言

該書は聖金口イオアンがダウヒドの聖詠を講述したるものにして、其著書中の傑作に屬す、此等の講話は主として彼がアンテオヒヤに於ける傳道事業の全盛時代（自三九三年至三九七年）の作なり、但し此書の体裁は後世に於て完備したるものとす。而して大なる教師は聖詠全部を講述解釋したらんと思惟せらるゝも、現今吾人に傳はれるは其全部にあらず、然れば此書の解釋も直ちに第三聖詠より始めらるゝなり。

明治
38 3 20
内交

聖金ロイオアン全集第五卷

聖詠講話上編目次

第三　聖詠講話……一
第四　聖詠講話……一一
第五　聖詠講話……五六
第六　聖詠講話……八〇
第七　聖詠講話……一〇〇
第八　聖詠講話……一五八
第九　聖詠講話……一九二
第十　聖詠講話……二三五
第十一　聖詠講話……二四四
第十二　聖詠講話……二五五
第四十一　聖詠講話……二六六
第四十三　聖詠講話……二八九

頁

第四十四　聖詠講話……三一三
第四十五　聖詠講話……三七〇
第四十六　聖詠講話……三七九
第四十七　聖詠講話……三九八
第四十八　聖詠講話……四一〇
第四十九　聖詠講話……四五〇
第百八　聖詠講話……四八九
第百九　聖詠講話……五〇四

目次終り

聖金口イオアン全集第五卷　聖詠講話上編

第三　聖詠講話

ダウィドの詠其子アウェサロムを避くる時作る所なり。

主や我が敵は何ぞ多きや（二節）。

諸王は戰に勝利を得たる將軍の名譽を表するが爲に、凱旋記念像を建て、又諸將は勝利を得たる軍士の名譽を表するが爲に、其肖像を繪かしめ、若くは記念碑を建て、題詞を以て恰も口にて勝利を傳ふるものゝ如くならしむ。或者は書籍又は文章等に戰勝者の讃辭を述べ、其讃辭に讃めらるゝ者よりも讃むる者の自ら强きことを示さんとせり。辯說家・畫家・彫工・彫刻師・人民・有司・都市・村落は皆勝利者を歎稱す、然れども何人も今ダウィドの（行ふが）如く逃亡者及び非戰者の名譽を表するに繪畫を畫かず「ダウィドの詠は其子アウェサロムを避くる時作る所なり」しなり。そも逃亡者は何れの時にか讃美せらるべき。追放者は何れの時にか題詞に

當るべき。人々は書を飛ばして逃亡者を捕ふるも、題詞を掲げて讃美せざるなり。然れども兄弟よ、ダヰドが斯る(聖詠の)題詞を書したる理由を知りて、己が靈を守れ、此物語は爾の生活を矯正するに勤むべく、義人に對する此窘逐は爾の心を警戒せしむべし。知るべし、ダヰドは何に由りてアヒサロムに窘逐せられしかを、是れ爾が此知りし智識を基礎となして其上に神の畏にて建造されん爲なり、何となれば基礎なき建造の堅牢ならざるが如く、爾もし聖書の目的を見ざれば聖書も爾に利益を與へざるべければなり。禍たるダヰドの此聖詠の目的は、善行及び貞操の生活を敎へ、常に神の誡を蔑視せず、惡を行はざらしむるに在り、是れ犯罪者をしてダヰドの受けたるが如き罰を受けざらしめん爲なり。ダヰドが己の子の攻むる所となりて逃走したるは、彼が潔淨を遠ざかり、貞操なる配偶を破りて『殺す勿れ、姦淫する勿れ』(出埃及記二十の十三)と曰へる神の律法を犯したるに由る。ダヰドは他の牧者を殺して、其羔を己が家に引き入れ、己が家の羔も亦己の牧者と角鬪するに至れり、即ち彼は戰を他人の家に入れ、己が家人も亦彼に對して戰を起せり。是れ神の言にして我が考へし所にあらず、而して何人も神の言に反對するを得ず。然れば ダヰドに對して其子アヒサロムの反抗したるは、實に彼がウリヤを殺して其妻を奪ひたるに由る、此事に就きては、神が預言者ナヂンを以てダヰドに告げし所を聞け、曰く『我爾に膏を沃いてイズライリの王となし、我爾をサウルの手より救ひいだし、爾に爾の主人の家をあたへ、サウルとイウダの家を爾に與へたり、若し少からば、我爾に種々の物を增加へしならん。何ぞ爾主を輕じて我が面前に惡をなせしや。爾刀劍を以てヘッテ人ウリヤを殺し、其妻をとりて爾の妻となせり。故に劍何時迄も爾の家を離るゝことなかるべし』(第二列王紀＝サムイル後書＝二の七至十)と。是れ爾は劍を以て人の家を破りたれば、我は爾の家に於て爾の上に劍を備へ、『我爾の家の中より爾の上に禍を起すべし』即ち他の家より禍を起すにあらず、『爾の家より』起すべしとの意なり(サムイル後書十二の十一)。罪の原因ある所より罰の打擊も亦生ず。然れば ダヰドが己の子より逃走して追放者となりしは、神の律法を犯しゝに由りてなり。『ダヰドの詠其子アヒサロムを避くる時作る所なり』。予はダヰドとアヒサロムとの戰に就きて語げんよりは、寧ろ戰の理由を示すを以て勝れりと思ふなり、是れ吾人が義人の墮落を見て、自ら己を墮落より預戒し、以て彼と同一なる罰を免れん爲なり。多くの者は今も己の家に戰を導き入るゝにあらずや、或者は妻より戰を挑れ、或者は己の子に攻めらる、或者は兄弟より不快を受け、或者は僕より不快を受く、即ち吾人は皆

各苦痛憂悶し、格闘戰爭を作し、戰爭を以て攻擊せらる、然れども何人も自ら判斷して、若し罪の種を蒔かざれば其家に荆棘及び薊生ぜず――罪の飛火を置かざればその家を燒かざりしを思はざるなり。而して家庭の艱難は罪の結果なること、又神は其家人を以て罪人の罰を行ふ者と定むることに就きては、聖書の證する所なり。妻は爾と爭を起して猛獸の如く爾を入口に要し、劍の如く己の舌を鋭くするとあらんか。固より爾の補助者の爾に反對するは悲むべきことなるも、爾は自ら己を反省すべし、爾は少壯時代に於て或婦人に對して惡念を懷かざりしか、他の婦人を凌辱しめたることは己の婦人を以て復讐せられ、又他の婦人の傷は爾の妻にて療さるゝを見るべし。爾の妻は自ら爲しつゝ其行ふ所を知らざるも、醫師たる神之を知る。醫師が鐵刀圭を以て病を療すが如く、神は爾の妻を以て爾を治療す、而して鐵は其爲す所を知らざるも、鐵を以て治療を行ふ所の醫師之を知るが如く、爰にも攻擊する所の妻と攻擊せらるゝ夫とはその攻擊の理由を知らざるも、醫師たる神はその益たる所を知る。又惡しき妻を有することの罪より生ずる打擊たるは聖書の證する所なり、聖書は罪人たる夫に惡しき妻の與へらるゝことを言へり（レヲフ書廿五章廿六章）。是れ惡しき妻は罪の毒汁を蠱滅する苦き醫藥として彼に與へらるゝなり。又子女より受くる攻擊も全じく罪の罰なり、此事の證者は既に述べたるが如く、不法を行ひたるが爲に其子アゼサロムに窘逐せられたるダヰド是なり。又罪の爲に兄弟の相互に仇敵となるは士師記之を證す。嘗て之ニアミン支派の或者は、共に一旅行者の妾を犯しゝが、其婦人は無量の凌辱に堪へずして死せり、他の十一支派は爲に其一支派に對して戰を起したりしも、彼等は神より離れ、妄りに偶像に歸依したるによりて、悉く一支派の破る所となれり、而も其敗北は數回に及び、之ニアミン支派に勝ちたるは唯一回のみなりき。斯く兄弟の互に戰へるは、神彼等の罪のために罪の隔の牆を毀ちたるに由る（士師記十九章廿章）。一支派は一婦人を犯し、他の十一支派は妄りに偶像に歸依したるに由りて『凡そ爾に離るゝ者は爾之を滅す』（聖詠七十二の廿七）と錄されしが如く、僧に神の滅す所となれり。斯くの如く兄弟の互に相戰へるは罪に由りてなり。兄弟爾を攻擊するとあらば、之を歎かんよりは自ら己を省み、兄弟は如何なる罪の爲に爾の敵となりしかを推究すべし。然れど凡ての人必ずしも罪の爲に兄弟の攻擊を受くるにあらず。然ればイオシフは兄弟の攻擊を受けたるも、そは全く罪の爲にあらず、又イオフの、婦の讒言に遇ひしは全く罪の爲にはあらざりしなり。然れども多くの人々にありて其家族が己の敵となるは罪に由りて

なり。罪の爲には兄弟も敵となるとあり、以前に愛しゝ者も惡み遠ざかるとあり、是れ神其知り給ふ所の理由によりて、彼等の間に斯る憎惡を許し給ふに由る。然ればエギペト人に就きて第百四聖詠に『敵の心に其民を疾ましむ』(五廿)と錄されたり。而して其民の愛もし惡癖たらずば、神はエギペト人に之を嫉むことを許さゞりしならん。人を愛して其愛もし之を亡滅に至らしむる時は、寧ろ之を惡むは却て其人を善行に進ましむる動機となる。奴僕も臣下も主人の罪ゆゑに屢〻己の主人に反抗せり。然れば視よ、アダムの未だ罪を犯さゞるや、猛獸すら彼に勤め從ひ、而してアダムは己の奴僕に行ふが如く彼等に名を命じたり、然れど彼が罪を以て己を汚すや、猛獸は彼を認めず、奴僕は轉じて敵となれり。又飼犬は己の飼養者に忠勤を盡し、之を畏れて戰慄するも、其飼養者もし突然煤煙を以て己の顏を汚し、或は假面を蒙むる時は、恰も他人に對するが如く、之に向ひて突進し、之を嚙裂かんとするが如く、アダムと偕に亦斯くの如くなりき、彼が神の像によりて造られたる己の顏を清潔に守りし間猛獸は奴僕の如く彼に從ひしも、彼が神に對する不從順を以て己の顏を汚すや、彼等はアダムを主人と認めずして、他人の如く彼に反抗し始めたり。斯くの如く奴僕の反抗も罪の應報なり。ダニイルは義人なりき、故に獅子彼の主權を認めダニイルの罪なきを見て罰に與らざる者として之を害せざりき(ダニイルの廿二章六)。翻て偽預言者罪を行ひしが、獅子之を途に要して殺せり(列王紀略上十三の廿四)彼は虛言を以て己を汚したるによりて獅子彼を認めざりしなり。獅子もし彼を以てダニイルに肖たる預言者なりと認めなば之を尊敬したりしならん、然れども獅子は偽預言者を見出せるによりて、他の人々に對するが如く之を攻擊したるなり、奴僕が其主權を排斥したるは、主人の偽れるに由る。然れども家族の艱難に就きては云ふ迄もなし、吾人の罪を犯すや、吾人に取りて何物よりも最も親しく、最も愛すべき吾人の身體さへ、熱病及び他の疾病苦艱を以て吾人に復讐しつゝ往々吾人に敵對す、靈の罪を犯す時は之に妄從する所の體すら己が主權者なる靈を罰す、其之を罰するは體の欲するにあらず、斯く行すべきことを體に誡められたるに由る。ハリストスは此事に關し、愈されたる癱瘓者に『見よ、爾は癒えたり、復罪を犯す勿れ、恐くは患に遇ふこと更に甚しからん』(イオアン福音五の十四)と曰ひて之を證せり。然れば兄弟よ、吾人は家人、親戚、奴僕よりの戰爭及び體の疾病の大約罪の爲なることを知りて、惡の源泉たる罪を滅さん。慾水の流れざる時は神水の河靈を悅ましむ。ダヴィドは他人の國たる妻を橫奪せり(爾等の知れるが如く、心の合へる妻は凡そ夫たる者の爲

に國なり、而して王が紫の衮衣と冕旒とを愛するも、夫が妻を愛するには如かず)之が爲に子は父の國を奪はんと欲して暴君たる父に反抗せり。ダヴィドは强迫を以て取れるが故に、亦强迫に遇へり、彼は密かに罪を犯しゝも顯然に譴責せられたり、彼は密かに己を傷つけたりしも、聖書に『爾は密かに事をなしたれど、我は衆のまへと日のまへに此事をなさん』(サムイル後書十二の十二)とある如く、衆人の前に於て醫師の手術を受けたり。然れどアヒトフェルの惡謀は目的を達せざりき、是れ正しく弑逆者等がアヒトフェルの行爲に倣はざらん爲なり、唯アヒトフェルは罰を執行する者となりしも、自らは罪に定められて殺されたり。吾人は觀物に於て猛獸が或者を攻擊して自らは他の者に殺さるゝを見るが如く、アヒトフェルはダヴィドを攻擊してイオアブの爲に殺されたり(サムイル後書十八の十四)父の前に高振れる彼は高き樹の上に繫り、根に反抗したる者は枝もて制せられ、枝の上には父の愛より斷たれたる枝は纏絡り、親の頭を領せんと强請したる者は首を繫けられ、己が天性の根原を滅さんと欲したる者は果實の如く枝葉の間に懸り、殺人を企てし其場所に於て胸を刺貫かれて殺されぬ。

當時人々は驚くべき觀物を見物したり、即ちアヒトフェルは騾馬に乘行きしが、其濃き毛髮は繁茂たる樹の枝に繫り、枝は暴君たる彼の毛髮を纏絡け、彼が父の冕旒を戴かんと欲したる場所に於て彼自らに痛傷を蒙らしめぬ。抑アヒトフェルが天地の間に懸りしは何の爲なるか。天の彼を受けざりしに由る、蓋し天若し第一の反逆者たる惡魔を排斥したらんには、如何で第二の反逆者を受けんや。又地は弑逆者の足の汚に堪えずして彼を避けたり、蓋し地はモイセイに抗言せしダフンを呑み、惡事に己の口を開ける者に其口を開きたらんには(民數記十六章)如何で親に抗ひて突進したる足を戴せんや。然ればアヒトフェルが高く樹の上に懸りし時將軍イオアブ之に近づき、三本の槍もて殘酷者の胸を刺し貫き、斯くの如くして不法を籠められたる場所に於て彼を誅したり。而してアヒトフェルが高く樹の上に懸りし時、ダヴィドは彼に對して、左の絶妙なる葬の歌を詠じぬ、曰く『我曾て惡者の誇大にして、墓ること根の深き茂りたる樹の如きを見たり、然れども彼過ぎて、視よ、無に歸せり、我之を尋ねて得ず』(聖詠卅六の卅五、卅六)と。『ダヴィドの詠其子アウェサロムを避くる時作る所なり』。彼が己の子より逃走したるは、畏れたるに由るにあらず、彼を殺さんとを危ぶみたればなり、ダヴィド自らは子たるアヒトフェルを惜みたるも、ダヴィドと偕にありし者は之を反逆者として容さゞりき。視よ、ダヴィドは何故に己の子に

窘逐せられ、又彼の爲にセメイに訴られたりしかを（サムエル後十六章）ダヴィドは自ら大膽にして凡てを忍耐せり、然れども多くの者は彼に就きて惑へり、特にアヒトフェルと偕に反逆したる者は、ダヴィドを以て恰も神の照管に遺てられし者となし、之に抗言して曰く、今ダヴィドは遺てられたり、全く凡ての佑助を失へり、神嘗てサウルより離れたるが如く、今ダヴィドより遠ざかれり、當時神はサウルより離れてダヴィドと偕にありし如く、今ダヴィドより離れてアヒトフェルに向へり、吾人は立ちて彼を擊たん、彼は救を神に得ずと、彼等が斯ることを言ひし時、ダヴィドはアヒトフェルの狂暴なる行爲よりも、尙此事を悲みつゝ神に問ふて言へり、曰く、『主よ、我が敵は何ぞ多き』と。我は誘惑にて圍まれ、惡の急流をもて繞らされたり、難難の雨は我が上に降り注ぎ、敵の諸川は我に對ひて流れ、惡鬼の風は我が上に吹きて我が靈を汝より離さんとを力め、且つ我が家を攻む、然れども、我や信仰の磐上に固められたるを以て、倒れずして伏拜す、『主我が敵の如何に多き』を知らん爲なり。我より生れし者は我に反けるも、然れども爾は我と偕にす。我が腹は我に對して戰を起し、我が民はアヒトフェルに從ひ、我が軍勢は我に對して武裝す、我が羊は狼となり、羔は獅子となり、羊仔は狂犬となり、綿羊は角衝癖ある牡牛となれり、然れども我の悲むは已の爲にあらずして彼等の滅ぶることを歎けばなり（我は爾救世主に感謝す、蓋し光榮と權能とは今も何時も世々に爾の有なればなり。アミン）。

第四　聖詠講話

我が義の神や、我が籲ぶ時我に聽き給へ（二節）。

一。預言者の之を言ひしは、吾人が單預言者の祈禱の聽かれしとを知らん爲にあらず、乃ち吾人も神を籲ぶや否や速に聽かれ、且つ祈禱の未だ終らざる前に既に願ふ所を受くるを學ばん爲なり。預言者は我が呼びし後に神我に聽き給へりとは言はずして『我が籲ぶ時』と云へり。然れば神自らも嘗て神を籲ぶ者に對ひて約束していへり『爾籲ぶ時は彼答へん、我此に在りと』（イサイヤ書五十八の九）。實に神に懇願するに方りて必要なるは言の裕なるにはあらで、善き行を顯す所の潔き靈なり。視よ、神は何に依りて惡しき生活をなし、而も裕なる言をもて神に懇願する所の人々に對して『我爾等が手を伸ぶる時目をおほひ、爾等が多くの祈禱をなす時も聞くことをせず』（イサイヤ書一の十五）と云ふかを。然れば祈禱する者には何事よりも先づ固き信仰を有たんことを要す、斯れは必ず願ふ所を受けん。故に預言者も單に『我に聽き給へ』と

云はずして、己が堅き信仰と、彼が常に此信仰を以て神に近づけることを顯しつゝ、『我が義の』といふ言を加へたり。何人もダヰドは慢心を以て之を言ひしとは思はざるべし。彼の斯く云ひしは、己を高うせんとするにはあらず、乃ち衆人に取りて極めて有益なる或教誨と慰藉とを顯さん爲なり。何人も彼はダヰドなるにより て聽かれたれども、我は小なる者又名もなき者なれば、我が祈禱は聽かれざらん」と云はざらん爲に――ダヰドは神は理由なくんばダヰドにも聽かず、爾等にも徒らに又偶然には聽かず、乃ち神は常に注意して行爲を觀察することを說き示すなり。爾若し己の爲に中保する所の行爲を有せば、必ず聽かれん、之に反してもし之を有せずば、縱ひ爾はダヰドたらんも神に懇願し得ざらん。貪慾者は人の價値をも他の何ことをも見ずして、唯その富を見、且つ彼等によりて凡てを爲さんとを望みつゝ、獨り彼等に向ふが如く、義を愛する所の神に對するも斯くの如し、義を以て神に近づく者は何ものをも受けずして去るとなし、之に反して義を有たず或は義に反する惡癖に己を汚して神に近づく者は、千百回願を重ぬとも何の効なからん、神に懇願し得るものを己の中に有たざればなり。是に由りて爾若し少したりとも神の前に効を奏せんと欲せば、義を行ひて神に近づくべし。『義』てふ言の下に、善行の一部分にはあらで、其全体を會得すべし。然れば凡ての人の有する善行を有てるイオフは義人なりき、彼は一預言者には信服され、他の預言者には信服せられざるが如き者にはあらざりき。吾人が正しき秤と名つくるは、常に一樣なる秤にして、金のみは正しく秤るも、鉛を正しく秤り得ざるが如きものにあらず、乃ち悉くの品物を一樣に秤るものなり、又吾人が正しき量と名つくるは何時も一樣なる量なり。然ればイオフも万事に一樣なりしによりて義人なりき。彼は單り財產に於てのみならず、他の凡てのことに於ても常に正義を守りて量を越えざりき。何人もイオフに就き、かれは財產に於て義を愛しゝも、人に對しては自負傲慢なりしと云ふを得ず。彼は頗る注意して之をも避けたり、何に由りて彼は『我が僕或は婢の我と辯爭ひし時に、我もし之が權理を輕んぜし事あらば(神の起ちあがり給ふ時には如何にせんや、神の臨み給ふ時には何と答へまつらんや)我を胎內に造りし者また彼をも造り給ひしにあらずや』(イオフ書三十一、十五)と言ひしや。驕傲自慢の者となるは是れ最も大なる不義にあらずや。

二。吾等は人のものを己の有となさんと欲し、又己のものにて滿足せざる人を貪慾者と名つくるが如く、己の要求すべきよりも多くのものを人に要求し、己をもつ

て凡ての名譽に當る者となし、他人の名譽を汚す者をば傲慢者と名つくるなり。而して此貪慾は不義の外他の何ものよりも生せざるなり。實に其不義より生ずることは、左の事實によりて見るべし。神は爾を造りしが如く彼をも造り、又万物を等しく一樣に爾と彼とに與へ給へり。何に因りて爾は彼を排斥し、神が彼に賜ひし所の名譽を奪ひ、彼の幸福を享受を許さずして凡てを我ものとなし、啻に財産のみならず名譽に於ても彼を貧しき者となすか。神は爾等兩人に同一の天性を賦與し、同一の特權を與へ、同一に造り給へり、何となれば「吾等人を造らん」(創世紀一の廿六)てふ言は、總じて全人類に係ればなり。何故に爾は彼が父より讓り受けたる財産を奪ひ、彼をして非常なる艱難に至らしめ、衆人に屬するものを我が有となすか。然れども福たる預言者は斯る者にはあらざりき、故に彼は敢て『我が義の神よ、我に聽き給へ』と言へり。然ればパウルが屢〻己を顯しゝは、傲慢したるにあらず、自負したるにもあらず、乃ち己を顯して人々の模範としたるなり、例令ば彼が『人皆(節制によりて)我の如くならんことを願ふ』(コリンフ前書七の七)と言ひし時の如き是なり。ダヴィドも亦事情の要求に從ひ、神の佑助によりて己が勇氣を顯しつゝ、熊をも殺し、獅子をも捕へたりと云ふも、自ら高振りたるにはあらず——此くの如きは無き事にて唯己を信用せしめたる迄なり。

然れども人或は云はん、若し我義を有せば祈禱何の要かあらん、只義は萬事をなすことを得與ふる者は吾人の要むる所を知ると。否必要なり、祈禱は神に對する愛の重要なる結合にして、神と談話する習慣を吾人に生じ、又吾人を明智に導けばなり。實際非凡なる人と相對する者も、數〻彼と相對坐するによりて大なる利益を受けなば、況て常に神と談話する者をや。然れども吾人は祈禱の利益が如何にして生ずるかを知らず、何となれば熱切なる注意を以て祈禱せず、又神の誡に從ひて祈禱を献くるに習はざればなり。吾人は目上の人々と談話せんとする時は、相當の禮儀を盡し、己が衣服外觀を整へ、歩行を慎み、然る後始めて對話す、然るに吾人は神に近づくに際して、或は欠伸し、或は身體を搔き、或は四方を廻顧し、或は注意を用ひず、或ば膝を屈するも自らは(思想を以て)四方に徘徊す。然れど吾人もし相當の敬虔を以て神に近づき、之と談話するを得ば、吾人は願ひしものを受くるに先たちて如何に大なる利益を祈禱より受くるかを知りしならん。神と談話することを習ひ、神と談話し得る人は天使と爲るなり、即ち彼の靈は肉の拘束より解かれ、彼の智慧は高まりて天に移り、彼は世の凡てを輕んじ、彼は貧しき者たり、奴隷たり、平民たり、

將無學者たりとも王の寶座の前に立つに由る。神の要め給ふ所は能辯にあらず、巧言にあらずして靈の美なり、故に斯る靈にして神の嘉みし給ふ所のものを願はゞ凡てを受けん。爾は此に如何なる便利のあるを見るか。何人にか近づかんと欲する者に必要なるものは、辯者たると、長官の左右に媚を呈すると、能く其希望を達する樣種々に工夫を凝らすとなり。然れど爰には一の勇しき靈の外何ものをも要せず、又神に近づくに如何なる障害なきなり。『主曰へり、我は唯近くに於てのみ神たらんや、遠くに於ても神たるに非ずや』(イエレミヤ書廿三の廿三)と。故に神より遠ざかるは吾人の行爲にして唯彼は常に吾人に近く在し給ふなり。然れども我は云はん、爰に能辯は必要ならずと。聲も數〻不必要のことあり。實際に爾若し唯己の心に於て話し、且つ當然に神を顧ばゝ彼速に爾に聽かん。然れば彼はモイモイに聽き、アンナにも聽けり(出埃及記十四の十五。第一列王紀一の十三)。彼の周圍には來る者を逐ふ所の軍士なく、或は時刻を遲延せし時に、今は時刻にあらざれば入るへこと能はず、後に來れと言ふ所の鎗卒もなし、乃ち爾は何時來らんも、晝食又は夕飯の時、或は夜半に來るとも彼は立ちて聽き給ふなり、縱ひ爾は彼を廣場に於て、途中に於て、寢室に於て、裁判所に於て長官の前に立ちて彼を呼ぶとも、若し當然に彼を呼ばゝ、何ものも彼が吾人の願を聞くに妨げざるなり。吾は近づきて願ふことを畏る——我が敵は主の前に立てばなりと云ふ能はず。爰には此妨もなし、何となれば彼は敵に聞かず、又爾の願を斥けず、乃ち爾は常に斷えず彼と談話することを得、且つ如何なる困難もなければなり、爰には守門者、家扶、家令、番人或は朋友等の爾を案内する要なし、只爾自ら近づかば何人に願はずとも、神は特に爾に聽き給はん。

三。吾人は他人を介して願ふ時は、自ら願ふ時ほど神に懇願せず。神は吾人の心從を希望し、吾人をして神を信用せしむる樣萬事を行ふが故に、吾人の之を行ふを見れば特に吾人に注意し給ふ也。然れば神はハナネヤの婦に左の如く行し給へり、ペートル及びイヤコフの彼の婦の爲に中保するや、神は其祈願を滿足せしめざりしも、彼の婦の自ら願ひ續くるや、速かに其願ひし所を彼の婦に賜へり(マトフイ福音十五の廿二)。外見上神は幾何か猶豫したるが如きは、此婦をして待しめん爲にあらず、乃ち彼の婦が大なる榮冠を受け、又其祈願を續けて益々神に近づかんが爲に斯くなしゝなり。吾人も熱心を以て神に對ひ、如何に神に對ふべきかを學ばん。斯く(神と)對話することを學ぶが爲には、博物館に行き、金錢を費し、教師辯者或は詭辯家を雇ひ、多くの時間を消費するの要なし、唯欲すれば足れり、斯くして此術は得らるゝなり。爾

は此裁判所に於ても己の爲のみならず、他の人々の爲に言ふことを得。此說話法の目的は如何なるものなるか。祈禱を献ぐると是なり。

吾人は勇しき心、痛悔の靈及び涙を流して神に近づき、毫も世間の事を願はじ、未來のことを望み、靈に屬することを祈り、敵の惡かるべきを願はじ、何人の惡をも記憶せじ、己が靈より凡ての情慾を除き去り、斯くして痛悔と謙遜の心とを以て近づき、全き服從を表し、己の舌もて祝讃を述べ、如何なる惡癖にも與からじ、毫も普世の公敵たる惡魔に似たる惡事を有せざらんことを要す。外部(幽)の法律も、他人のことに就きて王と語り、同時に王の敵と好を通ずる者を罰す。之によりて爾もし己および人のことに就きて(神と)語らんと欲せば、特に普世の公敵と同一なるものを毫も有せざらんことを力めよ。斯れば爾義人となり、義の侍護によりて聽かれん。預言者曰く『爾は悲哀に於て我を大ならしめたり』(正教會譯ハ聖詠には「我が狹に在て時、爾我を廣くせり」とあり)と。爾は悲哀を鎭めたり、或は爾は誘惑より救へりとは云はずして、爾は我を堅立せしめ、又『我を大ならしめたり』と言へり。實に神の睿智と能力とは特に彼が唯悲哀を鎭むるのみならず、悲哀の中に於ても大なる平安を與ふるによりて顯さるるなり。人に靈の狹を減ずる廣の與へらるゝも、又人を怠惰より皷舞し、凡ての催眠より救ふ所の悲哀の鎭められざるも、是れ神の能力を顯し、又(誘惑に)陷りし者をも益智なる者となすなり。然れども爾は云はん、如何にして悲哀の中に『廣きこと』のあり得べきかと。然り、あり得るなり、即ち爐の中に於て三人の少年と僧に在りしが如き、及び獅子の口の下に於てダニイルと僧にありしが如き是なり(ダニイル書三の廿四、六の廿二)。

其時神は焰を消やさずして、三人の少者を自由ならしめ、又獅子を殺さずしてダニイルを害せざらしめたり、彼處に火は爐の中に強く燃え、又爰に猛獸は依然として猛獸たりしも、義人等は怡然として平安なりき。然れど『廣』てふ言を又他の意味に理解することを得、即ち誘惑を以て惱まされたる靈が情慾及び他の多くの疾病より自由にせらるゝ時は特に平安を以て樂むことなり。多くの人々は幸福を受くる時は、その靈の爲に最も無智にして苦痛ある情慾——貪慾、好色其他多くの惡癖——に耽るも、悲哀に服する時は却て此等の惡癖より自由にせられて『廣』を與へらるる也。熱病に難める者もし已が不適當なる慾望を充たし、多量の飲食物を用ひなば非常なる苦を感ずべし、然れど僅に悲哀を忍耐する時は大なる平安を受け、苦を生ずる所のことを排斥くる時は完く健康を恢復して樂を得るが如く、爰にも亦斯くの如けん。何ものも世計を遠ざかる所の悲哀の如くには平安を常に與

へず。イツデヤ人が悲哀を忍耐せし時及び幸福を以て樂みし時に於て何事の彼等にありしか。病者・癲癇者及び輕卒なる靈が『汝我等を導く神を我等の爲に作れ、其は我等をエギペトの國より導き上りし彼のモイセイ其人は如何になりしか知らざれば也』（出埃及記三十二の一）と云ふは當然ならずや。又之に反して彼等が悲哀ある時祈禱の中に言顯し〻言と彼等が爲に神の仁慈を得たりし言とは、世の情慾を脫したる智なる靈に適當ならざるか。預言者（ダヴィド）自らもその幸福なりし時は如何に惡望に苦み難まされ又壓迫されしか。彼は悲哀に服せし時如何なる平安を以て樂みしか、即ち其時（情慾の）火は彼の中に燃出さずして凡ての餘は消へしを知らん。實に靈の中に强まりし情慾程何物も斯く苦痛を吾人に受けしめず。凡そ他の艱難は外部より來るものなれども、此等は內部に生ず、大なる苦は特に內部より生ず。縱ひ全世界擧て吾人を苦むるとも、吾人自ら己を苦めざれば何ものも吾人の爲に難きものとはならざらん。故に悲哀を受くると受けざるとは吾人に關するなり。

四。又爾が如何なる『廣きこと』の悲哀より生ずるかを信せんが爲に、悲哀の結果に就きて使徒パウルの『患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じ、希望は羞を啓かず』（ロマ書五の三至五）と云へるを聞け。爾は云ふべからざる『廣』を見るか。喜の港を見るか。使徒曰く『患難は忍耐を生ず』と。忍耐深き人及び容易に何事をも忍耐し得る人程平安なるはなし。何ものか經驗ある人より强かるべき。何ものか此より生ずる悅に比ぶべき。使徒曰へり、三の喜ぶべき結果たる忍耐・經驗及び將來の幸福の希望は之よりして吾人に生ずと。今預言者が『悲哀に於て我を大ならしめたり』と云へるは、此等の事を悟らしむるなり。彼曰く『神は我に禱けり』と、斯く言ひしは何事に於て聽かれしなるか、財產に關して聽かれしにあらず、彼は斯くの如きものを願はざればなり——唯悲哀の中にある者の平安に就きて願へり。『我を憐みて我が禱を聽き給へ』。爾は何を云ふか。爾は前に義のために就きて記憶したれば、爰には仁慈・寬容に就きて云ふなるべし、爰には前に述べたることと如何なる接續あるか。然り極めて適切なる接續を有す。縱ひ吾人は無數の善事を行ひしにもせよ、その願の聽かれたるは（神の）慈憐と仁愛とによる、縱ひ吾人は善行の極點に達すとも、其救はるゝは（神の）慈憐によりてなり。之よりして吾人は義を有すると僧に痛悔の心を有すべきとを學ばん。爾等の知れるが如く、罪人も亦謙遜にして祈らば

多くの事に於て進歩せん、義人も傲慢にして神に近づかば凡ての幸福を奪はれん。税吏と「プリセイ」人の例（音十八）は之を證す。視よ、何が故に祈禱の方法を知るの要あるかを。祈禱するに如何なる方法あるか。之を税吏に學べ、彼を己の教師となすことを恥づる勿れ、彼は平易なる言を以て全く己の祈願を達せり。彼の靈は善良なりしが故に、その一言は尚彼の爲に天を開くに充分なりき。彼の靈は如何なる狀態なりしか。彼は自ら己を不當なる者と認め、己の胸を打敲き、目を天に上ぐることをすら敢てせざりき。爾も亦斯くの如く禱らば、その祈禱は毬毛よりも輕からん。罪人もし祈禱して義人となりたらんには、義人にして斯る祈禱を献ぐるを學ばゝ、其如何に大なるかを想ひ見よ。視よ、何によりて預言者は爰にも己を示さずして單にその祈禱を示したるかを。彼は前に義を示したるも、爰には祈禱を示せり、曰く『我を憐みて我が禱を聽き給へ』と。然ればコルニリイも祈禱を己の代請者となしたるによりて聽かれたり、神の使コルニリイに曰へり『爾の祈禱と爾の施濟とは升りて神の前に記念せられたり』（使徒行實十の四）と。實に行と善行とは神に聽かるゝも、祈禱必しも聽かるゝものにあらず、唯神の律法に從ひて行ふ所の祈禱は聽かるゝなり。そも是れ如何なる祈禱なるか。當然に神に對ひてその賜ふ所を願ひ、毫も神の律法に反する事を求めざる所の祈禱なり。然れども爾は云はん、誰か神の律法に反することを行ふが爲に敢て神に願ふ者あらんと。己が敵に對して神に願ふ者あり――是れ神の立て給ひし律法に適はざるなり。主曰へり『我等に債ある者を免し給へ』（マトテイ福音六の十二）と、然るに爾は免すべきことを爾に命ずる所の主を呼びて、己が敵に仇を報いんことを願ふ。何ものか斯る無智より惡しきものあらん。祈禱する者は謙遜なる請願者の態度と思念と感情とを有せざるべからず、何爲れぞ爾は他の態度、即ち原告者の態度をなすや。爾人の罪を罰せんことを神に願はゝ、如何で己が罪を赦されんや。是に由りて爾の祈禱は善良にして快活なる狀態を有する謙遜且つ平安なるものたるべし。温柔を以て行はれ、敵の爲に惡を願はざる祈禱は斯くの如きものなり。之に反する祈禱は狂暴猛烈にして酷酊せる無智なる婦に似たり。斯る祈禱にては天に近づくことを得ざるなり。温柔を以て行はるゝ祈禱は斯くの如きものにあらず、其祈禱は鄭重にして整然、又能く王の耳に適する好調を有す。故に其祈禱は觀物にも用ひられて賞讃さるゝなり、斯る祈禱は黄金の線琴と黄金の衣裳とを有す。斯る祈禱はその狀態視線音聲を以て偖に滿足を審判官に與ふるが故に、天の第宅より之を逐はざるなり。斯る祈禱は此等

の觀物に喜を充滿す、こは天に適ふの祈禱なり、こは天使の言なり、蓋し毫も困難なることを言はずして快活なることのみを言へばなり、彼が近づきて侮辱されし者の爲に願ふ時は、天使等も其前に立ちて之を謹聽す、又其默したる時は、彼等は其名譽を叫び、讃詞を以て之を讃美歎稱す。吾人も亦斯る祈禱を献せん、然らば其祈禱は必ず聽かれん。吾人神に近づく時は是が通例の觀物たることを思はざらん、爰には全世界の集會或は之を明かに云へば、天群の高尚なる集會なり、而して吾人の祈禱を聽かんとする王は自ら彼等の中に坐し給ふなり。吾人は祈禱の觀物に適應せんとを力めん。線琴の奏樂者にまれ、古琴の唱歌者にまれ、偖に其舞臺に出づる時は、注意の上にも注意して、些にても不調和なる聲音の生せんとを恐る、吾人にして天使の觀物に入らんと心掛くる時は、吾人豈此點に於て彼等に劣るべけんや。而して吾人の器具たるべきものは、毫も不快を生ずる所の言にあらず、乃ち凡そ靈の整然且つ好調なる狀態なり、又吾人は神に近づきて願ひ求めつゝ、敵の爲に吾人の絃を彈せん、然らば吾人の祈禱は吾人自らの爲にも聽かれん。

五。斯くの如き祈禱は惡鬼を辱かしめ、吾人に勇敢を神の前に與へ、惡魔をして面目を失はしめ、之を放逐す。惡魔は彼を放逐する所の人及び他人より彼を逐出す所の人を畏るゝよりも、己の怒を鎭め己の憤を制する所の人を畏る、何となれば憤怒る者も亦至て猛烈なる惡鬼なればなり、斯る人々は鬼に冤られたる者よりも最も不幸なる者と云ふべし。實際鬼患者は「ゲエンナ」(地獄)に投入れられざるも、憤怒と怨恨とは吾人より天國を奪ふ。吾人もし斯くの如く祈禱する時は、吾人も亦敢て神に『我が禱を聽き給へ』と云ふを得べし。爾は斯る祈禱を以て益を致し、曾に己自らに助くるのみならず、神の命令に應ふとを求めつゝ、其祈禱を聽容るゝ所の神にも喜を與へん、斯れば神は速かに爾に聽かん。斯る祈禱は神の諸子たる者の使命に適ふものにして(パリストスの弟子たる)特別の表號を吾人に傳ふ。主曰へり『爾等慈憐なると、爾等の父の慈憐なるが如くなれ』(ルカ福音六の廿六)と、又曰へり『爾等を窘逐する者の爲に禱れ、天に在す』爾等の父の如く『ならん爲なり』(マトテイ福音五の四十四、四十五)と。何ものか斯る祈禱と比ぶるを得ん。此祈禱は吾人を天使、又は天使長にはあらで、乃ち天の王自らに肖たる者となす。而して王に肖たる者たらんことを力むる者は祈禱に於て如何なる勇敢を有するかを思へ。預言者曰へり『人の子よ、我が榮の辱しめらるゝを何の時に至るか、爾等虛を好み詭を求むるを何の時に至るか』(節三)と、彼は何人に對して言ひ、何人を責め、何人と商議し

たりしか。誰を指して人の子と名つけしか。惡しき行をなし、惡に傾ける人々を指せるなり。そも是れ何事ぞや。吾人は人の子にはあらざるか。吾人は天性人の子なり、然れど恩寵によりては神の子なり。吾人もし善行をもて彼の像を已の中に保存せば、此賜は吾人の中に完全からん、蓋し恩寵によりて神の子となりし者は行を以て此像を顯すことも亦肝要なればなり。實に預言者が世事の俗務に耽り、惡に傾ける人々を人の子と名つくることに就きては、聖書に『神の子等人の女子……を見て』(創世記六の二)と云ふを聞け。然れども爾は云はん、此には反對なることを云はるゝかと。否、聖書が爰に神の子と名づくるは、前には善行者たり、且つ神より尊貴を受けしも、後には變じて惡人となり、己の尊貴を失ひし人々を云ふなり。聖書は彼等の譴責を强むるが爲に、最も大なる罪は斯くの如きものとなり、斯くの如き人々より生じ斯くの如き惡に迄墮落することを注意しつゝ、彼等の尊貴に就きて記念す。神又曰く『我曰へり、爾等神なり、爾等皆至上者の子なり、然れども人の如く死せん』(聖詠八十一、六、七)と。視よ、預言者の智なるを。前には神の能力、佑助、睿智、仁愛を示して、神が如何に悲哀の中に希望を與ふるか、其如何に人を憐むことに注意するかを知らしめ、次に預言者は人々の間に蔓延したる惡癖及び不虔の勢力を顯し、且つ悲哀により

て絶息せんとするが如きを顯しつゝ、說話を轉じて惡しき生活をなす者に向け、左の如く云ふが如し、曰く、爾等は斯る仁慈、鴻恩なる强き神を有するにも拘らず如何で不虔に傾きしかと。然れば視よ、預言者の敎誨が怒と偕に如何なる溫柔如何なる睿智を充滿せるかを。彼は何事を云ふか。『人の子よ、我が榮の辱しめらるゝを何の時に至るか』。爰に彼は時の長きが爲にも亦强き煩惱を言ひ顯せり。爾等の知れるが如く、若し始に神の仁慈に對する不注意にして犯罪たる時は久しく眞理に就きて盲目者たらば如何で其罪を赦されんや。『榮の辱しめらるゝ』とは何の意なるか。地上に縛らるゝ殘忍なる肉の人、惡に傾き、惡癖に耽り、情慾即ち肉慾に溺るゝ人の謂なり。預言者は彼等の生活を譴責しつゝ、不虔の原因をも示し、之が特に高尙なる敎を自得するに妨ぐることを彼等に注意せり。惡しき希望、世事を偏愛すること、此世に戀着することの如くに何ものも、人の心を殘忍らしめざるなり。斯る心は正に穢れたる心と云ふべし、預言者は心が御者の位置を(人の中に)有するにも拘らず、手綱を以て駒を御さゝるのみならず、却て自らも引付けられ、又引落され、(而も其際心は肉に羽翼を生じ、高きに進みて天に昇るべかりしを)己が疾病の重荷もて下に引付けらるゝによりて、斯る心を重き心と名つけ、且

つ同時に惡の原因の其中にあるとを示せり。而して御者或は舵手にして斯くの如くんば、救贖の希望何處にかあらん。主曰へり『若し爾の中の光は暗たらば、則暗は如何にぞや』（マトテオ福音六の廿三）と。舵手にして飲酒に耽り、風波のまに〳〵從はゞ如何で船舶を救はんや。

六。靈を輕からしむるは何なるか。地上の何ものにも誘はれず、又下方に引付け及び誘ふ所の何ものにも已が足を縛られざる秀絶なる生活なり。物質の中或者は頭傾下方に進向す、假令ば木石及び之に類するもの是なり、又或者は上方に進向す、例令へば火、空氣、輕き毬毛是なり。若し下方に進向する或物を輕き物に縛り付くる時は、羽翼及び空氣も毫も之に助けず、何となれば重力は平均を失ひ、重量超過して輕きものに打勝てばなり。斯くの如く足に水腫の如き疾患ある者は、體の他部分の如何に輕快ならんも毫も歩行に助けざるなり。物質的事物にして斯からんには、況て心に於てをや。然れば吾人は心を重からしめざらん、是れ心をして余り多くの艙底石を積める船の如く沈沒せざらしめん爲なり。而して心を重からしめざるは吾人に在り。心は天性斯くの如きものに非ず、輕くして向上する者に過ぎられたり、然るに吾人は其天性に反して之を重きものとなすが故に、預言者も吾人を定罪するなり、然れど心にして天性重きものならんには、預言者は吾人を定罪せざりしならん。吾人の歩行するは天然自然なるも、吾人もし己が膝に重荷を着くる時は、其障害物の爲に歩行すること能はざるが如く、靈の足、即ち思想と僧にも亦斯くの如し。『爾等虛を好み詭を求むること何の時に至るか』。思ふに、彼は爰に偶像に務むることと惡しき生活とを示せるなり。實に虛きものと名づくるは、名稱によりてのみ（ならず、實際に於て無益なるものを云ふなり。然れば異教人は多くの神を稱するも、實際に於ては一の神あるなし。又他の事物に於ても、名稱上の富は全く實際の富にあらず、名稱上の名譽は全く實際に於て斯くの如きものにあらず、名稱上の主權は只一の名稱上斯くの如きものとして存するのみ。何人か其實なきの名稱を切に希ひ、又避くべき虛き事實を追求する者、程無智なるあらんや。此世の快樂幸福も亦斯くの如きものに非ずや。此等は皆詭にはあらざるか、誑惑にはあらざるか。爾は名譽或は富或は權柄を示さんか――皆空なり。視よ、傳道者も之によりて『空の空なる哉、都て空なり』（傳道書一の二）といへり。之によりて預言者も亦現世の空しきを見て悲めり。人光を避けて暗を追求むる者あるを見ば云はん、爾は何の爲に此無智なる事をなすかと。然れば預言者も『爾等虛を好

み詭を求むること何の時に至るか。爾等主が其聖人を析ちて己に屬せしを知れよ』(三節)と云ひ、他の譯者は(不明の譯者)『然れとも爾等主が其聖人を析ちて』と言へり。爾は預言者の睿智を見るか。彼は如何にして人々に神を識らしめしか。彼の人々を導くや自ら己を顯しつゝ最も現然たる狀態最も明瞭なる方法を以てす。彼の意に謂らく「我は眞神の役者なれば、我によりて彼の能力・全能・照管を知れ」と。是れ神を識るに於て首要なる方法なり。預言者は神の照管に就きて云ふ時は、往々造物を以て之を說明し、或は太陽或は天、或は地、或は空氣に就きて說明しつゝ見ゆる物の秩序あることよりして造物主のことを說明し、時としては神の役者及び彼等自ら遭遇せる事情に就きて神のことを說明せり。

アウラアムも亦斯くの如くありき。ヘト人アウラアムに言へり『吾等の中にありて汝は神の如き君なる』(創世記廿三の六)を吾人は知ると。爾等は何處より之を知るか。勝利より、戰利品より、戰爭より之を知る。イウデヤ人にも亦斯くの如くありき。イウデヤ人に對して行はれたる奇蹟は、當時イエリホンの婦人が『爾等は我等を恐に導き、此地の凡ての住民も爾等によりて臆病となれり』(イエスヽナ廿二の九)と云ひしが如く、全地を恐怖せしめたり。然れば(神を識る)一の方法は造物の方よりし、他の方法及び最も明瞭なる方法は神の役者の方より得らるゝなり、故に神は古昔より斯くの如き敎を各種族の中に蒔けり。然れば神はアウラアムを以てエキペト人およびペルス人(當時アウラアムはケラルに住せしが聖金口は其國に住める民をペルスと名づけたり)を敎へ、イズマイリ人及び多くの他の人民をばアウラアムの子孫を以て敎へ、メソポタミヤに住せし他の人民をばイヤコフの子孫を以て敎へたり。爾等もし欲せば、全世界の住民が、如何に諸聖人より敎へられしを見るべし。尙彼等以前には洪水及び言語の混淆は充分に彼等の靈を皷舞することを得たり。實際時日の經過すると偖に或事件を忘れざるが爲に、事件の行はれたる場所に其事件より名稱を附することあり、即ちワビロンは言語の混淆より斯く名つけられたるなり、是れ之を聽く者が、名稱に導かれつゝ事件の根源に溯りて神の能力を識らん爲なり。然れば又西方の住民等はエギペト人と貿易をなしつゝ凡ての事を習へり。然れど古代及び太初にありては世界の部分たる西方に人民の住する者多からずして、其大部は東方に住居せり。然れば又アダムは東方に出で、ノイの子孫も東方に住居し、建塔後も彼處に住居し、住民の大部は東にありき。神は各種族の中に人民の敎師を起せり——ノイ、アウラアム、イサアク、イヤコフ、メルヒセデクの如き是なり。故に預言者ダウィドも惡しき生活をなす人々

に對ひて諸聖人と偕に生せし事件を記念して『爾等主が其聖人を析ちて己に屬せしを知れ』と曰へり。『析ちて己に屬せしむる』とは何の意なるか。彼に從ひし者を驚くべき者、著しき者、有名なる者、光榮なる者となしたるとなり。然れば神の役者及び役者と偕にありし事件によりて主の能力を知れ。預言者は唯神幸福を賜へり」とは云はずして、大なる光榮全く待たざりしとを賜ひしを顯しつゝ『析ちて己に屬せしむ』と云へり。アウラアムと偕に亦斯くの如くありき、即ち神はアウラアムに其妻を汚されずして歸しゝのみならず、アウラアムを有名なる者となし、彼が毫も不快を受けざりしのみならず、彼をしてエギペトに於て名譽ある者とならしめたり。彼の義の爲に彼と偕にありしと二あり、一は彼が毫も不快を受けざりしとにして、一は意外にも彼が奇異なる狀態を以てエギペトより出でしとを聞ける者の利益となりしとなり（創世記十二章）。三少年、獅子の口にありしダニエル及び大魚の腹中にありしイオナと偕に亦斯くの如くありき、神は常に光榮を以て人々を救ふも、其救はるゝは一般人民にあらずして諸聖人なり。

七。爾は預言者が如何に神を知ることを敎ふると共に救贖の希望を神の仁慈の上に置くべきのみならず、己が善行の上に置くべきとを勸めつゝ、善行を以て生涯を

送るべきことを教誨するを見るか。『我籲べば主は之を聽く』。預言者は主が聖人を『析ちて己に屬したり』と言ひて、此事に止らずして幸福の他の種類をも示せり。彼は其如何なる種類を示したるか。常に神を己の代戰者・佑助者・斷えざる保護者となすべきと是なり。預言者の意に謂らく、神の聽き給ふは、吾人が一度のみならず、二度又は三度のみならず、乃ち常に彼を呼ぶ時なりと。視よ、愛にも亦如何なる迅速を以て聽かるゝかを。彼は前に『吾が義の神よ、我が籲ぶ時、我に聽き給へ』(二節)と曰ひしが如く、愛にも亦『我籲べば』と云ふ。

爾は云はん、何によりて多くの者は數々聽かれざるかと。其聽かれざるは無益なることを願ふに由る。斯る場合に於て聽かれざるは聽かるゝに勝れり。是によりて吾人は聽かるゝとも之を喜ばざらん、聽かれずとも之が爲にも神を讃揚せん。實際吾人は無益なることを願ひて聽かれざる時は、願ふ所を受けざるよりして却て益を得ん。又吾人は往々不注意にして祈ることあり、斯る時は神は賜を猶豫し、大なる熱心を以て祈りすべきを吾人に教ふ——而して此事や重大なる益たり。主曰へり『爾等善き賜を其子に與ふることを知る、況や』與ふることを能し、與ふべき時と何物を與ふべきを知り給ふ『爾等の父をや』(マタイ伝七の十一)と。パウルも願ふて受けざりしことあり

き、その無益のことを願ひたればなり（コリンフ前書十二の八）。又モイセイも願ひしかど、神は彼にも聽かざりき（出埃及記三の廿二）。然れば吾人は願ひて聽容れられざる時も退くことなく、憂悶することなく、力を弱むることなくして熱心に願ふことを續けん、神は凡てを吾人の利益となせばなり。『怒るも罪を犯す勿れ、榻に在るとき爾等の心中に謀りて己を鎭めよ』（節五）。我は前に云ひし事を今も亦云はん。預言者は聽者を導きて神を知らしめんと欲するが故に、彼等の靈を疾病より自由にせんとを力む。彼は放肆なる生活が、高尚なる教を當然に受くるが爲に障害となることを知れり。パウルも『我爾等に語りしこと、神に屬する者に於けるが如くするを得ずして、肉に屬する者に於けるが如くせり』（コリンフ前書三の一）と曰ひ、又『我爾等を養ふに赤子に於けるが如く、乳を以てして糧を以てせざりき』（全上三の二）といひ、又『此に就きては、我等爾等に多く言ふべき事あれども、爾等聽くに鈍くなりたるに因りて解き難し』（エレイ書五の十一）といひて此事を顯せり。又イサイヤは『彼等は我を尋求め、我が途を識らんとを好む、義を行ひ神の法を棄てず』（イサイヤ書五十八の二）と云ひ、オシヤは『爾等義を生ずる爲に種を蒔き、憐憫に從ひて收獲れ』（オシヤ書十の十二）と云ひ、パリストスも亦教へつゝ『凡そ不善を作す者は光を惡みて光に就かず』（イオアン福音三の廿）と云ひ、又『爾等互に榮を相受け、獨一の神

よりする榮を求めずして豈信ずるを得んや』（イオアン福音五の四十四）といひ、又『親の斯く言ひしは、イウデヤ人を懼れしに因りてなり、彼等は會堂より黜けられざらん』（イオアン福音九の廿二）といひ、又『多くの者は彼を信せり、惟パリセイ等の故に因りて之を顯さゞりき』（イオアン福音十二の四十二）といへり。而して何處にありても放肆なる生活は眞理を當然に受くるの障害となる。瞳子に聚りし膿の目の光を盲ならしめ、之を暗ますが如く、惡癖にて占領されたる知慧は、吾人の靈の中に於て暗くせられ盲とせらるゝなり。

故に視よ、預言者も之を知りて『忿るも罪を犯す勿れ』と云ふ。彼は益ある怒を輕蔑せず、不義不注意なる人々に對して向けらるゝ時には益ある憤を排斥せざれども、彼は不義なる怒、無分別なる憤を排斥す。

モイセイは德義に就きて談話を始めつゝ先づ『殺す勿れ』（出埃及記二十の十三）てふ誡を立てしが如く、この預言者もまた敬虔の則を知りし程に斯くなすなり。

モイセイは殺人を禁じたれども、預言者は殺人の原因たる怒を滅さんとす、怒は殺人罪の根にして又源なればなり。是に依りてゝリストスも怒を亡さんと欲して『凡そ故なくして其兄弟を怒る者は火の地獄に干らん』（マトテイ福音五の廿二）といへり。爾は『忿るも罪を犯す勿れ』てふ言と『故なくして怒る』てふ言との間に多少の差あるを見ん——何となれば正義にして怒ることもあれ

ばなり。然ればパウルはエリマを怒り、ペートルもサプフィラを怒れり（使徒行實五の十三）。我は單に之を怒とは名つけずして、審知配慮及び能く管理することと名つく。父の子を怒るも子の爲に慮りてなり。己の爲に復讎せんと欲する者は空しく怒るも他人を矯正せんと欲する者は凡ての人々よりも謙遜なり。然れば神に就きて云ふ時は、神も亦怒ると雖も、唯其怒るや復讎の爲にせずして吾人を矯正するが爲なり。吾人も亦神に法らん、即ち斯くの如くにして復讎するは神の事なれども、否らずして、復讎するは人の事なり。然れど神は惟義しく怒ることを以て吾人と異るのみならず、神の怒は或情慾的刺激にあらざることに於ても吾人と異れり。然れば吾人も亦空しく怒らざらん。吾人に怒を許すは、吾人の罪を犯さん爲ならず、人の罪を犯すことをも止めん爲なり、其怒の吾人の中に情慾となり、疾病とならん爲にあらず、情慾を療すに力めん爲なり。

八。惡癖の治療にして害となり、他人の傷を療すべきに却て自身に傷を負はゞ、惡即ち其惡癖の如何に大なるかを想ふべし、是れ猶ほ何人か手に鐵を採り他人の腐敗せる局部を切らんとして、之を以て空しく己を伐ちて全身に傷を負ふ者の如く、或は舵手が暴風の襲撃を防ぐべき楫を以て船を沈むるに似たり。怒も亦斯くの

如し怒は催眠より吾人を警醒し、靈に勇氣を傳へ、凌辱めらるゝ者の爲に最も強き憤を吾人に生じ、凌辱むる者を嚴責する者と吾人をなさんが爲に益あり。是故に預言者は『忿るも罪を犯す勿れ』とは云ふなり。もし此事にして能はざりしとならんには、彼は之を誡めざるべし、何人も能はざることを誡めざれば也。斯くの如く彼は使徒の誡命及び福音の智なる教誨を與へ、又パリストスと同しく云ひ、且つ他の教誨をも附加へて『榻に在るとき爾等の心中に謀りて己を鎮めよ』と曰へり。此言は如何なる意味なりやっ此等の言は不明なるが如し。彼曰く、爾は晩餐の後爾が寢ぬるに行かんとする時、寢臺に横はらんとする時、諸人の爾の前にあらずして大なる平安の近づく時、何人も爾を不安ならしめずして深き靜肅のある時に於て良心の裁判を始め、良心より答を催せ、凡そ爾が一日の間に人を欺かんことを考へ出し、或は奸計を構造し、或は放肆なる希望を擅にしつゝ惡念を懷きしことあらば、斯くの如き平安の時に於て此等のことを目前に露出し、良心を立てゝ此等惡念の裁判者となし、此等の惡念を亡ぼし、之を裁判して罪を犯す所の靈を罰すべし。『己を鎮めよ』てふ言の意味は斯くの如し、之を換言ゆれば、爾等が甚心の中に謂ひし所のことを鞫問し、之を悲め、即ち爾等が有せし所の凡ての惡念を、爾等が榻

にある此平安の時に於て搔き裂きて罰すべし、朋友も爾を不安ならしめず、僕婢も爾を憂へしめず、多くの事も吾人を誘惑せざる時に於て過去りし日の行爲を計算すべし。何に由りて彼は言と行とのことを云はずして惡しき思に就きて言ひしか。是れ彼の敎誨の豐富なるによる。實際に若し惡念が行爲に移らざる樣惡念を罰せざるべからずとせば、況て斯る行と言とに就きて心を傷むべきは素より當然なり。宜しく爾は毎日斯くすべし、人よ爾は尙に行ひし罪を想出さずして眠る勿れ、斯れば爾翌日において必ず同一の罪惡を容易に行はざらん。爾は忘れたるが爲に故障の起らざる樣僕より計算の要求なくとも、二日を經ずして計算をなすが如く、己の行に就きても毎日斯くの如く行ひ晩に於て靈より計算を要求し、罪なる思を審議し、之を樹の上に、懸くるが如くに懸け、以后斯くの如きことを爲さゞる樣に罰し且つ命せよ。爾は預言者が如何に巧妙なる治療即ち率先的及び矯正的治療を用ふるを見るか。罪に陷らざるべきを敎誨する所の『怒るも罪を犯す勿れ』てふ言は率先的治療の代りとなり、又『榻に在るとき爾等の心中に謀りて己を鎭めよ』てふ言は矯正的治療の代りとなる。是れ預言者は犯罪者に敎ふるに其犯罪後自ら行ふべき治療を以てするなり。吾人も亦如何なる困難をも

顯さゝる治療を用ひん。爾の靈若し耻ぢ且つ攪亂れて罪を記憶するに堪へざる時は靈に告げよ、爾が罪を記憶せざることは毫も爾に益なし、否却て一層大なる害あらんとす、何となれば爾若し今自ら罪を記憶せざれば、彼の時爾の諸罪は衆の眼前に顯されん、爾若し今諸罪を記憶せば速かに諸罪より救はれ、容易に他の罪に陷いらざらん。實に靈の再び斯る試驗、定罪、刑罰に服せざるが爲に晩の審判を恐れつゝ諸罪に對して大に躊躇せん、而して吾人若し唯一ヶ月間常に斯くの如く行はゝ、遂には此試驗より益を得て善行の習慣を得るに至るべし。吾人は又斯る幸福を輕蔑せざらん。爰に此裁判所の前に己を立つる者は、彼處に於て重き責に服せざらん。使徒曰へり『蓋若し我等己を辨へしならば審を受けざりしならん、然れども審せられて主より懲を受く、世と與に定罪せられざらん爲なり』(コリンフ前書十一の卅一、卅二)と。

然れば吾人は審かれざるか爲に之を爲さん。『義の祭を獻げて主を恃め』(六節)

爾は預言者の非凡なる勸告を見るか。その完全なる教誨を見るか。預言者は聽衆の罪を犯したるが爲に之を責め、彼等をして以前の如く斯る行をなすに急かざらしめ、正義の裁判所を立て、行爲の計算を催し、次で善行を行ふに彼等を導くなり。爾等の知れるが如く、唯惡を制するのみにては足らず、乃ち善行をも力めざるべか

らず、何となれば彼は次に『惡を避けて善を行へよ』(聖詠三十の十五)てふ教戒を垂れたればなり。罰に服すべきは曾に惡癖を行ふことのみならず、善行を行はざるとも亦實に罰せらるべしとす。然れば饑うる者に食はしめじ、渴ける者に飲しめじ、裸なる者に衣せざりし者は、奪はず、貪らず、人のものを取らずとも、施濟を爲さゝるが爲に永遠の罰と無限の苦とに渡されん。此によりて吾人は惡を制するも、之と同時に善を得じ、又善行をなさゝれば救はれざることを學ばん。

九。視よ、預言者は何によりて衷心の痛悔を以て聽衆を惡癖より遠ざけ、之をして善行を行ふに最も堪ふる者となし、內部の痛傷によりて靈を柔和なる者となし、靈の殘酷を柔らげ、義に就きて述べつゝ『義の祭を献げて主を恃め』と云ひしを。『義の祭を献げよ』とは何の意なるか。義を得義を献せよの意なり、義の祭は是れ神に對する至大なる供物なり、是れ神に悅ばるゝ献祭なり、是れ甚く神に適ふの献物なり、是れ羊及び犢を屠るとにあらずして、義なる行を爲すとなり。爾は教會の生活が如何に古代より預め畫かれ、又感覺的献祭の代りに靈的献祭の要求せらるゝを見ん。爰に彼が義と名つくるは、我が前に言ひしが如く、善行の個々の狀態にあらず、吾人が善を行ふ凡ての者を義人と名つくると等しき善行を云ふなり。

此献祭は金錢を要せず、刀をも、祭壇をも、火をも要せず、又烟・臭氣・灰をも要せずして、唯之を献ずる者の心を以て行はる。此献祭の爲には貧究も障害とならず、資本の不足、場所其他之に類するものも亦妨碍とはならず、乃ち爾は何處に在らんも、自ら司祭となり、祭壇となり、刀となり、犧牲となりて、之を献ずることを得。智なる献祭と靈的献祭とは斯くの如し、此等は如何なる外部の準備をも要せずして甚だ便利に行はる。『主を恃め』他の譯者は『主を信ぜよ』（オリゲンの『六ケ國聖書對譯』の中に引用さるゝ不明の譯者以下皆單に「不明の譯者」となす）となす。義なる生涯によりて主の仁慈と恩惠とを受けたる者は主を以て至大なる代戰者、勝たれぬ佑助者となし、大なる助成を彼より受く。爾は彼處に顯さるゝ此献祭の結果を見るか。爾は献祭より直ちに生ずる諸善の寶藏を見るか。實際神を己の佑助者となす者は何人を畏るゝか。何人をも畏れざるなり。神を恃み、神に信頼するは是れ重大なる善行なり。預言者は義と偕に左の善行、即ち神を信じ、神を恃み、世俗の何事にも依頼せず、乃ち之に似たる凡てのより己を遠ざけつゝ思想を以て神に懇着することを吾人より要求す。實に現世の事物は夢の如く蔭の如し、否其よりも一層虛しきものなり、現世の事物は顯るゝや否や已に消滅し、此を有する者に多くの不安を與ふるも、神に於ける希望は永遠不易・不變・不動にして圓滿

なる安全を與へ、注意と適當なる配慮とを以て此希望を持する者を勝たれさる者となすの力あり。『多の者は言ふ、誰か我等に善を示すや、主よ、爾の顔の光を我等に顯し給へ』(七)節。預言者は德義に關する敎誨を終りて、神を讃ることに導き、惑へる靈を覺すに全力を用ひ、特に預言者自らにありし事、及び神が聖人に就きて慮ることよりして神の吾人の爲に配慮し給ふことを證し、最も弱く且つ愚なる人々のなしたる或攻擊を顯して『多の者は言ふ、誰か我等に善を示すや』と曰へり。之を言ふは、能く思考し得る正直剛勇なる少數者にあらずして、不法・無智・無識なる群衆なり。『誰か我等に善を示すや』てふ言は何を示すや。或は神の照管を誹謗し、或は快樂・平安・財貨・名譽・權柄を愛し、之に戀着するよりして「何處に神の善あるか」と云ふ所の人あり。我は貧究・疾病・不幸の中にありて落膽せず、我は非常なる艱難と讒言および惡口を忍耐するに、他の者は幸福・奢侈・權柄・名譽・財貨の中にあり。彼等の中の或者は眞の善即ち善行・睿智に注意せずして、唯此等の幸福をのみ求むるも、或者は我が前に述べたるが如く、之より神の照管を誹謗して此世に斯る不法の存し、斯く多くの者が欠乏・艱難・而も非常なる艱難を受け居るに、何處に神の照管あらんや。神が吾人の爲に配慮するの證何處にありやといふ。

然れども斯く言ふ者は、猶日中青天なるに際して太陽を見んことを求め、其光を疑ふ者と同一なり。預言者は之をも示し、直に決答を與へて『主よ、爾の顔の光を我等に顯し給へ』と曰へり。彼は『顯はれたり』又は『輝したり』と云はずして『顯し給へ』と云へり、即ち表面に畫かれたる者は衆人の爲に明瞭にして、何人にも隱るゝを得ず、又光に照らされ、光線を反射する顔は何人も之を知らざるを得ざる如く、爾の照管も亦之を知らざるを得ず、顔に表されたる光、即ち印せられ及び畫かれたる光の衆人に明かなるが如く、爾の人を愛する照管も亦之に同じとの意を顯すなり。彼は爰に保證・配慮・佑助・照管を光と名づく。彼は之を言ひて次に引證せり。如何なる證を引きしか。曰く『爾は我が心に樂を滿たせり』と。彼は無智なる人々を責め、智にして强健なる人々より神の照管の證を取りて『爾は我が心に樂を滿たせり』といへり、即ち吾人に推理し、此世の事物を輕蔑し、眞實にして正確なる事を知るべきを敎へ、善良なる希望を以て吾人を高め、來世の生命に導き、幸福を樂むに先ちて幸福の希望を以て吾人を飛揚せしめたり。彼が斯く言ひしは、宜なり。

十。若し夫の相續を受け、或は大權を得んことを望む者は、之を受くる時のみならず、

之を實に受くるに先ちて希望を以て活かされ、而して此等の時に於て其希望より大なる喜を生せば、況て永遠き不死の國及び「目未だ見ず、耳未だ聞かず、人の心に未だ入らざる」(コリンフ前二の九)幸福を待つ所の者は果して如何なる狀態に在るを想ふべし。然れば彼は『我が心に樂を滿たせり』と云ふ。神が當時既に斯る幸福を準備して之を傳へたるは其至と大なる照管の作爲たりしなり。最も惡なる人、肉の人、及び地に縛られたる人の此事に注意せずして不滿足と混亂とを感ずるは、約束せられたる神より生せずして彼等の無智より生ず。而して彼は單に『樂を滿たせり』とは云はず『我が心に』と云ひて、此樂の外部の事物より來らず、奴隷より來らず、金錢より來らず、衣服より來らず、贅澤なる食卓・權威又は美麗なる住居より來らざるとを顯せり。此等のことは心よりせずして唯目よりす。此等の幸福を得たる多くの者は、生活をすら生活とせず、多くの經營より疲勞し、師えざる恐懼を以て搔裂かれつゝ、己が靈に苦惱の爐を搖ふなり。然れど預言者の所謂樂は現世の幸福の中にあらず、智なる心、非肉のとを思考する無形なる靈の中にあり、若し現世の幸福にして爾を樂ましめなば、其幸福の中よりも神の照管を悟れ、唯現世の幸福よりも來世の幸福の最も卓絶し、最も鞏固不變なるとを知れ。爾もし富と幸福とを利用するとにして爾に神の照管の在る所を承服せしめなば、況て天の富は爾を承服せしむべし。而して爾若し「何故に天の幸福は唯希望の中にありて實際に知れざるか」と云はゞ、我は云はん、吾人信者は此等の希望の中にある幸福を以て見ゆる幸福よりも著しきものとなす、信仰の承服は斯くの如きものなればなりと。爾尙「何故に吾人は現世に於て報酬を受けざるか」と云はゞ、我は云はん、現世は勞働・苦行すべき時なるも、來世は榮冠及び報賞を受くるの時なりと。勞働と苦行とは短かき、而かも速かに過去る現世の生命の爲に定められ、報賞と榮冠とが不死にして老いざる生命に迄延引されたるは、是れ神の照管の然らしむる所なり。然れど多くの者の靈弱きによりて、神は感覺的幸福をも彼等に賜へり。神がイウデヤ民に感覺的幸福を賜ひて之を導きたるが如き是なり。彼等は益〻富み、長壽にして如何なる疾病もあらざりき、敵を亡ぼすとと深き平安・戰利品及び勝利・善き子を生むこと、多くの子を生むと、其他之に似たる凡てのことは神に從ふ者に賜はりたり。然れども吾人を天に招き、此世の幸福の輕蔑すべきを說き、彼の世の幸福の愛すべきを說き勸め、世の凡てのとより吾人を脫離せしむる吾人の主イエスス・ハリストスの來りし時は、現世の幸福は正しく減縮され、凡ての富は未來の幸福の中に込め

られたり、蓋し吾人は完全なる者となりたればなり。斯くの如く小兒の未だ幼少なるや、父は玩具・衣服等を以て娛ましむるも、其成長するや之に他の或大なるものを與ふ、例令ば彼等に小兒的の名譽を避けしめて裁判所に於ける發言權、王の宮殿に勤むるの名譽・權威を與へ、又頭領たり、市の顯職たらしむるが如き是なり。神も亦恰も斯くの如く行へり、即ち吾人に小なる事及び小兒の事を避けしめんと欲して天の幸福を約せり。之によりて變り易くして速かに移り行く所の幸福に戀着せず、又小心なる者とならざれ。然れど彼は此等の幸福をも全く爾より奪はざりき。肉を着たるもの體の生活をなす者には此等の幸福の欠くべからざるが故に、かれは此等の幸福をも裕かに吾人に賜ふなり。故に預言者も神の此照管の狀態に就きて、高尚に、怜悧に判斷し『吾が心に樂を滿つるは』と言ひて『彼等が餅と酒と油とに豐なる時より勝れり』と附加ふ。預言者は又此等の言を以て見ゆる物に於て少からず顯す所の神の照管を述ぶ。餅と酒と油とに就きて云ひ、其裕なることに就きて云ふ時は、雨をも、氣候の宜しきことをも、發育成長せしむる地心をも、空氣の潮流、太陽の上昇、月の變化、星辰の羅列、春夏秋冬、農夫の熟練、武器の準備其他多くのことをも了解せしむ、何となれば此等の助なければ、果實は發育して成熟し得ざればなり。斯くの如く彼は餅と酒と油の名を云ひて、感覺的事物に於て神の見ゆる照管の海を示しつゝ、部分より全體に歸決する發端を智者に與ふ。

十一。視よ、何によりてパウルも其一説話に於て神の照管のことを論じつゝ、此より證を取りて『我等に天より雨を降し、豐作の時を與へ、糧と樂とを以て我等の心に盈たしむ』（使徒行實十四の十七）と曰へるを。預言者は余分なることを云ふを望まず、他の凡てのこと、即ち地の果實・樹・果・植物の種・類・種子の種・類・草・牧場・花・庭園等の種類に就きて述べず、唯吾人の生活のために必要なる事物の集合名稱を用ひて他物をも理會せしむ。神は此等のものを獨り吾人に與ふるのみならず、裕に年毎に與へ給ふなり。而して神が往々己の賜を與へざるとあるは却て怠惰なる多くの人々を鼓舞し、此等の幸福を神に願はしめつゝ、復び己が照管を示さるゝ也。雨を降すは神の所爲にあらず、偶像の所爲なりと云ふ人あらば、吾人は之に問はん、爾等は何處より之を知りしかと。彼等は云ふ、詩人等はゼウス雨を賜ふ（ゴメルの『オデッセイ』中の詩歌拔萃第十四及オクリトの『牧歌』第四及び其他）といへりと。然れども彼等自らゼウスは姦淫者にてもあり、子女の敗壞者にてもあり、父殺にてもありと云ひ、其他少なからざる犯罪を彼に歸す。然るに彼等は云ふ、是れ正しからずと。然らば彼雨を賜ふと云ふも正しからず。爾もし後説を信用せば必

ず、前説をも信用せざるべからず、而して若し前説を排斥する時は、其と偕に後説をも排斥せざるべからず。吾人は神の能力の證者を立てゝ、通例人々が神に就きて云ふ所の凡てを受く。是に由りて爾は必ずゼウスの姦淫者たり、又彼等がゼウスに歸する他の犯罪者たるとをも容さゞるべからず、而して斯る犯罪は神聖なる能力に適せざるが故に、彼は神にあらずと承服ぜざるべからず。然れども縱し爾等は之を受くるとを欲せざらんも、斯る空談は自然に消滅し、斯る虛僞は自ら己を責めて全く詩人を非難せん。而して詩人の非難さるゝ時は、明かに爾等の凡ての判斷も効力を失はん。爾等の知れるが如く、爾等の一哲學者（プラトンの『クラテラ』の中に）の言へる如く、彼等は諸神の名を發明して名つけたり。爾若しこれ譬喩なりと云はゞ、我は爾に問はん、ゼウスは何ものたるかと。彼等曰はん、空氣よりも上に在りて最も燃ゆる所の物、精氣と名づくる部分なり、この物は燃え且つ燒くるものなりと。然らばゼウスは或智なる及び自由なる者にあらずして無智なる者なり。空氣の本質たる、衆人の知れるが如く、智識をも思想をも有せざるを以て、凡ての者はゼウスの石よりも非感覺的のものなるとを知らん。斯くの如くゼウスは虛無となり、其本體も亦消滅す。

ゼウスもし空氣たり、而して空氣は吾人が前に述べしが如きものなる時は、空談も亦其効力を失はん。ゼウス若し空氣なる時は、何人かの父たる能はず、又（詩人の）誉されしが如く、或物例令ばアポルロンおよびゼウスの子と名つくる太陽を生まざりしなり、爾等の知れるが如く、太陽は如何なる思想をも、判斷をも、智慧をも有せず、乃ち太陽も亦神が始に太陽を從はしめたる律法を以て統治め指導かるゝ物質的造物なり。次に雨の生ずるは精氣よりするにあらず、水を受くる雲より、若くは海より、或は預言者等の言ふが如く、天の上にある水よりす。爾もし預言者を信せずば、吾人は預言者等が感神的の人なると、彼等は己より何事をも云はず、乃ち神聖なる明證及び其言ひしことの天の恩寵の感應によるとを全く證據立つる所の明證を示さん。爾舊新約の預言を見ば、預言者等の言ひし凡てのことは、實際に行はれ、凡ては事件を以て確實にせられたるを知らん。然れば預言者等がイウデヤに就きて言へる凡てのことは行はれ、而して此行はれしとは、舊約に於てはハリストスに就きて預言されたる事と同じく衆人に明かなり、是れ特に舊新約書の神出なるとを證す。聖書にして神出なる時は、聖徒の中に神に就きて言へることは悉く皆眞實なり。是に由りて神の照管を疑ふことなく、神は人々の間に善者惡者のあるに拘らず、衆人に世界と太陽とを賜ひ、又等しく雨を降す所の其配慮や

驚くべし。而して神若し或者を艱難貧窮に委する時は、彼等の靈を矯正し、之をして一層智なる者となさん爲なり。爾等富は不注意なる者の爲に惡癖を行ふの媒介となり、而して貧は睿智の母にして、能く此事の毎日實驗に顯るゝを知らん。貧者は富者よりも一層善良にして憐憫なり、剩へ身體も亦著しく富者より健康なり、是れ貧窮は正しく彼等の體と靈とを整ふるに由る。『我安然として偃し寢ぬ、蓋主よ、獨爾は我に無難にして世を渡らしめ給ふ』(九節)。視よ、神に從ふ者を平安を以て樂しましむる神の照管の他の重大なる狀態を。『爾の律法を愛する者には大なる平安あり、彼等に躓なし』(聖詠百十八の百六十五)。何ものも通例神を識ることなく及び內心にある情慾の戰を亡ぼし且つ人が已と戰ふを要せざる善行を得ることの如くに平安を與ふる者なし。人若し眞に斯る平安を以て樂まざれば、最も深き平安の外部より彼を繞圍むとも、彼を攻擊する敵のなくとも、彼は諸敵に攻擊せらるゝ凡ての者よりも世界中最も不幸なる者なり。

十二。 スキフ人、プラキヤ人、ザルマト人、印度人、マウル人、其他の蠻民が其慣習によりて戰をなすも、人の靈の中に巢を營む所の不適當の念慮、惡望、富を愛すること、權勢を翼ふと、世事に戀着すると程には殘酷ならざるなり。實に斯くの如し、何となれば戰爭は外部のものなれども、此は內部の戰なればなり。而して內部に生ずる艱難は、外部より生ずる艱難よりも一層惡しくして、通例大害を蒙らしむることは、何事に於ても見ることを得。然れば內部に生ずる蟲は、最も樹木を害し、外部より來る疾病よりも、內部に生ずる疾病は體の健康と强壯とを損じ、外敵よりも內敵能く城市を破壞す、之と同じく通例外部より襲來する所の艱難は、內部に生ずる疾病程には靈を害せざる也。然れども神の畏を有して全く此戰を鎭め、情慾を制し、種々の猛獸即ち惡念を縊殺して之をして內部に隱るゝことを許さゞる者は、最も潔く、最も深き平安を以て樂まん。此平安はハリストス來りて吾人に賜へり(イオアン福音十四の廿七)パウルも各書札に於て『願くは恩寵と平安とは、神我等の父より爾等に賜はらんことを』(コリンフ前書一の三ガラテヤ書一の三其他)といひて、信者に此平安を希望せり。此平安を有てる者は、敵又は野蠻人を畏れざるのみならず、惡魔をさへ畏れずして惡鬼の諸軍を嘲笑し、何人よりも剛勇なる者となり、艱難を意とせず、疾病にて疾勢せず、不意に如何なる人々と遭遇すとも心を亂すことなし、何となれば斯る人は此等のことを勇しく甚だ容易に忍耐する所の靈强壯にして健全なる靈を有すればなり。吾人は此事の正しきことを承服せしめんが爲に例を示さん。或猜忌心ありて何人も之に對立する者なき人

ありとせん、之によりて彼は如何なる利益を受くるや。彼は自ら己に反抗し、劍よりも危險なる想像を逞うして、凡そ見る所のことを激怒し、彼と相遇ふ人を見る毎に苦み、何人に對しても善き心地を感ぜずして、唯[illegible]悉くの人を己の敵となす。彼が人類の公敵として狂暴を逞うし、自己の內部に斯る戰爭と數知れぬ程多き鎗と劍とを持し、又己に似たる或者が善き考と幸福とを受くるを見んよりも、寧ろ萬死に服するを望みて四方に徘徊する時は、外部の平安彼に何の益かあらん。斯くの如く富の慾情に渡されし者は、己が靈に無數の戰爭・格鬪・混亂を生じ、其靈は恐懼不安の中にありて瞬時も安穩なることなし。然れども情慾を脫却したる者は、斯くの如きものにあらず、彼は却て靜なる港にあり、睿智を以て樂み、斯くの如き如何なる不快にも服せざるなり。故に預言者は自ら神の照管なる此賜を樂みつゝ『我安然として偃し寢ぬ』と言ひ、而して此平安を有せざる衆人の爲には、一般の港さへ示されず、乃ち其港も蔽はれ、睡眠及び夜の港なることを言ひ顯しぬ。情慾は天然に賜はりたる休息をすら破り、己が殘酷なる壓制を以て全く睡眠の力を征服す。嫉妬・憎惡・貪慾・掠奪に心を奪はれたる者は、自己に凡ての戰爭を有し、內部に隱るゝ敵を有す、彼等は何處に行くとも此戰を避くることを得ず、假令ば彼等は家に在るも、寢床に橫はるも、常に矢の雨・怒濤よりも强き混亂に服し、戰爭に於て遭遇するものよりも一層殘酷なる殺人・號哭・呻吟及び其他の艱難を受けん。然れども義人は斯くの如きものにあらず、彼は勇みつゝ平安を樂み、夜間に於ても大なる滿足を以て眠に渡さるゝなり。『我安然として』とは何の意なるか。言ふ意は、靜思反省して無數の心痛に制せられず、種々なることを思はず、己か思想を世界中に散らさず、乃ち己自らのこと、己を益することを思ふことなり。『蓋主よ、獨爾は我に無難にして世を渡らしめ給ふ』。此言の意味は、我は未來の幸福及び爾に對する希望を以て我が凡ての情慾を抑制せりとなり。パウルも之と同樣なる狀態を以て曰へり『蓋我等が暫時の輕き苦は、極めて盛なる永遠の重き光榮を我等の爲に備ふ、我等見ゆる者を顧みずして、見えざる者を顧みるに緣る』(コリンフ後書四の十七、十八)と。如何に困難なる事も神より報酬を望むによりて容易なる者となりしなり。是故に彼は『無難にして世を渡らしめ給ふ』とは云ふなり。『獨』てふ言の中にも大なる訓誨の力を含蓄す。

十三。『獨』とは何の意なるか。惡癖ある人々にあらざるを云ふなり。言ふ意は、我此平安を以て爾の前に樂み、又放蕩なる人々を避けて獨生活すとなり。こは甚

だ正當なることなり。體は腐敗せる空氣の傳染毒に感染して數〻死するが如く、靈も亦惡人と交際するによりて數〻害を受く、又健全なる目は病者を見て打たれ、疥癬を患ふる者は己が疾病を健康なる人々にも傳染せしむるが如く、靈も亦惡人と交際するによりて屢〻同樣なることに遭遇することあり。是に由りてパリストスは斯る人々を避くるのみならず、彼等を排斥すべきことをも誡めて、『若し爾の右の目爾を罪に誘はゞ抉りて之を棄てよ』（マトヲイ福音五の廿九）と曰へり、此誡に云ふ所の目とは肉眼を指すにあらず――何となれば靈にして健全ならば、目は何の惡事をもなし得ざればなり――乃ち其救贖を一層安然ならしめん爲には吾人に近くして恰も吾人の肢體の如くなりし友と雖も、吾人を害する者ならば友誼を以て尊ぶべからざることを命じたるなり。然れば預言者自らも後に『我曾て僞なる者と偕に坐せず、邪なる者と偕に行かざらん』（聖詠廿五の四）と云へり。イエレミヤも『獨坐して若き時に軛を負ふ』（イエレミヤ哀歌三の廿七、廿八）者を尊べり。箴言の中にも此事に就きて多く言ひ、惡事を相談する人々を遠さくべきのみならず、彼等を避けて之と交際すべからざることを切に衆人に勸說めたり。實際物質的事物が惡しき何物かに觸るゝによりて屢〻害さるれば、況て自由なる者に於ては尙更のことにあらずや。人の皮膚の色と體の健全とは生來吾人に屬すれども、此すらも亦これに反對なる影響によりて害せるゝことあり、之と同じく食慾は天性なるも、是れ亦屢〻病的狀態によりて吾人に失はるゝことあり、其他之に類すること甚だ多し。若し夫れ天然の官能にして變化せば、況て自由なる意望に關することに於てをや。是に由りて吾人は惡人と交ることを以て差程重からざる害なりとせざらん、乃ち其惡人にして妻たり、朋友たり、あるひは、何人たるにも拘らず、先づ第一に斯る人々を避けん。この交際はソロモンサムプソンの如き大なる人々をも亡ぼせり、此交際は全くイウデヤ民をも放肆ならしめたり。吾人は常に猛獸の害を蒙むるも、其害や惡人より受くるものには如かず、猛獸は公然その殘害の行爲を顯せども、惡人等は漸次善行の力を弱めつゝ、感せず聞えざる樣にして每日その傳染毒を播布す。故に主は『凡そ慾を懷きて婦を見る者は、心の中已に之と淫せしなり』（マトヲイ福音五の廿八）と云ひて、破廉恥なる心を以て外物を見ることを禁じたり、惡の傳染や斯くの如く容易に、又斯くの如く迅速なり。而して爾は或市に住まんと欲する時は、其市の氣候に就きて精細に知らんことを力め、其氣候は健康を害せざるか、濕潤ならざるか、乾燥ならざるかを究むべし、然るに靈の事に關しては、靈との交通に入るべき其のものゝ何たるを知らんことを力めず、乃ち何等の吟味をもなさずして單純

に凡てのことを靈に信用せしむ。我に告げよ、爾は斯くの如く靈を輕侮しつゝ赦さるべしと思ふか。爾は思はん、曠野に住居せし人々は何によりて驚くべき者となり、又榮譽ある者となりしかと。彼等が雜鬧と市場とを避け、世の經營の中に擧る塵烟を遠ざかりて住居したるによるにあらずや。爾も市の中に曠野を見出すことを力めつゝ彼等に則れ。然らば此は如何樣にして能ふべきか。爾若し之を能くせんと欲せば、惡人を遠ざけて善人に從ふべし。斯くの如く爾は有害なる人々より遠ざかるのみならず、有益なる人々と交際するによりて、曠野に住するよりも大なる安泰を得ん。爾若し惡人を避けて善人に從ふ時は二倍の利益を得ん、即ち善行を增し惡行を減せん。然れば斯くの如くならんが爲に『主よ獨爾は我に無難にして世を渡らしめ給ふ』と言へる聖詠者に注意しつゝ、斯くの如く行はん。我は愛に光榮權能の今も何時も世々に歸する所の吾人の主イエスス・キリストによりて此等の言を述べ、且つ充分に解釋したるとを信じて此說教を終らん。アミン。

第五　聖詠講話

ダヴィドの詠『相續者の事』。

一。前以て此相續者の受くべき遺產は如何なるものなるか、及び此遺產相續は吾人にも關するものなるかを觀察して、次に此遺產は如何なる場合に於て賜はらるゝかを示さん。遺命によりて相續權の吾人に拒絕されし場合に於て、自己に屬する財產を慮るが如くに遺產を穿鑿し、或は其證書を尋求め、或は之が爲に金錢を費し或は法律を參考し、法規の謄寫をなす等所有勞力を盡くすは、眞に無智なりしならん、又愛に既に靈的遺命のあるあり、吾人の前には凡べての文書開かれ、而も非物質的遺產の橫はるに際して、之を不注意等閑に附するは眞に無智たりしならん。然れば吾人は近づきて文書を開き、其中に錄されし事を熟知して、此遺產は如何なる規約にて吾人の前に置かれしか、又其相續權の本義は如何なるものなるかを觀察せん。主は徒に遺產を吾人に遺さずして、或規約の下に於てせり。然らば如何なる規約の下に遺したるか。主曰へり『我を愛せば我が誡を守らん』(イオアン福音一四の廿一、廿三)と、又曰へり『己の十字架を負ひて我に從はざる者は我に宜しからず』(マトテイ福音一十の三十八)と、其他聖書には尙ほ多くの規約あり。吾人は斯る遺產を受くべき時をも研究せん。此時は現在にあらずして未來にあり、或は之を正確に言ひ顯せば、現在にてもあり、未

來にてもあるなり、主曰へり『惟神の國を求めよ、然らば此れ皆爾等に加はらん』（ルカ福音十二の三十一）と、然れども完く遺産を相續するは彼の時に在りとす。現世の生命は速かに過去り、且つ吾人は爰に尚不完全の狀態にあるが故に、世の立法者が既に成年に達したる相續者に父の財産を讓與するが如く、神も亦斯の如く吾人になし給ふなり。吾人が成全の人となり、圓滿に成長して不朽の生命に移る時は、神も亦此遺産を吾人に讓與し給ふなり。然れど神は爰にも同じく信憑となるべき文書を吾人に遺して、吾人が遺産を受け、又相續權を失はざる樣爲すべきことを語げたり。若し吾人の尚未だ不完全なるが爲に或人を恐れしめ、又我が語げし所にして疑を起さば、現世及び來世に就きて談話しつゝ『我童子たりし時、童子の如く言ひ、童子の如く思ひ、童子の如く謀れり、人となりて後は、童子の事を息めたり』（コリンフ前書十三の十一）と云ひ、又『成全の人と爲り、全き成長の量に至るに迫ぶ』（エフェス書四の十三）と云ふ所のパウルに聽くべし。彼謂らく、吾人は現世に在りて此世を以て養はるゝこと、恰も乳母に養はるゝに等しきも、主の殿に入らんとするや、朽つべき衣を棄て、朽ちざる衣を衣て他の生命に移るなり。多くの人々の相續權を剝奪さるゝは成文の規約に照らして、其遺産相續に不適當なる時にありとす。吾人は今此遺産の如何なるものなるかを觀察せん。此遺産は『目未だ見ず、耳未だ聞かず、人の心に未だ入らざる』所なり（コリンフ前書二の九）。吾人の理解し得ざる事を、如何で吾人は現世に於て利用し得んや。故に此遺産は吾人の爲に來世に保存せらるゝなり。又視よ、神の大なる照管を、彼が現世に於て艱難を定めたるは、是れ其重荷の暫時にして輕くせられん爲なり、又來世の爲に幸福を保存せるは、是れ老いざる生命に於て報賞の永く續かん爲なり。神は此生命をも國と名つく。縱ひ、其言を以て顯されざるも、神が來世の狀態を今我が言ひし如く、或は國と名つけ、或は婚姻と名つけ、或は主權と名つけ、及び吾人が用ふる光明なる名稱を以て吾人に來世を會得せしめつゝ、或は永遠の光榮不死の幸福、何ものも比較し得ざるハリストスと偕にする生命と名つけて像りしことのみは聽くことを得たり。教會の規約即ち相續の規約は如何なるものなるか。此規約は毫も困難なるものにあらず。主曰へり『人の爾等に行はんと欲する者は、爾等も是くの如く之を人に行へ』（マトフェイ福音七の十二）と。爾は神が何の不思議なることをも命せずして、天性の要求する所を命せしを見るか。主曰へり、爾人の爾に行はんことを欲するが如く、自らも行へと。爾人々の爾を讃んことを欲せば自ら人を讃めよ。爾人が爾の所有を竊取ることを欲せずば自ら竊取る勿れ。爾尊敬されんこ

とを欲せば自ら人を尊敬すべし。爾慈憐を得んことを欲せば自ら慈憐を顯せ。爾愛せられんことを欲せば自ら人を愛すべし。爾自己の惡事を聽かざらんことを欲せば自ら人の惡事を云ふ勿れ。又主の表言の如何に正確なるを認めよ。彼は『人の爾等に行ふことを欲せざる者は爾等も斯くの如く之を人に行ふ勿れ』とは云はずして『欲する者』はと曰へり。善行をなすに二道あり、一は惡癖を遠ざかること、一は善行を行ふことなり、故に神は明かに後者を以て前者をも示しつゝ、後者を吾人に示せり。神は『爾自ら嫉む所のことを人に行ふ勿れ』(トビト書四の十五)と言ひて、前者の方法を示し、又『人の爾等に行はんと欲する者は、爾等も是くの如く之を人に行へ』と云ひて、明かに後者の方法を示せり。

二。又他の規約あり。其規約とは如何なるものなるか。己を愛するが如く人を愛することなり。何ものか之より容易なるものあらん。嫉むことは困難にして不安と結合せらるゝも、愛することは容易にして便利なればなり。主もし吾人に、人々よ、爾等猛獸を愛せよと云ひたらんには、之を行ふや誠に困難なりしならん、然れども彼は人々に種族により、出所により、相愛の精神によりて愛し易き人々を愛すべきことを誡められたり、之を行ふに何の困難かあらん。此天性の類似が互に相愛せしむることは、獨り人類にありて然るのみならず、獅子又は猛にありても然るなり。是に由りて吾人が獅子を制し、之を馴らすに際して、吾人と同族の人々を愛せずんば將た如何なる辯解を爲すべけんや。爾等は多くの人々が遺産を相續せんが爲に、自らは強壯の青年なるに、老人の爲に苦役せられ、老人を看護し、常に老人の左右に侍して、老年と伴ふ所の脚痛癱瘓其他老人の疾病より來る凡ての不快を忍受くるを見ざるか。然れど彼處には唯富を得んと欲する一の希望、而も不忠實なる希望あるのみなるも、奚には天あり、又天の前に神の仁慈あり。聖詠の表題には『相續者の事』と云はれたり。此相續者は何人なるか。教會及び其全會員なり、パウロは教會に就きて『我爾等を一の夫に聘定せり、淨き處女としてハリストスに献げん爲なり』(コリンフ後書十一の二)と曰ひ、又イオアンは『新婦ある者は新婚者なり』(イオアン福音三の廿九)と曰へり。然れども通例の新婚者にありては、婚姻の後數日にして其愛情弱まるも、吾人の新婚者は斷えず吾人を愛し、且つ斷えず巳が愛を強む。イオアンは吾人の新婚者の愛の特に強きを顯しつゝ、之を新婚者と名づく。又イオアンが教會を新婦と名づけたるは、啻に之のみならず、吾等衆人に善行と愛とによりて一の體、一の靈たらんことを希望するによりてなり。而して新婦は新婚者を悅ばすが爲に

凡てをなすが如く、吾人も亦生涯斯くせざるべからず。新婦は婚姻の宮殿に移りし其日より、唯如何にして新娶者を悅ばすべきかを慮るが如く、吾人も亦現世の一生涯に於て、如何にして新娶者を悅ばすべき、又新婦の善良なる性質を保守すべきことのみを慮らざるべからず。此新婦に就きてはダヴィドも『皇后は爾の右に立ち、妝ふに金を以てし、其衣は金を織とす』(聖詠四十四の十、十四)と言ひて記憶す。爾は其靴をも見んと欲せんか。新娶者の友なるパウルの言ふ所を聞け、曰く『和平を福音する預備を以て足に履はけ』(エフェス書六の十五)と。其義より織成せる帶をも見んと欲せんか。パウル又爾に敎ふ、曰く『眞實を爾等の腰に束ねよ』(仝上六の十四)と。彼の美を見んと欲せんか。パウル此れ亦パウルより知ることを得ん、曰く『汚或は皺を有たず』(仝上五の二七)と。之に就きて睿智者(ソロモン)の言ふ所を聞け、曰く『我が佳耦よ、爾は悉く麗しくして少しの疵もなし』(雅歌四の七)と。彼の足をも見んと欲せんか。使徒の『平安を福音し、善事を福音する者の足は美しき哉』(ロマ書十の十五)と曰へるを聞け。而して彼が斯くの如く新婦を飾りて、自らは甚悉くの光榮を顯して來らざりしは、誠に奇異にして驚くべし、是れ已の豐なる美を以て新婦を驚かさゝるが爲なり、乃ち新婦にある所の同じ衣服を着け、即ち彼にある『同一の肉と血とを受けて』(エウレイ書二の十四)來れり、又彼は新婦を天に呼ばず、新娶者の新婦に來る作法を守りて自ら上より彼の處に來れり。此事に就きてはモイセイも『是故に人は其父母を離れて其妻に好合へ』(創世記二の二十四)と云ひ、パウルも『此の奥義は大なり、我パリストスと敎會とに於て之を言ふ』(エフェス書五の廿二)と云へり。新娶者は新婦の住所に來り、其血に塗れたる不潔なる裸體を見て之を洗ひ、油を塗り、充分に飲食せしめ、衣服を着せて見遣へん許にせり。新娶者は自ら新婦の爲に衣服となり、斯くして彼を取りて已の處に導く。是れ相續に準備へられたる者なり。預言者は新婦に就きて何ことを言へり。預言者は新婦の保護者なり、而して新婦の前に立つものゝ中より新娶者婚姻彼の受くべき幸福に關して多くのことを彼に預言し、又預告せり。彼は又爰にも新婦に就きて曰ふなり、彼は裁判に於ける辯論家の如く、最初に其相續者に就きて公平なる辯論をなすことを述ぶ。相續する所の新婦は何事を願ふか。吾人は聞かん。『主よ、我が言を聽け』(二節)。新婦は新娶者を主と名づく、是れ賢しき新婦に適當なる言なり。實際同一の天性を有する吾人の間に在りても、妻は夫を已の主人と稱ふ、況て敎會と元來主宰たるパリストスとの間に於てはパリストスを主と名づくるは當然たる也。視よ、何によりて敎會は爰にパリストスを主と名づくるを、曾に新娶者とし

てのみならず、主宰として稱ふるにて、且つ新婦の願を聞かしめん爲なり。新婦の前には相續權(を受くること)あり、而して此相續は新婦が唯誠られたる所を正しく行ふ場合に於て受くるが故に、新婦は約されたる幸福を受け及び相續權を奪はれざるが爲に其佑助者たらんとを彼に請求懇願するなり。是に由りて新婦は『主よ、我が言を聽け』と言ひ、且つ彼は新娶者が彼に賜はんと欲するものを願ふが故に敢て之を言ふも、賜ふ所の者に適はざることを願ふ者は、斯くの如くに仁慈を願ひ得ざりしならん。誰か仇或は己に惡を爲す人々に惡しかれと願ふ時は、是れ人の言にあらずして惡魔の言なり。實際に若し惡魔の詛が主の言の如く」此に過ぐる者は惡よりす』(マトスイ福音五の三十七)る時は、仇に對する祈禱も亦惡魔よりす。然れば爾が『我が言を聽け』と云ふ時は溫柔慈憐にして惡魔の何ことをも有せざる人に適當なるが如くに言へ。

三。『我が呼ぶ聲を悟れよ』愛に預言者が『呼ぶ聲』といへるは、聲の音響にあらずして靈の狀態なり。然ればモイセイは默し居たれども、主は之に『爾何ぞ我に呼はるや』(出埃及記十四の十五)と言へり。主が爾我に何事を禱るやと云はずして、爾何ぞ我に呼はるやと云へるは、是れモイセイが熱切なる心を以て神に近づけるによる。而して預言者は愛にも神の叫のことを云へるにあらず、乃ち心の狀態及び熱心にして神に向ふべきことを言へるなるを爾に見せしめんとて、爾我が呼ぶを聞けとは云はざりしなり。然らば何と云ひしか。彼は『悟れよ』といへり、即ち知れよの意なり。斯く預言者は普通の言を用ひたるも、此言に於て恰も彼は將に言はんと欲する所を顯すが如し。『我が祈願の聲を聽き納れ給へ』(三節)。彼は再び內心の聲を悟らしむ。アンナも斯く呼べり(第一列王紀=サムイル前書十の十三)。預言者は單我が祈禱の聲を聽容れ給へと云はずして『我が祈願の』聲をと云へり、何となれば禱る者は外部の狀態のみならず、內部の傾向によりても、謙遜たるべければなり。祈願ふ者は誣告者の如き言を用ひず、敵の不幸を禱る者は祈願者と云はんよりは、寧ろ訴訟者なり。爾は預言者が如何に祈禱を整へて其祈禱を受くるに堪ふるものとなしを見るか。然れば吾人も祈禱して聽容れられんと欲せば、前以て吾人の祈禱が祈禱となりて、聖詠者の示しゝが如く誣告とならざる樣にすべし、斯くて吾人は祈禱を神に献ぐることを得ん。『我が王我が神や』。是れ預言者の數用ひし言なれども、最も多く之を言ふの特權を有しゝはアウラアムなり、バウルは彼に就きて『神は彼等を恥とせずして、己を彼等の神と稱ふ』(エウレイ書十一の十六)と云へり。相續する所の敎會

も同様の表言を用ひたれども、愛によりて之を用ひたり。教會は單王と云はず己の愛を顯しつゝ『我が王我が神や』と云へり。次に教會は神が教會に聽容る様願ふ所の理由をも述ぶ。此理由は如何なるものか。『主よ、我爾に禱れば なり』と。然れども爾は云はん、誰か神に禱らざるかと。多くの者は神に禱る者の如く見ゆるも、其祈るや人々に示さん爲なり。教會は斯くの如く行はず、一切人のことを忘れて、單神に向ふのみ。『晨に我が聲を聽き給へ』(四節)。爾は熱心と靈的痛悔とを見るか。預言者曰く、我の此事をなす、やはり日の始に於てす、然れば多くの業務を營みて然る後祈禱に近つく者は之を聞くべしと。教會は斯くの如く行はず、乃ち一日の始に於て其日の初果を神に献ぐ。睿智者曰へり『太陽に先んじて爾に感謝す、光の東たる爾に向ふべきとの知られん爲なり』(ソロモンの智慧書十六の二十八)と。爾は己より身分卑き者の爾に先んじて王に叩拜するを許さゞりしならん、然るに太陽の已に神を拜する時に際りて、爾は尚寢ね、造物の首長權を之に讓り、爾の爲に造られたる諸造物に先んじて神に感謝せず、乃ち起きて面と手とを洗ふも、己の靈をば不潔なる者として止む。爾は水を以て體の淨めらるゝが如く、祈禱を以て靈の淨めらるゝことを知らざるか。然れば體よりも先づ己が靈を洗へ。多くの惡癖は汚

點の如く靈に粘着したれば、吾人は祈禱を以て之を洗はん。吾人もし斯くの如くして己が口を保護せば、日々の業務に善良なる基を置かん。『我晨に爾の前に立ちて待たん』。言ふ意は、我場所を變へず、乃ち行を以て爾の前に立たん。斯くの如き人は神に近からん、而して神に近きと遠きとは人自らに關す、何となれば神は何處にも在せばなり。『我爾の前に立ちて待たん、蓋爾は不法を喜ばざる神なり』(五節)。他の譯者は『我は爾が不法を喜ばざる神なるを見る』(不明の譯者)となす。爰に預言者は偶像を指示せるなり、何となれば異教の諸神は斯る人々及び凡ての不法と凡ての惡事とを喜べばなり。『惡人は爾に居るを得ず』彼は爾神に愛されず爾に近づかざればなり。『不虔の者は爾が目の前に止まらざらん』(六節)。爰に預言者は神の惡を惡むことを示し且つ神に近づかんと欲する者に、神の如く惡を嫉むべきことを教ふ、何となれば然せずしては神に近づくことを得ざればなり。己が氣質の善人と異る者にして善人に近づくことを得ずんば、況て神に近づくとをや。又惡人の善人に近づき得ざることに就きては、惡人等が義人に就きて言ふ所を聞け、曰く『我等は義人を見るに堪へず』(ソロモン智慧書二の十五)と。然ればイオアンは牢獄に在りて何人の前にも顯れず、而もイロデアダは

イオアンより遠き處にありしも、彼の婦の爲には堪へられざりき、且つイオアンは死後にも當時壓制者たりし者の良心を苦めたり。然れば縱ひ惡人に攻擊さるゝとも、善を行ふ者は何人も害を蒙りたりと思ふ勿れ、害を受くるは惡を行ふ所の者なり。『爾は凡そ不法を行ふ者を憎む、爾は謊を言ふ者を亡さん、殘忍詭譎の者は主之を惡む』(節七)。聖詠者の之を言ふや、曾吾人に之を開かしめん爲にあらず、數〻之を聽きて新要者の氣質に適ひ、彼に近き者となることを學ばしめん爲なり。然らずんば吾人は上よりの佑助を奪はれん、之に勝る惡しきことなきなり。

四。預言者曰く、其者の、縱し奴隷たり、自由の者たり、王たり、否何人たらんも『爾は凡そ不法を行ふ者を憎む』何となれば神は常に外部の價値によらず、善行によりて己の友を選めばなり。然れども、多くの不遜なる人々は神何事をも惡まずと思ふが故に、預言者は罰の畏をも附加へ、最も恐なる罪人に說話を向けつゝ『爾は謊を言ふ者を滅さん』と言へり。罰は唯神の憎惡に限らず、縱ひ神の憎惡は云ふべからざる罰なれども、神が凡そ謊を言ふ者を滅し給ふは畏るべき罰なり。憎惡は畏るべくして、神に憎惡まるゝは地獄にあるより畏るべしとす、然れども、預言者は理解し得る者の爲に之を言へるも、最も恐なる人々の爲に罰の畏をも附加へたるなり。然れば人よ、或人々の謊を云ひ、人のものを掠奪し、貪に陷りて毫も害を受けざるを見て心を亂す勿れ、不安なる勿れ、神の語げし所は必ず應せん、何となれば神の天性は惡を忌み、常に之を嫉み、之を容さゞればなり、預言者の爰に『謊を言ふ者』といへるは、惡しき生活をなし、不義を行ひ、快樂・不節制・貪慾に耽る者のことなり、彼は此等の凡てを常に不義と名つけたり。『殘忍詭譎の者は主之を憎む』。爰に口には斯く言へども、心には他のことを思ひ、外部には溫柔の狀態を裝ひども實際に於ては狼の性質を顯す所の殺人・詭譎・狡猾に傾ける人に就きて云ふなり、何ものも之に勝る惡しきことあるを得ざるなり。公然たる敵を預防するは難からざるも、己が奸計を隱して惡意を爲す者は、容易に捕へられずして、多くの惡事を行ふことを得。視よ、パリストスも亦何によりて斯る人々の顯れし時に勇むべきことを命じたるを、蓋し斯る人々は『羊の衣にて爾等に來れども、內は殘き狼なればなり』(マトテイ福音七の十五)『唯我爾が憐の多きに倚りて爾の家に入らん』(節八)。教會の中には異邦人・妖術者・殺人者・蠱惑者・詭譎者・僞善者も亦入り、而して教會は神彼等を嫉み之を嫌忌すと言ひしが故に、教會は彼等が己の權利によらず、己の善行

によらず、神の仁慈によりて此等の惡事より救はれ、神の内部の安息に入れられたることを示さんと欲して『唯我爾が憐の多きに倚りて爾の家に入らん』と附加へたり。何人か爾はそれとをなして如何で救を得しやと云はざるが爲に、教會は如何樣にして救はれたるか、即ち教會は神の大なる慈愛と其得も言はれざる仁善によりて救を得たるとを示すなり。然れども癒すべからざる程に慈憐をも受けざる病者あり、例令ばイウデヤ人の如き是なり。恩寵は恩寵たり、慈憐は慈憐たり、然れども唯之を希望する者のみ救はるゝも、頑固にして此賜を受くることを望まざる者は救はれず、イウデヤ人の如きは其救はれざる者なりき、パウルも此事に就きて『彼等は神の義を識らず、己の義を立てんことを圖りて神の義に服せざりき』（ロマ書十の三）と言へり。教會は神に屬することに就きて言ひつゝ、次に教會に屬するとに就きても言へり。『爾を畏れて爾が聖堂に伏拜せん』（八節）。言ふ意は我は恩寵を受くる時自ら當然なることを顯し、爾に左の如き祭を献せん、即ち『爾を畏れて爾が聖堂に伏拜せん』―多くの祈禱者が、此時に身體を搖き、欠伸し、假睡するが如きにあらず、乃ち恐懼戰慄を以て云ふとなり。斯くの如くにして禱る者は凡ての惡を止め、凡その善行に向ひて神の慈惠を受く。『主よ我が敵の爲に我を爾の義に導き給へ』（九節）。教會は神の光榮の爲に神の惡を嫉むこと、神は慈愛にして吾人を照管すること―己が救贖のこと、教會は如何樣にして救はれしか―教會が救を得たる後に爲しゝこと、即ち教會が惡を嫌忌ひて善行に戀着したりしことを述べ―惡しき生活をなす者に對しては、彼等若し己が惡を矯正せんと欲せば、仁慈を受くべしとの善望を與へて、然る後己が談話を願に向けて『主よ、我を爾の義に導き給へ』と曰へり。之を以て教會は先づ讃詞を神に捧げ、神の仁慈を受けたるが爲に之を感謝すべきを聽者に教へ、次に望む所を願ひて、其受けしことの爲に復び感謝すべきを願ふ。然れども吾人は教會が何事を願ふかを觀察せん。其願ふ所は世俗の事にはあらざるか。暫時のことにはあらざるか。速かに過去ることにはあらざるか。彼の云ふは富のことにあらずや。榮譽のことにあらずや。權柄のことにあらずや。教會の敵に復讐することにあらずや。教會は毫も斯くの如きことを願はず。然らば其願ふ所は何事なるか。『主よ、我が敵の爲に我を爾の義に導き給へ』是なり。爾は教會が毫も暫時のことを願はず、又如何に高尚なる佑助を願ふを見るか。爾の知れるが如く、斯る途を歩む者は、特に此佑助を要す。爰に『義』と名つけらるゝは、總じて善行を云ふ

なり。又教會が『爾の義』と云へるや宜し、何となれば人の義は外部の律法による義なるも、完全と圓滿とを有せず、人の想像に基せらるゝ所の差程重からさる義なればなり。而して預言者の言ふ意は、我は爾(神)より降り、又天に昇らしむる所の爾の義を願ひ、且つ此義を得るに助けんことを願ふとなり。

五。教會が『導き給へ』と云へるも亦善し、何となれば現今の生活は高尚なる教導を要する途なればなり。吾人の或市に入る時は指導者を要す、況て天に入らんとするに際りては一層吾人に途を示し、吾人を固め吾人を導く所の高尚なる幇助を要す、何となれば多くの十字街ありて路を迷はしむればなり。然れば吾人は神の右手を持せざるべからず。『我が敵の爲に』とは多くの敵が我を此途より岐路に誘ひ、我を迷しめんと欲して起つを云ふ。敵の斯る惡謀を懷きて誘惑する時爾自ら我を導けよ、我は爾の佑助を要すればなり。然れど導くは神の所爲なるも、神の右手の指導に堪ふるは吾人の熱心の所爲たるなり。もし爾自ら不淨ならんか、神の右手爾を保たざらん、例令ば、爾に貪慾あり、或は他の不潔ある時の如き是なり。『我が前に爾の道を平にせよ』とは之を便利にして平坦なる途となせとなり(シムマフ)。他の譯者曰く、『我が前に爾の道を平にせよ』とは、之を我が爲に著しきもの、明なるもの、知らるゝもの、直なるものとなせとなり。『蓋彼等の口には眞實なく、彼等の心は惡逆』(節十)。思ふに、教會は爰に諸善を遠ざかれる口と心とを審定しつゝ、迷の中にある者、又惡しき生活をなす者に就きて云ふなり。『彼等の喉は開けし柩』とは、或は彼等の喉が殺人に傾き、或は人を殺す所の敎と惡臭ある敎を發することなり。而して穢しき言語を發する所の口を以て開ける柩と名つくる者も亦誤たず、何となれば腐敗せる靈より出づる此惡臭は、感覺的惡臭より一層惡しければなり。毫も道理に適へることを云はず、唯殺人掠奪をのみ是れ言ふ所の貪慾者の口も亦開ける柩なり。然れば爾の口は柩たらずして寶藏たるべし。寶藏と柩との甚しく異なるは、後者は收容する所のものを腐朽せしむると、前者は之を保存するとにあり。是によりて爾も亦常に其口に豐富なる睿智を存して惡臭と腐敗とを存せしむる勿れ。而して倘教會が單『柩』と云はずして『開ける』柩と云へるは、一層其厭ふべきことを顯さん爲なり。斯る言語は隱すべきものなるに、彼等は之を發し、斯くして一層己が疾病を露すなり。屍は地中に埋むべく、惡言は之を心底に隱して壓すべし、然るに彼等は公然惡言を發ちて多くの者に害を蒙らしむ。我は爾等に勸む、吾人は斯る人々を遠けん。吾人

もし死體を市外に棄むらんに、況て死の言・惡息ある言を發ちて之を隱すことを望まざる者をば遠き極に放逐するを必要なりとす、何となれば斯くの如き口は全市に傳染する害毒なればなり。『其舌にて媚諂ふ』。視よ、惡の他の狀態を。或者は諂言を發して己が靈の詭譎を隱し、又或者の言は己の惡念を暗まし、奸計と欺騙とを構造する程惡し。『神よ、彼等の罪を定め、彼等をして其謀を以て自ら敗れしめ給へ』(十節一)。爰にも祈禱の穩かなるを認めよ。敎會は罰せよと云はずして『彼等の罪を定めよ』彼等の惡念を鎭めよ、彼等の奸計をして進歩なからしめよといへり。而して彼等の惡事の成功せざらんことを祈るは、彼等の利益の爲に祈ることを意味するなり。『主よ、彼等が不虔の甚しきに依て之を逐ひ給へ、彼等爾に逆へばなり』(十一節)即ち我は我と偕に行はるゝことに就きて毫も慮らず、只爾(神)に關はることに就きて悲む。實に己を辱しむることの爲に復讎せず、神を辱しむることに對して强く起つは智なる靈に當然なり。然るに多くの者は神に關はることを等閑に附し、己の爲には大なる勢力を以て復讎しつゝ反對に行ふなり。聖人等は斯くせざりき、彼等は神に關はる凌辱に對しては强く起ちしも、己に關はることに至りては等閑に附せり。

『凡そ爾を賴む者は喜び』(十二節)。是れ祈禱の果なり、即ち或者は最も善良なる者となりて惡癖より離れ、或者は自己の變化を見て大なる滿足を得、善事に向ひ、着々として矯正す。彼等は『永く樂み、爾は彼等を庇護らん』。是れ最も不變の喜なり。他の喜は顯るゝや否や直に消滅しつゝ毫も水の流に如ざるも、神によるの喜は永く續きて堅固に、希望ありて變らず、如何なる事情の生ずとも之が爲に破らるゝことなく、障害によりて一層高めらるゝなり。然れば使徒等は鞭扑に遇ひて喜べり(使徒行實五の四十)、パウルは悲哀を忍びて樂み、死に準備し、人を招きて己の喜に與からしめて曰く『若し我爾等の信の祭と奉事との上に灌奠とせらるとも、我喜び、且我等衆と偕に喜ぶ。此の事爾等も亦喜び、且我と偕に喜べ』(ヰリッピ書二の十七、十八)と。神は斯くの如くにして悅ぶ者と偕に在し給ふなり。視よ、何によりて敎會が『永く樂み、爾は彼等を庇護らん』と云へるかを。パリストスも亦己が喜の變らざるを示さんと欲し『我復爾等を見ん、而して爾等の心は喜ばん、且其喜を爾等より奪ふ者なし』(イオアン福音十六の廿二)と云ひて、同一のことを言ひ顯せり。パウルも亦曰へり『常に喜べ、輟めずして祈れ』(テサロニカ前書五の十六、十七)と。『爾の名を愛する者は爾を以て自ら誇らんとす』。唯之を以て誇ることを得、唯之に對して喜ぶことを得、唯之を以て

樂むことを得。而して世の事物を誇る者は、夢裡に於て樂む人々と毫も異らざるなり。

六。人の爲す事にして眞に誇るに足るべきことあらば、乞ふ之を我に告げよ。體力なるか。體力は吾人の自由に之を得べきものならず、故に吾人は體力を以て誇るを得ず、而も體力は速かに衰弱消失し、且つ體力ある者も當然に之を利用せざれば己を害すること稀なりとせざるなり。美麗と美貌、富と權威、奢侈及び其他世の諸事物に就きても亦同樣に云はざるべからず。然れども神よりの稱讃及び神に對する愛は凡てのものに勝る裝飾なり、之を受くるに堪へし者は、縱ひ桎梏にて縛らるゝとも千百の冠に優る。此裝飾は疾病の爲にも、情慾の爲にも、事情の變化の爲にも、不遇によりても、死其物によりても減少せずして、一層赫々たる光明を發つに至る。『蓋爾は義人に福を降せり』(十三節)。斯る傾向を有する多くの者、特に善行に渡されたる者もし罪に定められ及び咄笑に服するとも、或最も弱き者の元氣を喪はざらんが爲に、預言者は如何に彼の靈を固むるかを見よ、曰く『蓋爾は義人に福を降せり』と。天使の主宰もし彼を頌揚讃美したらにんは、人々及び全世界の之を輕蔑すとも何ぞ意に介するに足らん。斯くの如く陸と海とに居住する凡ての人々に讃美せらるゝ主に祝讃せられずんば、人々の稱讃を受くるとも將た何の益あらんや。是に由りて吾人は常に神をして吾人を稱讃せしめ、吾人に榮冠を與へしむる樣努めん。斯くの如くんば假令吾人は貧からんも、疾病の中にあらんも、極めて困難なる事情の中にあらんも、凡ての人々の上に立たん。然れば福たるイオフは、不潔なるものゝ上に坐し、全身は傷より流れ出づる膿と數ふべからざる程の蟲にて蔽はれ、奴僕に輕蔑せられ、己の敵のみならず、己が妻と友とに辱しめられ、貧窮に陷いり、饑渴に迫り、疫されざる疾病に罹りて耐え難き苦を受けしも、尙凡ての人々よりも幸福なりき。何故に然るか。神は『主人と爲完全く、かつ正くして神を畏れ、惡に遠ざかる』(イオフ傳一の一)と云ひて彼を祝讃したればなり——『主よ爾は惠を以て盾の如く之を環らし衛れば』なり。預言者は終結に於て感謝の讃詞を捧げて復び神に感謝を獻ず。惠を以て盾の如くすとは何の意なるか。盾とは秀たる盾、神の心に從ふの盾、最も希望ある盾なり。言ふ意は、爾は最も善き佑助を以て吾人を衛れりとなり。他の譯者は『之を環らし衛る』を義人にかけつゝ、爾は義人なる彼を環らし衛る、即ち爾の仁慈は盾、而も秀でたる盾の代りに彼に務むといひ、或は爾は最も善き佑助を以て義人を衛るが故に、剛勇も彼の安全

を奪はず、安全も彼の光榮を奪はずといへり。誰か至上者の右手にて守らるゝ人より眞に强き者あらん、誰か之より剛勇なる者あらん。ダヴィド自ら他の個所に於て『憐と惠とを爾に冠らし』（聖詠百二の四）と云へる如く、此冠は慈憐より編まる。又此冠はパウロが『今より後義の冕は我の爲に備へらる』（テモテ後四の八）と云へる如く、義よりも編まるゝなり。此冠は他の記者の『榮の冠辨を汝に予へん』（箴言四の九）と云へる如く、恩寵の冠なり。此冠はイサイヤが『榮のかんむりとなる』（イサイヤ書廿八の五）と云へる如く、榮の冠なり。此冠は其中に仁愛をも、恩寵をも、光榮をも、亦美麗をも有す、此は種々なる恩寵を齎らす所の神の賜なり。此はパウロが『彼等は壞れ易き冕を受けん爲、我等は壞れざる冕の爲なり』（コリンフ前書九の廿五）と云へる如く、壞れざる冠なり。斯く引用されたる言の意味は左の如し、曰く、爾は安全と光榮とを以て吾人を圍繞む是なり。神の賜は斯くの如く固く、斯くの如く麗はしく、その榮冠や斯くの如し。然れど人々に在りては然らず、光榮の中にある者も完き安全の中に在らず、安全の中にある者も常に必しも光榮の中にあらず、此二者は彼等の中に容易に合せらるゝことなし、若し合せらるゝ時は速かに破壞せらるゝなり。例令ば權威ある人々、著名なる人々名譽ある人々は安全の中にあらざるも、己が名譽の威嚴によりて特に危險なる場所に立ち人に擯斥され輕蔑さるゝ人々は、己の顯れざるにより、安全の中にありて名譽を受けざるも、特に安全の中にあるによりて名譽を有せざるなり。然れど神にありては然らず、安全と光榮とは至て高き程度に於て合せらるゝなり。是に由りて吾人は此等の幸福の威嚴何ものよりも先づ大なる幸福は神に喜ばれ、盾も光榮も、安全も、他の多くの幸福も此中に含蓄するとを顯しつゝ、吾人の前に在る苦行を忍耐し、常に元氣を失墜すなく盾なくして止まざらん。斯る戰に於ては軍人は盾を遺ること能はず、唯觀物の終る時に至りて始めて其勤勞終り、而して觀物は靈が体より離るゝ時に終るなり。然れば此世にある間は家に坐し、市場に出で、病中にも、健康の時にも、飲食しながらも常に吾人は戰はんとを要す。疾病の時さへも特に此戰の時たるとあり、即ち疾病の威覺が諸方より靈を煩はす時、悲哀が靈を攻圍み、惡魔が立ちて或不善の言を話すべきを慫慂する時是なり。斯る時は己を安全に持ち、甲冑盾及びその他の武器を以て防禦し、且つ斷えず神に感謝せんことを要す。是れ惡魔の爲に畏るべき矢なり、是れ惡鬼の爲に致命の打擊なり、光明なる榮冠は特に之が爲に賜はらる。然れば福たるイオフは誘惑疾病および艱難の時に於て變らざる靈と動かすべからざる心とを顯し、又神に此靈的献祭なる感謝の

讃詞を献じたるが爲に特に光榮なる者となり、之が爲に著しき者となり、之が爲に榮冠を受くるに堪へたり。彼が『主興へ主取り給ふなり(斯くあらんことは主の喜び給ふ所なり)主の御名は讃むべきかな』(イオブ記一の廿一)と云ひし其言は即ち是れ献祭なりき。然れば吾人も亦誘惑の中にあり、艱難の中にあり、憤懣の中にありても斷えず神を讃美頌揚せん、蓋光榮は世々に神に歸すべきものなればなり。アミン。

第六　聖詠講話

主よ、爾の憤を以て我を責る勿れ、爾の怒を以て我を罰する勿れ(節二)。

一。爾神に就きて『憤及び怒』と云ふ言を聞くとも、之を人事的に解する勿れ、何となれば是れ寛容の言なればなり。神性は凡そ斯くの如きことを遠ざかるものなり、斯く云ふは最も頑固なる人々を悟らしむるに其事實を卑近にせん爲なり。然れば吾人も野蠻人と談話する時は彼等の言語を用ひ、嬰兒と談話する時は其幼稚なるを寛容しつゝ、縱ひ自らは智者たるにも拘らず、嬰兒の如き言にて談話するなり。又吾人は小兒の惡を矯正すが爲に指を刺衝け、及び怒の狀態を示しつゝ行、爲を用ひなば、言語を以て斯く行ふとも何ぞ異むに足らんや。然れば神も亦最も頑固なる人々に應驗あらしめんとて同樣なる表言を用ふ。神何事をか言ひ給ふ時は、己の功德を思はずして聽く人々の益を慮り給ふなり。他の個所に於て、神は怒の己に適せざることを述べて『主曰ひ給ふ、彼等我を怒らするか、是れ己が面を辱むるにあらずや』(イエレミヤ七の十九)と言へり。爾は神がイウデヤ人と談話して、嫉むことは情慾なるが故に、神は惡人を怒らず、又惡まず——目は肉体に固有のものなるが故に、神は人々の行爲を視ず——耳も肉体に屬するが故に、神は聽かずと云はんと欲するか。然れども、是に由りて何事も照管者なくして行はるゝと云ふが如き他の不虔なる說出でん。神に就きて斯くの如き表言を避けなば、多くの人々は全く神の何者たるを知らざるべく、之を知らずば全く亡ぶるに至らん。神に就きての敎にして斯る狀態に陷らば、速かに之を矯正せざるべからず。神あることを納得する者は、縱ひ神に就きて不適當なる見解を有し、又或感覺的のことを思ふとも時を經るに隨ひて、神に、は毫も斯くの如きことなきを會得すべし。然れど神は照管せず、彼は存在する者の爲に慮らず、又神なしと思ふ者は、斯る表言より如何なる益を受けんや。視よ、何によりて神は始に斯く彼等と談話して、之に神の存在を說明し、然る

後之を眞の教に導き、最も高尚に自己のことを述べ、自己の感覺なきことをも語げつゝ、漸次に彼等を正し給ふを。他の預言者は言へり『神は俺み給ふことなく、又披れ給ふことなし』(イサヤ書四十の廿八)と。神は怒ると云ひし所の預言者も、次に神性の感覺なきことを述べんと欲して『彼等我を怒らするか、是れ己が面を辱むるにあらずや』(イエレミヤ書七の十九)と加附へたり。神は我聖堂に在すと云ひしも、後に『我は人にあらず……我は爾の中に在す聖き者なり、怒をもつて臨まじ』(ホシヤ書十一の九)と云へり。即ち我は場所にて限られずとなり。神若し凡そ斯くの如きことを排斥せずんば、前に述べられたる言は、最も智なる人に普通の情慾之なくんば、生活すると能はざる所の情慾を脱却する所の者(神)は一層他の情慾を脱却することを理解せしめたり。

『汝如何なれば呆れて居る人の如くするか』(エイレミヤ書十四の九)と云へり。又彼は慶神の感覺なきことを言へり。斯くの如く爾愛にも神の怒に就きて聞くとも、こは情慾なりと思ふべからず。實際睿智なる人々もし力めて怒を抑制せば、況て不變不朽、言ふべからず悟るべからざる者に於てをや。醫師が患者の局部を切斷し、或は之を燒灼するも、是れ病者を怒りてなすにあらず、乃ち治療の目的、病者に對する同情、彼等の疾病を慈すが爲なることを爾は見ざるか。然れば預言者が『爾の憤を以て我を責むる毋れ』と云ふは、左の意に外ならず、曰く、我を我が罪の爲に罰する勿れ、我が不法の爲に我に讎ゆる勿れ是なり。『主よ、我を憐み給へ、我弱ければなり』(三節)。吾人は縱し千百の善行を行ひたりとも、縱し高上の義に達したりとも、皆斯くの如くに大聲疾呼せざるべからず。然れば預言者は後章に於て『凡そ生命ある者は一も爾の前に義とせられざらん』(聖詠百四十二の二)と云ひ、又『若し爾不法を糾さば孰か能く立たん』(全上百廿九の三)と云へり。パウロも『我は內に省みて責むべきなしと雖も、此を以て義とせられず』(コリンフ前書四の四)と云ひ、或者は『誰か我我が心を淨め、我が罪を潔めたりと言ひ得るや』(箴言二十の九)と云へり。然れば吾人は皆慈憐を要するも、何人も必ず慈憐を受くるに堪ふるにあらず、何となれば慈憐は憐むことなれども、神自らモイセイに『我は惠まんとする者を惠み、憐まんとする者を憐む』(出埃及記三十三の十九)といへる如く、慈憐に堪ふる者を求むればなり。是故に誰か慈憐を受くるに堪ふることを爲し、者は『我を憐み給へ』と言ふべし、然れど自己に赦を受くること能はざる者は、徒らに『憐めよ』と云ふとも益なからん。若し慈憐にして衆人に及ば、何人も罰せられざりしならん、然れども慈憐は自ら憐むべき者を擇び、之を受くるに堪ふる者を求む。

二。多くの者は、屢同一の罪を犯して、異れる罰を受けたることあり、何となれば犯罪は同一なれども其原因異りたるに由る。爾等もし欲せば吾人は今此問題に就きて述べん。イウデヤ人は皆偶像を叩拜みて罪を犯したれども、彼等は皆同一の罰を受けざりき、乃ち或者は滅び、或者は赦されたり。罪に於て注意すべきは實際の行爲のみならず、犯罪者の靈的狀態、犯罪の時日、及び發端、且つ犯罪後の行爲即ち其犯罪者は罪の中に止りしか、或は悔悟したるか、其罪を犯しゝは偶然なるか、或は誘惑によりしか、或は故意にしたるか等に注意せざるべからず。又罪に就きて尙多くの注意すべきことあり、即ち其犯罪したる時代の差別社會の組織等是なり。例へば舊約時代に生活したる者罪を犯し、新約時代に生活する者亦罪を犯すとも此二者の受くる罰は不同なり、而も後者の受くる所前者に比すれば一層重しとす。

パウルも亦『若しモイセイの律法に背きし者が、二三人の證者ありて恤なく死に處せられば、況や神の子を踐み、自ら聖にせられし約の血を聖なりとせざる其人の受くべき罰更に重きこと幾何なりと意ふか』(エウレイ書十の廿八、廿九)と言ひて此事を顯せり。彼は『其人の受くべき罰更に重きこと幾何なりと意ふか』てふ言を以て、罰の增加されしことを顯すなり。律法以前に生活したる人々罪を犯し、律法の下に生活したる者亦罪を犯したるも、前者は後者よりも輕き罰を受けたり。パウルは之を示して『凡そ律法なくして罪を犯しゝ者は、律法なくして滅びん』といへり、即ち重からざる而も最も輕き狀態を以て亡びんとなり、又曰へり『律法ありて罪を犯しゝ者は、律法に由りて審判せられん』(ロマ書二の十二)と。何によりて然るか。或者の訴人は天然なれども、他の者の訴人は天然及び律法なり、大なる教誨を受けし者は亦大なる罰に服せらる。又人格の價値も之に影響を有す、是れ献祭より見ゆるが如し。一司祭の爲に献せられたると同樣なる献祭は、犯罪せる全人民の爲に献せられたり。是れ人格の高き程その犯罪のために受くる罰の最も重きことを示すなり。視よ、何によりて一婦人は姦淫を行ひて殺されしも、司祭の娘は姦淫を爲して焚殺されしかを。又他の事情によりて罪を赦すことあり、或は罰を增すことあり、例へば同じく罪を犯しゝ者にして、一は此世に於て罰を受け、一は快樂を受けて渡世するが如きは是なり。後者は來世に於て大なる罰を受くるも、前者は此世に於て全くの報を受けずして小なる罰を受くるなり。パリストスは之を解明しつゝアウラアムが富者に云ふものゝ如く顯せり、曰く『爾は爾の善を受け、彼は同じく其惡を受けたりしを憶へ、今彼は此に慰み、爾は苦む』(ルカ福音十六の廿五)と。此は此世に於て受けたる苦難を以

て全き罰を受けたり、他は全き罰にあらず、僅かに之を受くるが故に、彼處に於ては輕く罰せらるゝなり。又多く知れると僅かに知れるとによりて其罰を受くるに差あり、主の云ふ所の如し、曰く『主の旨を知りて備へず、其旨に順ひて行はざりし僕は多く打たれん、知らずして罰に當る事を行ひし者は少く打たれん』(ルカ福音十二の四十七、四十八)と。又罰の不同、慈憐と仁愛とに差別を生ずるが如き他の多くの事實を示すことを得。初めに造られたる人々を視よ。エワ罪を犯し、アダムも罪を犯し、而も同一の罪を行へり、即ち彼等は偖に樹の果を食ひしも、其受けし所の罰は不同なりき。カイン殺人の罪を行ひ、ラメフ亦同罪を行へり、然れども一は憐を得、一は罰せられたり。或者は薪を「スポタ」に集めて赦されざりしも、ダヴィドは人を殺し、姦淫を行ひて、而も赦されたり。吾人は之を研究せん、徒らに空言を發して喜び、廣場に集會して時間を消費すことを樂まんよりは、寧ろ研究するとの道かに勝ればなり。之が解決を發見するのみならず、縱ひ發見せずとも、之を探求するとのみにても甚た益あり。吾人は之を以て樂み、之を以て凡ての時を送らん。然れば何故に前に述べられたることに向ふは必要なるか、何故に犢牛を造りしイウデヤ人の中或者は罰せられ、他の者は罰せられざりしか。或者は天性に反するにも拘らず、敬虔なる熱心によりて

己が隣人を殺したるも之を悔い、他の者は其罪の中に止れり、罪は同一なりしも結果は同一ならざりしなり。アダムエワの罪は同一なりき、何故に彼等は不同の罰に處せられたるか。妻に誘惑はるゝと、蛇に誘惑はるゝとは同一にあらざればなり。是に由りてバウルは之を誘惑と名づけたり、曰くアダムは誘はれしにあらず、乃婦は誘はれて罪に陷れり』(テモテ前二の十四)と。何故に薪を集めたる者は赦を受けざりしか。是れ誡を與へられて直に之を破ることの大罪なると、他の人々にも其畏るべきことを知らしむる必要ありしに由る。アナニヤおよびサフヒラにも同樣なりき。然れば吾人も亦罪を犯さば吾人は慈憐を受くるに當るか、慈憐を受くるが如きことを爲ししか、改悔したるか、善良なる者となりしか、罪を嫌忌したるかを觀察せん。爾等の知れるが如く、痛悔したる者の救はるゝとも亦慈憐の爲なりき。然れば聖詠者も爰に涕淚の爲、慟哭の爲に救贖を請ひ求めて曰へり『我毎夜我が榻を滌ひ、我が淚にて我の褥を濡す』(七節)即ち痛悔の爲に褥を濕すなり。『我が骸は慄ぎ、我が靈も甚慄げばなり』(三節)。彼は突然に之を云はず、乃ち前以て天性の弱きを示して『主よ、我を憐み給へ、我弱ければなり』といへり。彼の斯く云ひしは、單に天性の弱きことの救はるゝに足らざることを述べ

たるなり、何となれば若し弱きことにして救はるゝに充分なりしならば、吾人は皆救はれしならん、吾人は皆人たるによる。

三。然れど最も正確に言ふ時は、恐らく預言者は爰に天性の弱きことを云ふにあらず、その中にも慈憐と寛容とを受くるに堪ふることのあるを顯しつゝ誘惑より生ずる衰弱を示すなり。彼は次に『我が諸の敵に因りて衰へたり』(八節)てふ言に於ても同じく顯せり。爾等の知れるが如く、感謝して悲哀を忍耐するとも亦神の大なる寛容を受くる原因となり、又神をして、吾人を慈憐ましむ。思ふに預言者が爰に『主よ、我を醫し給へ、我が骸は慄き、我が靈も甚慄げばなり』と云ふは悲哀を云へるなり。彼は『我を放て、若くは我を赦せよ』とは云はずして『醫し給へ』と言へり、前の傷の愈されんことを願ふなり。爰に彼は『骸』てふ言を以て、凡ての能力を意味し『慄ぐ』てふ言を以て、攻撃懲罰及び苦痛を意味す。『主よ、我を醫し給へ、我が骸は慄ぎ、我が靈も甚慄げばなり』。治療は醫師技術病者疾病及び藥劑の効力によりて成る、此等のものゝ中にも屢反對抗爭を來すことあり、若し醫師技術藥劑と僧に病者の意志之に加りて作動かば疾病に打勝つべし、然れど病者若し此等のものを利用せざれば己の疾病を重からしめ、或は若し己が衰弱により、醫師藥劑及び技術に反して作爲かば己を亡さん。爰に吾人にも亦斯くの如きことあり、或は然らずして一層驚くべきことあり。病者が疾病技術藥劑と一致して作爲くにも拘らず、醫師は如何なる進歩をも見ざることあり、是れ病者の自然に衰弱する時は技術も効を奏せず、藥劑の効力も或る理由によりて消滅するが故なり。神にありては然らず爾若し醫師(神)の命ずる所を行はば、凡ての傷は必ず愈されん、何となれば爰にはあされずして止むが如き人の技術にあらずして、天性をも、疾病をも、惡癖をも、凡ての惡をも制する所の神聖なる能力なればなり。是に由りて預言者は醫師たる神に趨りつゝ涕泣して曰へり『主よ、我を醫し給へ、我が骸は慄げばなり』と。然れど或者は謂く、預言者は爰に罪より生ずる所の慄を云へるなり、何となれば强風海面を打つ時は怒濤を起し、海底の沙を搖揚げ、航海者を危險に陷らしむるが如く、爰に吾人の靈も攪亂され、體は震動し、全身戰慄を以て充され、吾人の獨木舟は全く亂調を來し、大なる暗黑と大なる混亂とは擴まり、凡てのものは其所を失ひて激動すればなり。此等のことは特に惡望憤怒及び不幸の時にありとす。靈も骨も之によりて戰慄し、視力は害され眼も正しく見ることを得ざる也。御者混亂を來せば、駒は其歩調を亂すが如く、吾人の智慧

もし調和を失はゞ、凡てのことは秩序を失ひ又害はれて其途を失ふなり。此によりて斯る戰慄の如何にして生ずるかを話さんことを要す。此戰慄の靈の中に生ずるは、海に於けるが如く、風の壓迫より生ずるにあらずして、又或る思ひ設けざる場合より生ずるにあらずして吾人の不注意より生ずるなり。此戰慄は吾人の中にありや無きや、其原因となるものは眞に吾人自らなり。肉慾の興奮するに際して、爾其下に火を置かず、之に食物を供給せざれば焼爐は熾に燃えず、又此焼爐は爾にして若し麗しき顏を見ず、他の美を追跡せず、不虔の觀物に對して歩まざれば熾に燃えざるなり。爾若し飽足りて肉を肥やさじ、罪の中に智慧を溺れしめざれば此焰は擧らず、此焼爐は熾に燃えず、此猛獸は激怒せず、靈の潔淨は暴風によりて亡びざるが如く、此猛獸より亡びざらん。然れば爾は云はん、罪の媚を避くるが爲に之にて足るやと。否これのみにては足らず、或他のものをも加へんことを要す、即ち斷えざる祈禱、聖者との交通、適當なる齋斷、相當の業務を取ること、及び何事よりも先づ神の畏、來世の審判、堪へからざるの罰、約されたる幸福を記憶すること是なり。爾は此等のことを守りつゝ猛烈なる肉慾を抑制し、濤起つ海を鎭ることを得ん。

『爾主よ、何の時に至るか、主よ、面を轉し、我が靈を免れしめ、爾の憐に由りて我を救ひ給へ』(四節五節)。預言者は寛容及び仁慈を得る所の或權利とも云ふべき此言を引用しつゝ、斷えず『主よ』と云ふ。實に神の云ふべからざる仁愛に於ける吾人の至大なる希望は、神が斯く寛容を顯すに準備し居ることにあるなり。又『何の時に至るか』てふ言は、凌辱められず、或は不滿を懷かずして、誘惑の重荷の下にありて、悲哀慟哭疲勞する人の言ふ所なり。

四。『主よ、面を轉し、我が靈を免れしめ給へ』。預言者は爰に二の問題に就きて云ふなり、即ち主が面を轉さんこと、及び彼の靈を救はんこと是なり。義人は特に主が彼等と媾和し、彼等に對して仁慈なる者となり、彼等より面を轉けざらんことを慮れり。他のことも亦之に續きて生ず、即ち靈の救はれんこと是なり。多くの人々、特に最も野鄙なる多くの人々は斯くの如く行はず――彼等は唯現在の或幸福を得んことを求む。然れど義人等は之に反して彼等の爲に最も貴重なる靈の救贖を受けんことを慮れり。『蓋死の中には爾を記憶するなし、墓の中には誰か爾を讃揚せん』(六節)。視よ、如何に預言者が救贖の心要なる所以を述ぶるかを。曰く『我憶れたり、我が骸は慄げり』されば之を『主に』願ふ『蓋死の中には爾を記憶するなし』――彼は此言を以て、吾人の存在が現世

の生命を以て終るが如きことを顯すにあらず、乃ち此世を逝りし後は、既に改悔すること能はざるを顯すなり。然れば富者も己の罪を認めて痛悔したりしが、その時にあらざるによりて何の益をも受けざりき（ルカ福音十六）。貧女等は油を得んと欲したりしが、誰も彼等に與へざりき（マトフェイ福音廿五）。是に由りて預言者は、爰に北諸罪を洗はれんとを願ふ。是れ彼が勇みて畏るべき、裁判所の前に立たん爲なり。次に吾人の努力も神の仁愛に依るべきことを敎へんと欲したり、何となれば吾人もし己が往昔己が戰慄神の如き仁善及び預言者の云ひし凡てを表すとも、自己の方より之に適當なる者を加へざる時は、毫も吾人に益なかりしならん——視よ、彼が附加ふることを、曰く『我嘆にて憊れたり、毎夜我が榻を洗ひ、我が涙にて我の褥を濡す』（北）と。身分卑き者は、紫の衰衣を衣たる王が如何なる痛悔をなしたるかを聽くべし、之を聽きて吾人も亦痛悔せん。彼は曾に勞苦したるのみならず、涙を以て己が榻を洗へること一二日にあらずして毎夜なり、而して其言ふ所は過去に就きてのみならず、未來に就きても言へり。彼は嘗て斯くの如く行ひ、而して後に之を休めたりと思ふ勿れ、否彼は終生の間常に斯くの如く行へり——一日之を爲し、或は一度も之を爲さずして、數々談笑者侈快樂に耽る所の吾人の如きにあらず。彼は生涯を斷えず涙の中に送れり。吾人も亦彼の痛悔に則らん。吾人もし現世にありて泣くことを欲せずんば、必ず來世に於て歎息涕泣せざるべからず、而も來世に於て泣くは益なきも、現世に於て泣くは益あり、來世に於ては耻と僧にするも、現世にありては甚だ相應し。而して其必ずあるべきことは、パリストスが『彼處には哀哭と切齒とあらん』（マトフェイ福音八の十二）と曰へるを聞け。此處にありて泣く者は哀哭と切齒とを試みずして、却て大なる慰を受けん『泣く者は福なり、彼等慰を得んとすればなり』（マトフェイ福音五の四）『爾等富める者は禍なる哉、爾等既に慰を得たればなり』（ルカ福音六の廿四）。黄金の寢臺を有てる者は聞くべし——王（ダヴィド）の寢臺は寶石を以て飾られず、黄金にて鉗められざるも涙を以て濡はれたりき。夜は休息の時なるに、彼に取りては歎息と涕泣との時なりき。是れ些には多くの配慮の彼を惑はすによる、彼は諸人の休息に用ふる時を以て、最も辛き涙を注ぎて痛悔の時となせり。又泣くことは何時にても之を能くすべし、然れども何人も此奇なる快樂を妨げざるの時、泣かんと欲する者が完き自由を得る所の夜の時を特に可なりとす。經驗ある者は我が言ふ所を了解し、此涙の泉が如何なる喜を與ふるかを知らん。此等の涙は消すべからざる焰を消すことを得。視よ、パウルも何によりて三年間晝夜他人の

欠點を矯正しつゝ泣きしかを（使徒行實二十の三十一）然るに吾人は自己のことに就きても泣かず、而も談笑好色に耽り、終夜熟睡を貪るなり。吾人にありては、或者が死に似たらん眠に渡さるゝ時に、或者は此時に於て利益收入のことを考へ、他人に對する奸計を構造しつゝ、死よりも惡しき不眠を以て眠らざるなり。眞に警醒する者は斯くの如き者にあらず、彼等は涙を雨の如く己が靈に振り注ぎて善行の種子を成長させつゝ其靈を耕作す。斯る涙を受くる臥床は如何なる惡癖放蕩も近づくこと難し。此等の涙を注ぐ者は毫も地のことを思はず、己が靈を凡ての不安より救ひ、己が智慧を太陽よりも光り輝くものとなす。爾等我は唯修道士に對して之を云ふと思ふ勿れ、此教誨は修道士よりも寧ろ俗人に關す、何となれば殊に痛悔の治療を要するは俗人なればなり。斯くの如くにして泣く者は凡ての情慾を排斥して、穩なる港に優る所の靈と偕に起てばなり、彼は大なる樂に充され、勇みて神の堂に詣り、近者と快談せん、何となれば怒は彼の中に巣を造らず、情慾貪慾憎惡其他之に似たる何ものも彼の中に燃えざればなり。是は夜の呻吟にして、涕涙は內部に隱る、猛獸の如き此等のものを放逐す。『我が眼は憂に因りて枯る』（八節）。爾は痛悔の靈を見るか。預言者は痛悔のことを述べて、復び靈の苦難、靈の攪亂、及び神の怒を想像するよりして生ずる所の畏に就きて述ぶ。

五。彼は『眼』といふ言の下に靈的眼を意味す、即ち通例己が諸罪を想像するによりて攪亂さるゝ靈の辨別力及び智能を云ふ。彼は常に己が罪過を眼前に立てゝ神の怒を想像したるが故に、畏を以て一生を送り、又多くの者の生活するが如く不注意ならず、乃ち苦行と痛悔とを以て生涯を送れり。斯る戰慄は平安の源なり、畏は安全の聘質なり、斯くの如き波浪に己を渡す者は凡ての暴風を豫防するも、斯る靈を有せざる者は畏るべき艱難に服するなり。貨物を裝載ずして暴風の間に遭されたる船の忽ち沈沒するが如く、無分別に生活する靈も亦無數の情慾に陷るなり。然れば福たるパウロも、靈の斯る苦難の狀態を顯しつゝ『其本心を失ひて邪侈を恣にし、凡ての汚穢を貪り行ふ』（エフェス書四の十九）と言へり。又舵手が乘客のために配慮して騷擾を極むる間乘客は安全なれども、彼が配慮せず安心して眠り始むる時に非常なる危險を生ずることあり、斯くの如く、人も亦苦行畏懼戰慄に己を渡してその靈平安なるも、前後不覺の睡眠をなす時は獨木舟（肉體）を沈沒せん。『我が諸の敵に因りて衰へたり』。『衰へたり』とは何の意ぞや。我は我が敵より疲勞したりとの意なり。我が生命は眞に苦行に充たされ、又吾人罪を犯す時は一層

強き所の無數の敵に包圍せらる。是によりて彼等の手を避け、何時も彼等と交際せざるが爲に凡てを爲さんとを要す。是れ吾人の爲に至大なる安全の聘質なり。

パウロは此等の敵の集會を示しつゝ『我等の戰は血肉に於てするに非ず、乃首領に於てし、權柄に於てし、此の世の暗昧の世君に於てす』(エフェソ書六の十二)と云へり。若し、吾人の敵の集會にして、斯くの如きものならば、常に且つ斷えず武器を備へ、罪に至る發端を避けんことを要す。何ものも罪の如く吾人を害きものとはなさいるなり。

故にパウロは罪より生ずる舊を預戒すべきとを誡めつゝ『此世に效ふ勿れ、乃爾等が智慧の新なるを以て自ら變化せよ』(ロマ書十二の二)と云へり。然れば爾若し罪の爲に害き者とならば、痛悔を以て己を新たにせよ。『凡そ不法を行ふ者は我を離れよ、蓋主は我が泣く聲を聞けり。主は我が願を聽き給へり、主は我が禱を納れんとす』(九節十節)。惡人を避くることは是れ善行に至る最も必要なる方法なり。パリストスも之を吾人より要求す、而も吾人の親しき友若し吾人を誘惑し、又彼等と交際するとにして吾人に害を來すことあらば、吾人に最も必要の肢たる親友をも排斥すべきとを命じたり。主曰へり『若し爾の右の目爾を罪に誘はゝ抉りて之を棄てよ、若し爾の右の手爾を罪に誘はゝ斷ちて之を棄てよ』(マトスイ福音五の廿九、卅)と——爰に云ふ所は肢體を意味するにあらず、乃ち親友の交誼にして彼等自身に益なく、又吾人にも益なくして却て害を蒙らしむる時は、彼等との交情を排斥すべきとを云へるなり。預言者自らも斯くの如くにして善行に練習しつゝ、斯る社會を求めざりしのみならず、注意して彼等を己より遠ざけたりき。

六。視よ、痛悔の果を、視よ、涙の益を。斯くの如く痛悔したる靈は、既に如何なる情慾にも渡されざるなり。吾人も亦斯く行はん。吾人に害を蒙らしむる人ならば、王冠を蒙むる人なりとも、吾人は友誼を以て之を尊ばざらん、何となれば其人は縱し王たりとも、惡癖に耽ける人より惡しきはなく、之に反して、縱し其人四人たりとも善行を行ふ人ならば、之より高尚なるものなければなり。『蓋主は我が泣く聲を聞けり』とは云はずして『我が泣く聲を聞けり』と言へり。預言者は『蓋我が聲を聞けり』とは云はずして『我が泣く聲を聞けり』と言へり。爾は彼が爰に其行爲をも、聲をも、涕泣をも聲と名つけつゝ叫の音にはあらで、乃ち靈的狀態を如何に稀かに顯すを見るか、然らば吾人は眼より涙を流して泣くのみならず、靈より涙を流して泣くか。痛悔して神に聽かるゝ者は、容易に此幸福にも達し——惡人との交際を避くるとを得べし。『願はくは我が諸の敵は辱しめられて痛く擊たれん、願はくは退きて俄

に愧を得ん」(節十一)。此希望は其中に大なる利益を含蓄す、即ち彼等が愧ぢて後に退くことなり、何となれば惡しき行をなす者愧ぢて後に退く時は惡癖を遠ざかればなり。吾人は深淵に進み行く人を見れば、遠方より之を呼び止めて「人よ、爾は何處に進み行くか——爾の前には淵あり」と云ふが如く、預言者も惡人の後に退かんことを欲す。又狂奔せる馬は、速かに之を止めずば忽ちにして亡びん。醫師も或有害なる動物の毒より生ずる害を、極めて迅速に切斷して數々全體に感染する害毒の蔓延を止めんとを力む。吾人も亦自己の中にある惡癖を迅速に亡さん、是れ此病の發育して勢力を得ざらん爲なり。罪の傷を等閑にする時は、其傷益々大なる者となり、又此等の疾病は管に傷に止まらずして不死の死を生ず、然れど罪の傷は其始未だ小なる時に於て治療すれば大なるものとはならざるなり。視よ、人を辱しめざらんことを力むる者は、守はず、爭を知らざる者は友誼を守り、友誼を守る者は敵を有せず、敵を有せずして愛を養ふ者は凡ての善行を成遂ぐるを。惡の萌芽を等閑にせざらん、其益々成長せざるが爲なり。イウダもし貪を止たらんには盜聖の罪を犯す迄には至らざりしならん、又若し之を抑制したらんには至大なる惡を行ふに至らざりしならん。故にパリストスは唯放蕩姦淫を禁じたるのみならず、惡癖を其根底に於て亡しつゝ不注意なる瞥見をも禁ず、是れ容易に之に勝つことを得ん爲なり(マトテイ福音五の廿八)。神は假令最も感覺的預象的たりしとは雖もイウデヤ人にも斯く行へり。彼は如何に又如何なる狀態にて行ひしか。彼は勞作する動物の間に各種の動物を混用するとを許さゝりき(レヴィト記十七の十)彼は日晩れて後、典物を留め置くことを許さゝりき(復讐律例廿四の十二)——斯くして重なる犯罪、即ち第一には男色、第二には殺人罪、第三には殘刻及び不人情を預戒せり。然るに今や凡ては毫も耻づる所なくして公然と行はる、故に凡ては亡ぼさるゝなり。然れば爾に小なる情慾の萌す時は、其小なるにも拘らず、其情慾の養成せられて最も大なる艱難を生ずるとを想像すべし。吾人亞麻の小片の室内に燃ゆるを見て錯亂騷擾ぐは、其燃え始のみを見るにあらず、其始より終までを見越して不安を懷き、奔走して火災を消止めんとはするなり。然れども惡癖の靈の中に蔓延するや、火よりも強きが故に、吾人は之を預戒せざるべからず。吾人若し惡癖を等閑にせば、之を矯正すると一層困難ならん。船に就きて見るも亦同じ、即ち航海者は海の怒濤を上ぐるを待つて始めて不安なるに非ず、海の將に怒濤を上げんとする其時は已に彼等の不安なる時なり。吾等は小罪を

等閑にせず、力を盡して之を亡さん、是れ大罪を避けんが爲、及び光榮・權能・貴は今も何時も世々に父と聖神と共に歸する所の、吾人の主イエスキリストの恩寵と仁愛とに依りて、來世の福樂を受けん爲なり。アミシ。

第七　聖詠講話

ダヴィドがヱニアミンの族フス（或は一本にイエメニインの子フシイとあり）の事に因りて、主に謳歌せし所なり。

主我が神よ、我爾を賴む、我を悉くの窘逐者より救ひて、我を援け給へ。

一。聖書と歴史上の事實とは我が之を精密に叙述るを待たずして爾等の熟知せる所ならん、然れども或者は世事を經營み、或者は不注意にして、聖書と歴史上の事件とを聞かざるによりて、此聖詠の事實を詳細に述べざるべからず。宜しく注意して聽かれよ。此聖詠の事實は如何なることなるか。『ダヴィドが主に謳歌せし所なり』。然れども話されたることは今も何不明瞭なり、何となれば爾等は歴史を知らざればなり。而して吾人は當に責むべきのみならず、敬ふべきを以て其事件を語らざるべからず。然れば先づイエメニインの子なる此フシイは如何なる者なりしか、又ダヴィドが神に此聖詠を謳歌せし所のフシイの言の如何を述べん。

ダヴィドの子に不順放蕩なるアヱサロムなる少年ありき。彼は或時父に反抗し、父を王位より、家より、生國より、放逐し、自ら之に代りて凡てを横領せり、彼は出生も、養育も、成長も、前に述べたる事をも行ふを恥ずして、而も此等凡ての故障を打破り、自然法を蹂躙し、悉く混亂と恐懼とに充されし程殘忍かつ悖逆にして、人よりも寧ろ猛獸に類似したりき。實に其時は自然法、人の前に於ける廉恥、神前に於ける敬畏、老人に對する尊敬は全く破壞せられき。彼若しダヴィドを父として尊ぶことを欲せずとも、老人として彼を尊ばざるべからず、若し白髮を尊ばずとも、彼の善行に對して恥ざるべからず、縱し之が爲に恥ずとも、自己に如何なる凌辱をも爲さゞりしを、而して恥ぢざるべからざりき、然れども權柄を愛する情慾は、彼より凡ての廉恥を驅逐し、人をして猛獸たらしめたり。然れば、アヱサロムを生みて之を養育したるダヴィドが、追放者の如く、逃亡者の如く、將た移住者の如く種々の艱難を嘗めつゝ他地方の曠野に流浪するに際して、アヱサロムは父の有しゝ諸福を得て樂めり。

事既に斯る狀態の中にあり、軍士もアヒサロムの味方なり、諸市も此暴君に服從したる時に方りて、獨ダヰドの友にして尊貴なるフシイなる者事情の變遷したるにも拘らず、ダヰドに友誼を盡し、止りて孤忠を守り、而して一ダヰドの曠野に流浪せるを見ては、己の衣服を裂き、其頭に灰を振り注ぎて、痛く、而も眞に歎けり、彼は他の何事をも爲し得ざりしが故に、涙を以てダヰドを慰めたり。彼がダヰドの友たりしは事情及び權利の爲にあらずして、善行の友たりし也、故に權利の他の者に遷りたる時にも、彼は尚友誼を變せざりき。ダヰドはフシイの友誼に厚きを見て、彼に曰へり、實に此等のことは爾が眞に志を我に傾けし友たるを顯すも、然れども此は毫も吾人に助けず、乃ち吾人は吾人に及べる艱難を如何にして終るべきか、不幸なる情態より救はるゝに如何なる方法を見出すべきかを商議し且つ判斷せんことを要すと。彼は之を述べたる後フシイに左の商議を與ふ、曰く、我が子の許に行き、自ら彼の友の狀態を裝ひて我に彼の企謀を傳へ、又注意してアヒトヱルと商議せよと。此アヒトヱルは當時暴虐者を教導し、軍事に老練にして戰爭に巧なる者なりき——故にダヰドは其暴虐者よりも、寧ろ彼を畏れたり、ダヰドの所置は斯くの如く巧なりき。フシイは之を聽きて從へり、彼は毫も隱することなく、又己を以て其任に堪へざる者とも思はざりしが故に、若し我捕はれなば如何せんとも云はず。我が假僞の顯はれなば如何せんとも云はず。我が僞善を責められなば如何にせんとも云はず。アヒトヱルは巧者なり、恐らくは彼の看破する所となり、我が罪證は指摘せられて空しく亡ぶるならんとも云はず。彼は毫も斯くの如きことを思はず、唯神に凡ての希望を置き、危險を冒して暴虐者の軍營にと出發せり。我が此等のことを述べしは、唯ダヰドを讃稱するが爲ならず、彼が忍受たる艱難を示し、又此歷史より他の有益なることをも取りて示さん爲なり。然れば多くの者は屢々問をなして曰く、何に由りて義人は艱難に遇ひ、惡人は平安を得て樂むかと。茲に答を見出すことを得。義人は不幸なる狀態にありしも、惡人父の笞送者・天性の敵及び反抗者は、王の宮殿にありて幸福を得て樂めり。然れども惡人も此處よりして何等の益をも受けず、聖人も亦害を受けざりき、却て惡人は大なる悲哀に服し、聖人は悲哀によりて宛も黃金の熔爐に於けるが如く、一層純潔なる者となり、一層光明を發ちて輝けり。

二。之よりして學ぶべきものは、第一、爾義人等の艱難に遭遇するを見るとも、斯る艱難に際じて心を亂さゞること、第二、事情の如何によりて節を變せず、乃ち友道を

記憶すべきこと、第三善行の爲には決然として危險をも冒すべきこと、第四不幸の中にありても神の佑助を待ちて希望を存すべきことなりとす。然れば當時フシイは、軍隊をも暴虐者の前に於ける恐懼をも、騎馬の多きをも、軍士の行列をも、諸市の暴虐者に服從せるをも、曠野をも、ダヴィドの孤獨及往昔をも見ずして、只一つ神の勝つべからざる佑助と且仁慈とを見、且つ之に準じて彼此双方を判斷して、一は弱く、他は強きものなるを知れり。一は不正に行ひ、他は正義を守りしが故に、彼は多くの人々の在りし所に立たずして善行の幇助ある所に立ち、斯くして神の仁慈を受くるを得たり。我が之を云ふは、衆人は假令弱からんも、吾人は彼等と與にし、惡人は假令強からんも、之を遠ざけん爲なり、何となれば惡癖は假令全世界を己の味方に有すとも、何ものよりも弱く、又善行は孤獨なりとも、神を己の味方となすが故に何ものよりも強ければなり。誰か神に遺てられし者を救ひ得る。誰か神の助くる者を亡ぼし得る。フシイは此等のことを記憶し、希望を失はずして遣されたる所に行けり、彼は行き、暴虐者を見て之に近づけり。アヒサロムは假かにフシイを見、權柄好なるによりて其心暗み、注意して之を試むることをせず、傲慢に讒言して云へり、「爾何ぞ爾の友と往かざるや」（第二列王記＝サムイル後書＝十六の十七）と、彼はダヴィドを嫌み、之をおのれの大敵となすによりて、名をすら云はざりき。フシイは毫も驕かずして、答へらく、神の彼と僧にありし時、我は其味方なりしも、今や神は爾と僧にするが故に爾に勸めざるべからずと。此言は暴虐者の慢心を高ぶらしめ、毫も注意穿鑿する所なからしめたり、輕卒者はその聞ける凡ての言を信ずればなり——又アヒサロムは敵たるフシイに心醉し、猶豫せずして之を己が近臣の列に加へ、己が第一の友となせり。神は臨在し、事件を管理して此等のことを整全し給ふなり。頓て軍議の評定ありしが、或人々は直に攻擊すべしと云ひ、或人々は少しく猶豫すべしと云ひ、議論區々なりしが、軍議に巧なるアヒトフェルは、己の意見を述べて左の建議をなせり、曰く、艱難によりて心亂れたる爾の父を攻擊すべき時は今に在り、吾人もし彼に寸時の休息を得ざらしめば容易に彼を捕獲するとを得べし、今彼の警備なきに乘じて之を擊たば、味方に取りては些の困難なし（第一列王記十七の二）と。暴虐者は之を聞き、伴りて彼の味方と變じたるフシイを招ぎて、之を評議に與らしむ——苟も常識ある人ならんには、今歸降したる許の人に斯くも重大なる事を議せしむるが如き名譽と信任とを與へざるべし、然れども我が前に述べしが如く、神整全し給ふ時は困難なるとも容易なることとなる——暴虐者はフシイを招ぎて之に發言權を與へ、評議の間

題に就きて己の意見を陳ぶることを許せり。フシイは如何にせしや。彼曰らく、アヒトフェルは何時も誤らざりきと。爾は此人の智なるを見るか。彼は突然アヒトフェルの意見を排斥せず、而かも彼を稱揚して然る後に之を非難せり。以前に於て智なる計略を建てしアヒトフェルに對して先づ驚歎を示し、然る後徐々と現在の計略を非難して曰らく、我はアヒトフェルが今如何にして誤りしかを驚く、何となれば此計略は我が見る所にては不利益なりと思はる、吾人は今に於て攻擊をなさば、怒らされたる熊、怒に充たされたる爾の父は、甚く憤慨し、絶望の餘り死力を盡して奮進せん、吾人もし少しく戰を猶豫せば充分なる準備と安全とを以て彼を攻擊することを得べしと。アヒトフェルは此意見を善みし、之を以て最も益ありと云へり。然れどフシイの斯く云ひしは、ダヴィドをして其間に準備せしめ、勢力を恢復せしめ、これに軍隊を集合するの時を與へんと欲したるなり。彼は斯くの如くアヒトフェルの意見を排斥して、密かに若干の人々をダヴィドに遣して、彼に勝利を與ふべき己の意見を暴虐者の嘉したることを報道せり。實に斯くの如くなれり、即ちダヴィドは時を利用して準備し、遂に自ら進擊して勝利を得たり。アヒトフェルは己の智慧と經驗とによりて之を理解し、之よりして結果を推測したり、即ち斯る計畧はアヒサロムを滅亡せしむることなるべきを推測し、凌辱に堪へずして家に歸り、結跡を取りて自ら縊り、斯くして己の生命を終れり。

三。ダヴィドは此等のことを知りて此聖詠を作り、其中に於て神に感謝の歌頌を献じ、戰に於ける凡ての成功を神に歸せり。是に由りて彼は聖詠の始に於て『主我が神よ、我爾を頼む、我を……救ひ給へ』(節二)といへり、即ちフシイにあらず、人智にあらず、彼の怜悧にあらず、己の智慧にあらず、乃ち『爾を』頼むとの意なり。人々が吾人に如何樣なるかの善事をなさば、吾人も亦斯くなさん、即ち假令仁慈は吾人自らによりて、或は他の人々によりて吾人に顯されたりとするも、之が爲に神に感謝せん。吾人もし斯く行はゞ吾人の爲に毫も困難なることなけん。ダヴィドも斯くの如く行ひて、怜も左の如く云ふが如し、曰く、我は救の希望をフシイの言に置かずして、爾(神)の助力に置くと。視よ、ダヴィドは今も平常に於ても如何なる心の狀態をもつて云ふかを。彼は主神よとは云はずして、他の個所に於て『神よ、爾は我の神なり、我曉より爾を尋ぬ』(聖詠六十二の二)と云へるが如く『主我が神よ』と云へり。彼は願を以て神に向へり、他の人々に對するが如く、特に神に對する愛の裕なるにより

て神に向へり。神も亦義人に關して左の如く行へり、即ち神は衆人の神なるも、特に己を義人の神と名つけて『我はアウラアムの神、イサアクの神、イヤコフの神なり』(出埃及記三の六)といへり。視よ、預言者の智慧を、彼は『主我が神よ、我爾を賴む』と云ひて、我が敵を罰し、我が仇を亡ぼし給へとは附加へざりき、然らば何事を言ひしか。彼は唯己の爲に願ひて『我を救ひ給へ』といへり、即ち『我に悪くの窘逐者より』の悪を受けしめずして『我を援け給へ』との意なり。彼が如何に不幸の中にも天性を尊び、戰の時にも父を窘逐する者を子として見、危險の中にありても親たるの感情を忘れず、受難の中にも父の窘逐者てふ名を稱へざりしを認めよ。彼は斯くの如く子を愛し、かつ仁愛なりき、或は之を尙善く云はゞ、彼は斯くの如く智者たりしなり。天性の必然が彼を斯くの如きものと爲せしのみならず、その靈の温柔は彼を斯くの如き者となせしなり、又彼は凡ての事を以て、暴虐者よりも、寧ろ軍隊の處爲に歸せり、然れば彼は『我を悪くの窘逐者より救ひて我を援け給へ』といへり。爾は如何に彼が多くの窘逐者に就きても、怨むる所なくして述ぶるを見るか。彼は我に對して戰ふ者、我が所有を奪ふ者、我が實藏を以て過分に飽足する者より我を救ひ給へとは云はずして『我を窘逐者より』救ひ給へ。

『願くは彼は獅の如く我が靈を拔きて、援け救ふ者なき時の如く之を擘かざらん』(三節)と言へり。然れど彼は軍隊をも集め、多くの者をも己の味方に有てり、何によりて彼は『援け救ふ者なき時の如く之を擘かざらん』と云ふか。是れ彼は上より佑助を受けざれば全世界の助をも何とも思はず、而して上よりの佑助を得る時は衆人に棄てらるゝとも己を以て孤獨なりとは思はざるなり。視よ、彼は又何によりて『王は大軍に依りて救はれず、勇士は大力に依りて衛られず』(聖詠三十二の十六)と云ひしか。或者は此等の言を譬喩的意味に受けて『獅』と『窘逐者』とは悪魔及悪鬼を示すなりと云ふ。預言者は己の子が悪魔に誘はれ、悪魔の權内にあるを見て、其子と偕に斯ることに遭遇せざらんことを願ひ、又何によりて子が斯ることに遭遇したるかの理由を示せり。其理由とは、如何なることか。彼曰く、神の佑助を己より遠ざけたる不虔に由ると、是を以て彼は『援け救ふ者なき時の如く之を擘かざらん』と附加へたり。又聖書に、悪魔が獅と名つけらるゝことに就きて如何に云ふかを聞け、曰く『爾等の敵なる悪魔は、吼ゆる獅の如く巡り行きて呑むべき者を尋ね』(ペートル前公書五の八)と。又預言者は自ら他の個所に於て曰く『爾獅と大蛇とを踏まん』(聖詠九十の十三)と。此猛獸は種々なる形態を以て顯はる、然れど

も吾人にして警醒せば、獅も大蛇も塵芥に如かず、かつ何時も直接に吾人を攻撃せざらん、若し攻撃すとも蹂躙けられん、主の爾等は『蛇と蝎とを踐まん』(ルカ福音十の十九)といへるが如し。惡魔は激怒して獅の如く歩めり、然れども『パリストス』を有し、額に十字架及び聖神の火と、常に消えざる燈とを有する者に遭遇する時は、彼等を見ることすらなし得ずして後方に遁逃し、走り歸ることすら敢てなし得ざるなり。而して爾等我が述ぶる所の空言にあらざるを承服せんが爲に、パウルを見よ。彼も亦人なり、然れど獅は彼の衣服と影とを見て逃走りし程彼を畏れたり。而も是れ驚くべきことにあらず。獅はパウルより出でゝ廣がりたるパリストスの馨香に堪へず、善行の燈を見ることを得ざりしに由る。『主我が神よ、若し我何事をか爲し、若し我が手に不義あり』(四節)。吾人は單に祈るのみならず、聽かるゝ樣に祈るべきことを常に記憶せざるべからず。吾人もし神に悅ばるゝ樣に祈禱を献げざれば、其祈禱は望む所を受くるが爲に不充分なり。『パリセイ』人も祈りたり、然れど彼等は益を受けざりき、『ウデヤ』人も祈りたり、然れど神は彼等の祈禱より面を避けたり、彼等は祈るべきが如く祈らざればなり。是に由りて全く聽かれ得る祈禱を献くべきことを吾人に誡められたり。預言者は之を前の聖詠の中に聽かるゝ樣に願ふのみならず、之と偕に自らも當然なる行爲をなすべきことを言ひ顯せり。當然の行爲とは如何なる事か。曰く『毎夜我が榻を濕ひ、我が涙にて我の褥を濡す』又曰く『我嘆にて憊れたり』又曰く『凡そ不法を行ふ者は我を離れよ』又曰く『我が眼は憂に因りて枯れたり』(聖詠六の七至九)とあるが如き事是なり。

四。これらのこと即ち慟哭・涕涙・歎息・惡人より遠ざかること、神の審判を畏れ、之を危ぶむことは、神に聽入れらるゝ者となるが爲に充分なり。又預言者は他の個所に於て『吾が義の神よ、我が狹に在る時、爾我に廣を與へたり』(聖詠四の二)と言へり。神に聽容れらるゝ者となるは、第一、吾人が願ひし所を受くるに堪ふる時、第二、吾人が神の誡命に從ひて祈る時、第三、斷えず祈る時、第四、世の何事をも願はざる時、第五、有益なることを願ふ時、第六、自己の力よりも適當なることを行ふ時なり。人々の祈禱の神に聽容れらるゝや一樣ならず、例令ば、コルニリイは行の爲に(マルコ福音七の廿六)ソロモンは『己の爲に富有をも求めず、又己の敵の生命をも求めずして、惟訟を聽き別くる智能を求めたるが爲に』(第三列王紀三の十一)稅吏は謙遜の爲に(ルカ福音十八の十四)他の者は他のことの爲に聽容れられたり。聽かるゝことの此等のことに由るが如く、聽かれざるは、縱ひ其祈禱者は義人なりとも、之と反對なる場合に在りとす。誰かパウルより義人な

らんや。然れども其益なきことを願ふや聴かれざりき、彼曰へり『我三次主に之を求めたり、然れども主は我に謂へり、我の恩籠は爾に足れり』(コリンフ前書十二の八、九)と。又誰かモイセイより義人ならんや。然れども彼も亦聴かれざりき、而して主彼に曰へり『爾に足れり』(復傳律例書三の廿六)と、彼は約地に入らんことを神に願ひしも、其彼に益なかりしに因りて許し給はざりき。其他吾人は尚他の理由によりても聴かれざることあり、即ち吾人は祈りながら己の罪を棄てざる時なり。神はイウデヤ人に就き、イエレミヤに『汝この民の爲に祈る勿れ、又我にとりなしをなす勿れ』(イエレミヤ書七の十六)と言ひて此事を示せり。言ふ意は、彼等不虔を離れざるに爾彼等の爲に願ふか。縱し願ふとも我は爾に聴かざらんとなり。又吾人敵に對して何事をか神に願ふ時は、啻に聴かれざるのみならず、一層神を凌辱せん。祈禱は治療なり、此治療の應用を知らざれば之より何の益をも受けざらん。然れども吾人は『主我が神よ、若し我何事をか爲し』てふ祈禱の中に預言者の何事を云ふかを觀察せん。『若し我何事をか爲し』とは何の意なるか。彼謂らく、我は苦む、然れども我は父に反抗せしか、我は斯る不法を行しゝか。又預言者は爰に不法者の名を呼ぶことを敢てせざりしも、子の爲に歎きて且つ耻ぢたり。寛仁大度の人は、妻の姦淫せるを見るも、其罪名を唱ふるを敢てせざるが如く、ダヰドも亦斯くなせり、彼は、我は兩親に反抗せしか、我は父の窘逐者たりしかと云はずして『若し我何事をか爲し』と云へり。言ふ意は、我は此事に就きて何事を記憶するか。猛獸の間にすら見ざる所の父の窘逐者たらざることは、そも如何なる善行たるか。『若し我が手に不義あり』。我は其不義に就きて云ふにあらず、然れども如何なる他の不義も我が手の中になからんの意なり。彼之を云ふは傲慢によるにあらず、乃ち己が善行を示すの必要ありたればなり。然れど既に述べられたることは、尚次に述ぶべきこと程に重大ならず。次に述ぶべきことは如何なることなるか。曰く『若し我我が敵となりし者に悪を報いしならば』(節五)と。注意して聴かれよ。此中に述べられしは瑣細のことならず。凌辱せざるは善し、然れども凌辱の爲に復讎せざるは、智なる靈に最も善く、最も適當のことなりとす。假令ひ律法は、目は目を以て、齒は齒を以て償ふべきを命じて復讎を許し(復傳律例書十九の廿一)又復讎は律法を破ることにあらずと雖も、ダヰドは律法を破らざりしのみならず、多くのことに於て律法を超え、一層津法の區域以上に昇れる程智なりき、彼は律法の區域を踰えざるを以て善行の爲に足れりとは思はざりしなり。使徒パウロは『福音によりて生活す

るを『許しつゝ自らは爾く生活せず、乃ち報酬を受けずして福音を傳へたり(コリンフ前書九の十四)斯くの如く福たるダヴィドも亦律法は淩辱の爲に復讎することを許したるにも拘らず、其範圍内に止まらずして而も之を踰えたり。又吾人より要求さるゝは曾に敵に復讎せざることのみならず、之に善事を行ふべきことをも要求す、主曰へり『爾等を窘逐する者の爲に禱り、爾等を憎む者に善を爲せ』(マトスイ福音五の四十四)と。復讎せざることはダヴィドの爲に瑣小なる事にあらずして、寧ろ律法以上の行爲なりき、是によりて彼は『若し我何事をか爲し、若し我が手に不義あり、若し我我が敵となりし者に惡を報いしならば』と云ふ。天性は子に對する關係に於て復讎を妨げたるや固よりなり、然れども彼は曰へり、我は何人を辱しめ、何人に復讎したるかと。パリストス來臨の後は吾人より大にして且つ裕なる義を要求せらる、然るを吾人の義もし舊約時代の人々に如かずんば將た如何にして宥免されん、如何にして辨解し得んや。主曰へり『若し爾等の義はスリセイ等の義に勝らずば爾等天國に入るを得ず』(マトスイ福音五の廿)と。律法の下に在りて善を行ふ者と、律法以前に在りて同一の善を行ひし者とは同じからざるが如く、恩寵の下に在る者は、律法の下に在りし者とは同じからず、乃ち彼等の間に往々大なる差異あることあり。

パウルは之を惡癖に對する關係と、善行に對する關係とを以て解明しつゝ、彼が或者に對しては如何に驚き、又他の者をば如何に大なる罰に當るべき者となしたるを見よ、曰く『律法を有たざる異邦人等、性に率ひて律法の事を行ふ時は、律法を有たずと雖も自ら己の律法たるなり』(ロマ書二の十四)と。

五。爾はパウルが律法なくして善を行ふ者を如何に讃美稱揚するを見るか。又視よ、彼が恩寵の下に在りて罪を犯す者を、律法の下にありて罪を犯しゝ者と比較して大なる罰に當るべきものとなしたるを、曰く『若しモイセイの律法に背きし者が、二三人の證者ありて恤なく死に處せられば、況や神の子を踐み、自ら聖にせられし約の血を聖なりとせざる者の受くべき罰更に重きこと幾何なりと意ふか』(ヘレイ書十の二十八、二十九)と。又彼は律法以前に罪を犯しゝ者と比較して小なる罰に當る者となせり、曰く『律法なくして罪を犯しゝ者は、律法なくして滅ぶ』と、即ち其原告は律法にあらず、只一の天然にして、一層輕く罰せられんとの意なり、『律法ありて罪を犯しゝ者は、律法に由りて審判せられん』即ち己の原告は天然の外に尙律法ありて、一層重く罰せられんとの意なり(ロマ書二)。『若し我故なく我が敵となりし人をも救ひしに(我と親ある者に惡を報い

しならば願くは敵は我が靈を追ひて之を執へ、我が生命を地に蹂り、我が榮を塵に擲たん』(五節六節)。爾は我人の良心の勇敢にして潔白なるを見るか。彼若し全く己を信用せざりしならば、斯る艱難を豫期せざりしならん。この言の意味は左の如し、若し我凌辱めしならば、若し我復讐せしならば、我も亦此等のことに遭遇すべし。彼は自ら己を宣告し、己を審判し、適當の量によらずして、受くべかりし罰よりも尚重く罰せんことを請ひ、律法も彼を罰せざりし罰に己を期定す。視よ、是れ如何なる罰なるかを、彼は曰へり『若し、我故なく我が敵となりし人を救ひしに、願はくは敵は我が靈を追ひて之を執へ、我が生命を地に蹂り、我が榮を塵に擲たん』と即ち汚名と不名譽とを以て我を滅すべし、我が生命と偕に我が名譽をも失ふべしとの意なり。『我が榮を塵に擲たん』とは何の意なるか。是れ輕蔑すべし、足にて蹂むべし、我は敵の獲物となるべしとの意なり。誰か己の父、而も斯くの如く温柔謙遜なる父を凌辱窘逐したる破廉恥放縱なるアビサロムより不虔なる者あらん。ダヴィドは己に惡をなし者に惡を以て報いしか。彼は惡を記憶したるか。何時もなし。爾サウルの歷史を繙かば、斯る答は爾の爲に全く明瞭となならん。ダヴィドは千百回アビサロムに慈憐を顯し、之に勝ちて多くの戰利品を得たりしが、アビサロムは之に對して惡を為し、好計を構へ、毎日之を殺さんと力めたり、ダヴィドは之を獄に囚ふること一二回のみならず、實に多回なりき、アビサロムは衛士をも携へずして獄裡に眠れるを以て、ダヴィドにして之を殺さんと欲せば實に易々たるのみ、而も之を擊殺さんことを勸められしも、彼は之を宥して死を免れしめたり、又彼はアビサロムが己の敵となり、和すべからざる仇を含むことを知れるも己の怒を抑へたり、乃ち過去の記憶も、將來の畏も、其他之に類することも亦ダヴィドをして殺人を決心せしめざりしなり。彼は智を以て己を導き、己の手を抑へ、己の怒を鎖め、且つ自己に對して理由なく仇をなしし所の仇、無數の仁慈を與へたるに、却て之を殺さんとしたる敵を擊ち之を殺さんよりは、寧ろ自ら危險と其好計とに陷いり、生國および自由を奪はるゝことを擇べり。又多くの他のことによりて彼の靈の智なるを見るべし。彼は多くの重き艱難に己を期定めたり、例令ば成算なき者として止り、大なる危險を以て敵の征服する所となり、汚名の死、而も敵より受くる所の畏るべき汚名の死に服することを期定めたり、故に彼は死後己の善き記念を遺さんが爲に凡ての方法を用ひたり。然れども視よ、彼が如何なる艱難に己を期定めたるを、即ち益なくして苦み、敵

をして己に勝たしめ、死すること、而も普通の死にあらず、乃ち彼を記念する者なきに至るが如き汚名の死を受くることを期定めたるなり。勿論彼は全く良心によりて己を信用せざれば此等のことを期定めざりしならん。彼もし敵を有すると雖も、是れ彼の罪にあらず、彼は自ら敵を有する發端を與へざればなり。彼は己の子、に如何なる仇の發端を與へたるか。サウルに如何なる發端を與へたるか。彼は己の子が罰せらるべきことをなしゝ時、暫時之を教誨して歸さゝりしか、之を受けざりしか。又ダヰドは己を殺さんとしたるサウルを數回捕ひながら之を免さざりしか（第二列王紀略十四の廿一）。是故に爾ダヰドの敵を有しゝことを見ずして、其彼等を己の敵となしゝや否やを見よ。ハリストスも敵を有つべからずとは誡めず――敵を有するは吾人の權内にあらざればなり――只敵を惡まざるべきを誡めたり、吾人は敵を惡まざることに權利あるも、之を惡むの權利なし。理由なくして惡まるゝは吾人の意志に關せず、乃ち惡む者の意志に關す。然れば惡人は常に理由なくして空しく善人を惡む。又ハリストスが『故なくして我を惡めり』（イオアン福音十五の廿五）と云へる如く、彼等は理由なくしてハリストスをも惡めり。使徒等も敵即ち僞使徒を有し、預言者等も僞預言者を有せり。吾人は敵を有せざることを慮るべきにあらず、己の不正なるが爲又は己の罪ゆゑに敵を有せざる樣すべし、吾人は惡まるゝとも注意して自ら惡まず、又他人より遠ざからざる樣慮らざるべからず、何となれば仇を有するは此惡むことと遠ざくることゝにあればなり。我人に惡まるゝとも、自ら人を惡まざれば、縱ひ人我を敵となすとも、我はその敵にあらざるなり。我若し彼の爲に祈り、彼に善行を行はんと欲する時は、我如何で彼を敵となすべけんや。視よ、何によりてパウルも『若し能くすべくば爾等の力を竭して衆人と相和せよ』（ロマ十二の十八）と云ひしを。

六。然れば吾人自から當然なることを行はん、然らば之によりて相當の報賞を受けん。吾人より要するは何なるか。例令ば何人か爾を惡み、爾を凌辱むるありとせんか。爾須く彼を愛して之に善を行ふべし。彼爾を罵詈讒謗せんか。爾須く彼を祝福し、又之を稱讃すべし。然れども斯くて彼尙己の仇を止めざらんか。斯る場合に於ては彼は大なる報賞を爾に授くるなり。實に惡人は吾人の之を好遇するにも拘らず、尙頑固に仇を續くる程最も榮譽ある報賞を爾の爲に準備へて自ら己を弱むるなり。人を惡みて仇を止めざる者は、苦み疲れて斷えざる戰爭の中に一生を送るに等し、然れども超然として此等の矢面に立つ者は、毫も狼狽せずし

て最も大なる利益を受け、且つ彼等と和睦し仇怨を懷かざることを力めつゝ戰及び爭より己を救ふなり。然れば吾人は人を仇怨むことを避けて其根なる虚榮と貪婪とを滅さん、何となれば凡ての仇怨は金錢を偏愛し、又虚榮を求むるより生ずればなり。吾人若し此等の情慾の上に超然たる時は、仇怨にも打勝たん。誰か爾を凌辱めんか、能く忍耐すべし、彼は爾を凌辱めずして却て自ら己を凌辱めん。誰か爾を擊たんか、己の右手を擧ぐる勿れ、彼は同時に己を擊てるなり、即ち手を以て爾を擊つも怒を以て己を擊ち、且つ衆人をして己に對して惡感情を懷かしむ。此事にして若し爾に困難なりと思はれなば、何人か狂氣して爾の衣服を裂けるなりと思ひて謂へ、惡を忍耐したるは誰か、惡に服したるは爾なるか、或は之を爲しゝは彼なるか。其彼たるや明けし。其處に爾の衣服は破らるゝとも、惡を爲しゝ者は苦みし者よりも大なる惡を受けん、怒を生ずる程に心の破壞せる者の受けたる害は、毫も斯くの如きことを試みざる爾の害よりも一層大ならずや。爾、衣服は爾のものなりと云ふ勿れ、彼は爾よりも先に自己の心を破れり。膽汁若し其區域より溢れ出でざれば萎黄病の發せざる如く、怒も心を破らざれば法外のものとはならず。又爾萎黄病に難める者を見てその病を自己に受けんことを望まざるが如く、怒に對しても斯く爲せ。怨恨を競ひて之に倣ふ勿れ、自己の中にある此猛獸(怒)を制御せざることゝ何ものよりも先づ自ら己を害し己を滅す者とを傷め。斯る人々の實際に自ら己を害し居ることは、多くの人々が仇の關係を止めんと力めつゝ、仇となり居る人に向ひて、自ら己を容赦せよ、爾は自身に害をなすなりと言ひて說き聞かする人々より之を聞くことを得。怨恨は斯くの如きものなり、即ち怨恨は唯之を養成する者を害して万事を破る。然れば吾人は他人に復讐せんと欲して穩なる港を己より奪はざる樣すべし。誰か難船に遇ひ、溺れながら陸上に立てる爾を訴るありとも、爾の凌辱められざるや勿論なり、又爾は彼と偕に溺るゝが爲に陸地より下らざりしならん。爰にも亦斯く判斷すべし、爾を凌辱め爾を訴詐える者は、憤怒の渦中に陷いり、難船又は暴風に遇ひて溺るゝも、爾は能く之を忍耐し、彼岸に達して平安なることを得べし。爾若し彼に誘はれて之に倣ふときは、彼を溺れしめずして自ら己を溺らさん、『主よ、爾の怒を以て興き、我が敵の暴虐に向へ』(七節)。預言者は神が怒の中に起たざることを顯しつゝ『主よ、起きよ、吾が神よ、我を救ひ給へ』(聖詠三の八)といへり。爾『興きよ』てふ言を聽きて、毫も憊のことを思ふ勿れ。神に關して、神坐すと云ふとも、毫も憊のことを示さゞるが如く、

きよ』てふ言も亦然りとす。聖詠者曰へり『爾は坐して世々に至らん』（聖詠九十の九。二十八の十）と。爰に坐すとは何のことなるか。堅固・不動・天性の不變恒常なることは、彼が對句を以て言ひ顯したるが如し、何となれば彼は『爾は坐して世々に至らん』と云ひて後之に加へて『爾等は永く亡ぶ』（聖詠九十一の八）と云へり。神の坐すとは體のことにあらざるが如く、起つことも亦然りとす、即ち第一には、堅固を示し、次に罰し及び破る所の力を示し、第二には裁判權を示すなり、例令ば聖詠者が『義なる審判者よ、爾は寶座に坐し給へり』（聖詠九の五）と言ひ、ダニイルも『寶座を置列ぶるありて日の老いたる者座を占めたり』（ダニイル書七の九）と言ひしが如き是なり。尙王權を示すなり、例令ば、預言者が『神よ、爾の寶座は世々に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり』（聖詠四十四の七）と云ひし時の如き是なり。是に由りて『爾我が右に坐す』（聖詠百九の一）てふ表言は、尊貴の同等なるを示すなり。『爾の怒を以て』とは何を意味するか。此亦適當に理解せざるべからず。神の怒とは慾情を云ふにあらず、罰と苦とを示す也。『爾の敵の暴虐に向へ』（原本には爾の敵の終末に昇れとあり）。他の譯者は之を譯して『爾の敵の怒に向へ』（ヴォルト）と言ひ、第三の譯者は『我を激せしむる者の憤に』（シムフ）と云ひ、第四の譯者は『縛する者の憤懣に』（ブキ）と云ふ。視よ、預言者は爰にも亦如何に己の爲に報いずして神の光榮に就きて云ふかを。彼は單に吾が敵或は爾の敵を罰せよと云はずして『昇れ』と云へり。然れども高き者は如何樣にして昇るか。彼は常に至上者にあらずや。彼の天性の高さは減じ又は增さるゝものにあらず、彼は完全圓滿にして常に同一なればなり。彼は如何にして、又如何なる狀態をもて昇るか。彼は多くの靈の中に昇るなり。例令ば彼は數々久しく忍耐するを、敵はその恒忍を解せずして、之を以て彼を微弱なり、無力なりとなすことあり、是れ固より實際に於て彼は輕蔑せられざるも、彼等の靈の中に輕蔑さるゝが如し。

七。太陽は眼病者の爲に光明ならずと思はるゝが如く、神は斯る人々の智慧の中に小なる者無力なる者と想像さるゝなり。然れども太陽は唯眼病患者の爲に光明ならざるものの如く思はるゝも、實際暗きものにはあらず、斯くの如く神も亦無智なる人々に無力なる者と想像さるゝも、實際無力なるものにはあらざるなり。義人は何を云ふか。神よ、吾人の敵に對して進み、復讐して己が能力を示せ、是れ爾を小なりとする者が、彼等が受くる所のごとより爾の光榮を見ん爲なり。と如何にダビドが己に望を置かずして神を恃めるかを見るべし。『終末に』てふ言の下に、或者は『首に』を意味し、或者は如何なる敵も遁れざるべしと理解す。義人もし神と

同一の敵及び同一の友を有せば、その善行や大なり、之と同じく神の友を己の敵とし、神の敵を己の友とする者の惡や大なり。神に就きて、神諸敵を有すと云ふは、神が彼等を惡み、或は彼等を遠ざかりたるに由りてにあらず、乃ち神は彼等の惡しき行を忍耐せざるを爾云ふなり、義人も亦敵に復讐するを望まず、唯彼等の憎惡を避けつゝ敵を有す。『主我が神よ、起きて爾が定めし審判を行ひ給へ。萬民爾を環らん、爾其上の高處に升り給へ』(七節八節)。『爾が定めし審判を行ひ給へ』とは何の意なるか。是れ凌辱められたる者を助け、奸計に陷いりし者に注意を向け、爾が吾人に誡めたることを理解す、即ち預言者は神の敵に反抗すし給への意なり。或者は爰に他の或ことを爾自ら行を以て吾人に示るを約することなりとせり。『萬民爾を環らん』。爰にも如何なる人事的のことを想像する勿れ、假令ひ表言は斯くの如きも、意味は神に適ふことなり。『爾を環らん』とは何の意なるか。之を換言ゆれば、爾に歌はん、爾を頌せん、爾に大なる讃美を献らんとなり。預言者はエウレイ人が聖堂及び聖所に圍く立ち、隊をなして感謝の歌を献じたるにより、エウレイ人の狀態を以て讃美を表すなり。而してその言の意味は左の如し、復讐せよ、佑助けよ、此事は敵の前にも爾を高め、爾の民も爾に大なる讃美を献らんとなり。視よ、彼が如何に己に望を置かずして神を恃むを。預言者は神が何處に於ても敵と己の民とに讃揚せられんことを望むを表す。『爾其上の高處に升り給へ』。『其』とは誰のことなるか。大衆のことなり。言ふ意は、此大衆の爲に高處に昇り、吾人を昇せ、吾人を高め、高尚なる行を爲し、此大衆を榮譽ある有名なる者となし、之に以前の幸福を歸し給へとなり。視よ、如何に彼が何處に於ても祈禱と偕に教誨をも合するを。彼は前に『我を憐みて我が禱を聽き給へ』と云ひ、直に教誨に言ひ換へて『人の子よ、我が榮の辱めらるゝこと何の時に至るか』(聖詠四の二、三)といへり。彼は爰にも『主よ、高處に升り給へ』と言ひて『主は衆民を審判す』(九節)と續く。他の譯者は『主は審判せん』と云ふ(不明の譯者)。彼は萬物が理由なくして、偶然に存在すと思ふ所の人々に、吾人の事業吾人の行へるとに責任を要求する照管者あることを教ふ。而して彼は爰に審判してふ言を以て、來世の審判および現在の審判をも會得せしむ。彼處に一般の公審判あるも、爰に神は不注意なる者を警醒し、衆人の上に照管者あることを不信者に悟らしめつゝ、個々別々の狀態を以て責任を要求す。『主よ、我の義と我の玷なきとに循ひて我を審判せよ』。『願はくは惡者の殘害は絶たれん、

義人は爾之を固めよ』(九節)。然れども彼は如何にして他の個所に於ては『爾の僕と誣を爲す母れ』(聖詠百四十二の二)と云ひて、爰には『我の義に循ひて我を審判せよ』と云ふか。彼は他の個所に於ては或事に就きて云ひ、爰には他のことに就きて云ふなり。他の個所に於ては『爾の僕と誣を爲す母れ』と云ひて、爾は我と誣を爲さず、爾の顯されたる仁慈と比較して我が生命を迫跡する勿れとの意を表す——故に彼は『蓋凡そ生命ある者』若し爾と誣を爲さば『一も爾の前に義とせられざらん』と加ふ。而して彼が爰に言ふ所は其ことにあらず。彼は神によらず、自ら己によりて審判せられんことを欲す、是に由りて『我が義に循ひて』と云ふなり。爰に彼が義と名づくるは、何事にも不義の手を伸べざることなり。彼は既に『若し何事をか爲し云々』(四節)の言を以て之を表し、又『彼は我の玷なきに循ひて』てふ言を以て同一のことを表せり、視よ、我は何によりて審判せられんことを欲するかの意なり。爰にも義人の勇敢は大なり。彼の之を言ふは必要に迫られしなり。如何なる必要に迫られしか。多くの無智なる人々が預言者の苦み難めるを見、彼に就きて不良なる憶想を廻らしたるに由る。無智なる人々は他人の不幸なるを見るや、其生活に就きて常に惡しき斷定をなすこと多し。イオフと僧に斯くの如くありき。或者は毫もイオフの惡事を知らずして、彼に云へり、爾の受くる罰は爾の犯しし罪より少しと(イオフ書三十三の廿七)。野蠻人等は蝮がパウルの手に懸れるを見、彼をも惡人なり、犯罪者なりとして『此の人は海より救はれたれども、義は其生くるを容さず』(使徒行實二十八の四)といへり。セメイもダヴィドの不幸なるを見、惡しき憶想を廻らして彼を殺人者と名つけたり(第二列王紀十六の七)。

然れば爾等と僧に斯ることのなからん爲に、此事に就きて少しく述ぶべし。實に我は多くの者の『若し神貧者を愛したらんには、彼等の貧者たるを許し給はざりしならん』と云ふを聞く——他の者は人の長病に苦しめるを見て、彼は何人に施をなしたるか、何處に彼の善行あるかと云ふを聞く。是故に爾等も亦斯くの如き罪を犯さゞるが爲、此事に就きて判斷せん。常識ある人すら善人を惡みて惡人を愛し得ざらんに、爾は主に就きて如何で口を開きて褻瀆し、又此迷謬の重大なるを解せずして——恰も神は貧者の縱ひ善人たりとも之を惡み、及び富者の縱ひ惡人たりとも之を愛すと云ふを敢せんや。爾斯くの如くして罪を犯さざるが爲に神の愛することと惡むことを知れ。神は何人を愛するか。彼はその誠を愛する人を愛す。彼は『我も之を愛し且彼に來らん』(イオアン福音十四の廿一、廿三)といへり、即ち富者にあらず、健康

者にあらず、乃ち我が命令を遵奉する者を愛すとなり。又神は何人を惡み、何人を遠ざくるか。彼の誡を行はざる者なり。然れば爾神の誡を行はざる人を見ば、縱ひ其人壯健なりとも、財貨を以て圍まるゝとも、之を以て神の惡み給ふ者の數中に置くべし、然れど善人を見ば、縱ひ其人疾病或は艱難の中にありとも、之を以て神に愛せらるゝ者の數中に置くべし。神の愛は其にあらずして之にあり。爾は此世に於て王に愛せらるる者が、戰爭の際特に衆に卒先して危險に陷いり、傷を負ひ、進軍に遣さるゝことを見ざるか。『主は其愛する者を懲し、凡そ納るる所の子を鞭つ』(エウレイ書十二の六)ことを爾は聽かざるか。然れども爾は云はん、多くの者は之を見て惑ふと。然り然れど其惑ふや善人の罪過あるに、よるにあらず、己の無智なるによりてなり。爾等の知れるが如く、吾人の勞に報いらるゝは此世にあらず、此世にあるは苦行にして、報賞と榮冠とは來世にあり。苦行の時、戰の日に休息と安全とを求むる勿れ、異れる時を混同する勿れ。然れども爾は云はん、多くの者は荏弱しと。神は荏弱者のためにも照管す、神は多くの義人に倚此世にありて福を受けしめたるも、是れ彼等自らの爲にあらずして荏弱者の爲なり。是に由りて義人の艱難を受くることは爾の惑となるとも其平安なる生活をなすことは爾を固むべし、又若し惡人の幸福を受くることは爾の心を亂すとも其罰と苦とに服することは爾を愚むべし。爾はパリストスが世に在りて爾等患難を受けん』(イオアン福音十六の三十三)と云へるを聞かざりしか。彼が之を云ふに際りて爾等は何とて平安を求むるか。爾は何ぞパリストスが『爾等は哭き哀まん、世は喜ばん』(イオアン福音十六の二十)と云ふを聞かざりしか。斯くの如く若しパリストスの言に反することの生せしならば、無智なる人々は正しく惑はされしならん、然れど凡てのことにして當然に行はれなば、爾は惑はされざりしならん。然れども爾は云はん、何の爲に神は斯く定めたるかと。追究する勿れ、試むる勿れ。『造られし者は之を造りし者に、爾は何ぞ我を斯く造りしかと云はんか』(ロマ書九の二十)。視よ、何によりて預言者は無數の惡癖に滿たされて神の道を追究したりしイウデヤ人を責めつゝ『彼等は義を行ひ神の法をすてざる人々の如く我が途をしらんことを好めり』(イサイヤ書五十八ノ二)といへるかを、彼等は主人を怒らしめ、多くの罪過を犯しゝ或僕が、主人の怒を鎭むるの代りに何故に主人が斯く怒りしかとの答を要求したるが如くに行へり。己が罪を痛哭して之を洗ふの代りに答を求む勿れ、我が之を云ふは、理由を顯し得ざるに因るにあらず、自己の救贖を虛ることに對する此好奇心より爾を轉せしめんことを望みてなり。神は何の爲に斯くの

如く定めたるか。人類に對する寛容によりてなり。彼は短かき生命のある現世に於て勤勞すべきことを定め、而して老いざる不死の生命ある來世の爲に榮冠を保存せり。此等の勤勞は速かに終りて過去るも、榮冠は永遠に存して常に終なからん。彼は之を以て他方よりは善行を愛することに靈を練習す。靈にして善行を爲すに困難あるにも拘らず、又善行の爲に未だ賞を受けざるにも拘らず善行を選ぶ時は、善行に對する傾向と大なる熱心とを生じ、惡癖の快樂あるに拘らず、又惡癖の爲に未だ罰に服せざるにも拘らず惡癖を避くる時は、之を惡み之を遠ざくるの習慣を生ず。斯くして靈は惡癖を遠ざけ、善行を愛する習慣を得る。彼の斯く定めたるには他の理由もあり。如何なる理由なるか。悲哀は特に吾人を智ならしめ、堅固ならしむるに由る。尙之と偕に他の理由あり。如何なる理由なるか。神は吾人に現在のことを輕んじ、之に執着し、繫がれざるべきを敎へんと欲す。又神は何の爲に悲哀勞力を現世に置きて、喜ぶべく樂むべき凡ての快樂をば速かに變遷する者と爲したるか。『願はくは惡者の殘害は絕たれん、義人は爾之を固めよ』(十節)。『絕たれん』とは何を意味するか。言ふ意は、罰は去り、惡人の殘害を止めよとなり。腐敗せる傷を潔むるに苦き藥を用ひ、之を燒灼、切斷するが如く、惡癖も亦罰を以て制止さるゝなり。

九。吾人は之を知りつゝ罰せられて苦む者の爲にはあらで、不法にして罪を犯す者の爲に泣かざるべからず。罪を犯すは第一の惡なり、罪を犯して如何なる治療をも受けざるは第二の惡なり、或は之を正しく云へば、此ぞ第一の惡、而も最も重き惡たるなり。病に罹るは重大なることにあらず、之が治療を受けざるを重大のことなりとす、又憐むべきは腐敗したる傷を有する者にあらず、傷を負ふて醫師の助を受けざる者なり、吾人は切斷より生ずる痛傷を意とせじ、唯々全快せんと欲して之が切斷燒灼を受くる者を以て全快の見込ありとなすが如く、靈に就きても斯くの如く思考せざるべからず、即ち吾人の悲み歎息すべきは、罰せられて壯健を恢復する者の爲にあらず、乃ち不法にして罪を犯す者の爲なり。然れども爾は云はん、若し罰にして惡癖を制止するを得ば、吾人は何故に每日罪の爲に罰せられざるかと。若し然らんには、人類は久しく滅びて痛悔するの時あらざりしならん。パウルを記念せよ。彼若し窘逐したるが爲に罰を受けて殺されしならば、彼如何にして痛悔し、痛悔の後多くの善行を行ふを得んや、換言すれば、眞理に對する迷謎の中より全世界を引出す時を得ざりしならん。又何人か重傷を負ふあらば、醫師は其傷を

治療し、病者を助くるが爲に、傷の性質の要求する強き藥を用ひずして、病者の力に堪ふる藥を用ふるを見ざるか。然れば神も俄かに衆人を罰せず、また其罪に相當なる罰を與へずして、輕く而も漸々徐々と之を罰し、また數々或者を罰して、これを以て他の多くの者を悟らしむ。體と偖にも亦數々斯くの如きことあり、即ち一肢を切斷して多くの他肢に健康を與ふることあり。視よ、義人の靈は如何に愛に充され、如何に義人は常に公益を求めて惡癖を亡ぼさんことを求むるを——是れ敵に復讎せられん爲にあらず、乃ち敵をして惡癖より遠ざからしめん爲なり。吾人も亦如何にして惡癖を制止すべきかを常に觀察せん、吾人は夫の絹布を身に纏ひて惡癖の中に溺るゝ者の爲に悲み、又假令ひ非常の貧困と戰ふも善行をなして生活する者を尊び、彼等の外部を遺てその靈を洞察せん。斯れば此は富み他の貧しきを見ん。誰か外部に光輝燦爛たる衣服を着るとも、そは實に何程の重みなるか。彼は何を以て工場及び衣桁に勝らんや。彼は何を以て之を販賣する商人よりも富まんや。然れども義人の富は斯くの如きものならず、其富は堅牢にして確實なり。富者は斯く貧しくありつゝ之を感せずとも毫も驚くべきことにあらず。又智慧に故障ある者己が病を感せずとて毫も彼等の幸福にあらず、否、大に憫むべき者なり、彼等若し感じたらんには兎に角醫師に就きて治療を請ひしならん、然るに彼等は今や此惡病に罹りて、其罹りたることさへ悟らざるは其重患たるを知るべし。是に由りて富者は富みて樂むにも拘らず、其如何に惡に服するかを感せざるは特に彼の爲に歎すべきことなり。富を樂むは普通の人にあらず、極めて無智なる者に適當なり。『義人は爾之を固めよ』とは何の意なりや。言ふ意は、惡人人の罰せらるゝや、之より二の幸福の生ずるが故に、義人は一層注意深き者となる、即ち惡人等は惡より遠ざかり、義人は一層善行に固着す。强壯者は他人の忠部を燒灼し、又は切斷するを見て一層己の健康に注意するが如く、爰にも亦同一なり。實に外見上自己に對して注意深かりしが如き多くの人々すら惡人の幸福を受くるを見て誘惑され且つ失望せり。故に預言者は他の個所に於て『我が步殆んど失へり、狂妄の者を嫉めり』(聖詠七十二の二、三)と云ひ、他の記者は『惡人の途のさかゆるは何故ぞや』(イエレミヤ書十二の一)といへり。イオブも亦斯くの如き多くの疑問を發したり。然れども斯くの如く言ひ、斯くの如く問ひしは、彼等の不完全なりしに由る、然るに今や之を以て心を亂さるゝは決して容すべからず、何となれば斯くの如き智に敎へられ、來世に就きて斯くの如き敎を受け、地獄に就き、天國に就きても、彼處に於ては各人の功

勞によりて報賞を受くることに就きても最も明瞭なる教誨を受けたればなり。

『義なる神よ、爾は人の心腹を試みれば、我の盾は心の正しき者を救ふ神に在り』(十一節)他の譯者(ヴォンド)は『人の心腹を試むる義なる神よ、爾は我の盾(幇助の意)なり』と云ひ、第三の譯者は『義なる神よ』(不明の譯者)と云ひ、又七十譯者は『人の心腹を試むる神よ、神よりする我が盾は義し』といへり。預言者は嘗て神全世界を審かんとすと言ひしが、今や其如何に審くかを述ぶ。曰く、神は證者をも、詰問をも、證據をも、證書をも、其他之に類する何事をも要せず、神は自ら隱微を知ればなり。然れば如何なる無智者も、斯く廣大なる世界は如何にして審かるゝかと云はざるべし。存在せざりし世界を造りし者が既に存在する者を審判するは易々たるのみ。預言者は爰に肢體の位置より比較を取りつゝ、隱れたる思、最も內部の最も深き思を『腹』と名づく。

十。『試みる』或は他の譯者の『尋求むる者』と云ひしは何の意なるか。表言は人事的なれども、其意は神に適す。パウルが『心を察する者』(ロマ書八の二十七)と云ひつゝ明かに知ると云ふ言の代りに『察する』てふ言を用ひし如く、預言者も亦正しく知る所の者と云ふ言の代りに『試むる者』てふ言を用ひしなり。又『尋求むる』とは露すの意にして、パウルが『皆裸にして其目の前に露はる』(四の十三)と云へる如く、正き理解と知識との徵表を成す。

『我が盾は義し』。他の譯者は『我の盾は義なる者』となす。『神よりする我が盾は義し』とは何の意なるか。言ふ意は、此盾は正しく神の我に顯されたるものなり、我は毫も不義なることを願はざればなり。然れば吾人も亦上よりの佑助を受けんと欲せば、正義に適合したることを願はざるべからず、是れ正義に適する祈願を以て『心の正しき者』を救ふ所の神を自己に傾けしめん爲なり。神は之に對して助け、之に對して特更に注意し給ふなり。預言者曰く、我は己の手を不義に伸さず復讐を望まざるが故に、神の盾は正しく我に與へらるゝならんと。吾人は之を知りて賜を受くるに妨害となることを毫も願はざらん。爾若し敵に復讐するを願はゝ、爾の盾は不義とならん、何となれば此は盾を與ふる者の、法に相反すればなり、又富、美或は何事か之に似たるもの、世俗のこと、速かに變遷するもの、靈智に反することを願ふも亦同じ。吾人は受くる樣に願はん。『神は義且勇毅にして寬忍なる、審判者なり、又彼は凡ての日に怒らざる者』(十二節)。他の譯者は『凡ての日に怒らざる者』(不明の譯者)となす、エウレイ語の聖詠には『一

生涯』とあり、又或人(アキラ)は『威す者、怨まざる者、罰せざる者』と云へり。此等の言の意味は左の如し、神若し『義』なれば、彼は勿論不義者を罰することを希望すべく、若し『勇毅』なれば、無論不義者を罰せんとなり。然れども爾は云はん、彼若し義によりて審かば、神の仁愛何れにかあらんと。彼の仁慈なるに、第一彼が俄かに罰せず、又特に再生の洗盤に於て諸罪を赦すにあり、第二、痛悔を賜ふに在り。爾若し吾人が毎日罪を犯すを思はゞ、特に神の仁愛の得も云はれざる、程偉大なるを見ん。預言者も之を表しつゝ『神は義且勇毅にして寛忍なり』とは云ふなり。爾は疑ふならん、神若し罰することを能くし、又欲せば、何故に罰せざるかと。預言者曰く、彼が『凡ての日に怒らざるは』以て其寛忍なるを知るべしと。是れ或無智者の、神は無力なるによりて罰せざるが如く思はざらん爲に、神の寛忍大度は其罰を猶豫する所以なるを示すなり。神の寛忍なるは爾を痛悔に導かん爲なり、而して爾若し此治療によりて何の益する所なくば、彼は罰を爾に遣さん。斯れば吾人は毎日罰を受けん。若し是れ不正ならんか、預言者は『凡ての日に怒らず』てふ言を或重なることの如く示さゝりしならん。然れども行爲が罰を要求するも、神の仁慈は相當の罰を與へざるが故に、預言者は斯く云へるなり。爰に預言者が如何に神の無慾なるを示して、罰を『怒』と名つくるを爾は見るか。何人も怒を人に移さず、自ら心の中に怒を有し、而して人には罰を加ふるにあらずや。斯くの如く罰とは彼が『凡ての日に怒らず』てふ言を以て示す所のことに外ならざるなり。何故に彼は『凡ての日に』と云ふか。各人は深く己の良心内に入るべし、然らば之を捕へん。我は各人の隠微たる罪に就きて云はざらん、誰か普通の罪を避け得る。如何なる罪をか避け得る。例令ば、吾人は怠惰緩慢にして祈らざる日あらんか。而も之が神の怒に當ることは左のことより見るべし。我に告げよ、爾若し欠伸しつゝ裁判官の前に近づきて叱責せらるゝとも、彼は直に爾を處罰し、又流罪に處するかを。爾は云はん、彼は人なるが故に然せずと。如何にして然るか。彼は人として辱められるゝとも正に怒るべからず、何となれば彼は人たるの價値によりて、同一なる者の辱むる所となりたればなり、然れど神は辱められて正に罰を遣ずことを得。神に對する罪は人に對する罪よりも大なればなり。而も人は斯く行ひつゝ己の幸福を目的とするも、神は爾の幸福を目的とするが故に、此關係に於ても、神に對する罪は正に大なる怒に相當す。爾等の知れる如く、己のものを求むる人を輕蔑すると、人のものを求むる人を輕蔑するとは同

一ならず。後者は大なる怒に相當す、爾は己の怠慢を棄てざるのみならず、却て己の爲に益あることを求めんと欲するに由る。倘何人か徒らに兄弟を辱めざりしか。我に向ひて、我は兄弟を辱めしことなしと云ふ勿れ『爾等パリストスに在りて奴隷も自主もなく、男性も女性もなければなり』(ガラテヤ書三の二十八)。又誰か人を議せざりしか。誰か虛言せざりしか。誰か好色の眼を以て婦女を見ざりしか。誰か嫉まざりしか。誰か高慢せざりしか。誰か無益の言を發せざりしか。此等のことは皆罰せらるべきなり。吾人もし靈のことを慮らず、又世俗のことに關して等閑なりしとも、或辨解をなすことを得、然れども今や吾人は此口實をも奪はれたり。吾人は世俗の事に勇むも、心靈上の事には全く等閑なり。是に由りて神は寛忍なりと聞きて人々の益々怠慢せざるが爲に、預言者ば『人反正せざれば其劍を礪ぎ、其弓を張りて之を向け、是が爲に死の器を備へ、其矢を以て火箭と爲す』(十三節十四節)と附加ふ。

十一。爰に神には手・足・目などあるが如く云ひて人の如くに神を想像する者等は何を云ふか。刀劍・弓・矢・砥石・矢筒は天にあるか。然れど他の記者は曰へり『爾熱視すれば山と地の礎とは畏によりて等しく震動す』(シラフ書十六の十九)と。預言者も亦曰へり『彼地を觀れば地震ふ』(聖詠百三の三十二)と。彼若し唯地を視て其基礎震動せば、況て之を人々に行ふは至て易きことなり。神は一見して、或は只希望を以て全世界を破壞することを得、何となれば之を意志の一命令を以て造りし者は、一の希望を以て之を破壞するは容易なればなり、然るに斯く大能ある者に就きて、神は弓と劍とを有すと云ふは何故ぞや。若し『地の深き處は其手に在り』(聖詠九十四の四)又主は『地の上に住する者を蝗の如く、諸の國民は桶の一滴の如く、權衡のちりの如く』塲所取らしめ(イサイヤ書四十の十五、二十二)主より遣されたる神使は、瞬間に於て十八万五千人を殺したらんには(第四列王記十九の三十五)否神使のことは云ふまでもなく——蠅・蝗・昆蟲を以てエギペトの軍隊を滅したらんには、神に取りて弓何の要かあらん、劍何の要かあらん。然らば何によりて神に弓あり、劍ありと云ふか。聽衆の愚昧なるに由り、武器の普通名稱を以て彼等の靈を感動せしめん爲なり。凡そ吾人の『生命は其手に在り』(ダニイル書五の二十三)何人も『其嚴寒を淩ぐこと能はず』(聖詠百四十七の六)斯る者に武器何の要がある。然れども我は前にも述べし如く、聽衆の愚昧なると無感覺なるとに因りて斯く云ふなり。『礪ぐ』とは何の意なるか。鋭くすることなり。砥石彼に何の要かある。彼の劍には錆あるか。常識ある者誰か之を文字の儘に受くべき。我が前に述べたる如く、預言者は此等

のことを以て罰を像り、及び最も無智なる人々に、爰に言語の上に止まらず、此よりして適當なる意味を抽出すべきことを示さんが爲に、至て感覺的の表言を用ひしなり。何によりて神に『怒』及び『憤』を歸するかを疑ふ者は、一層此等の表言に就きて疑はん。若し之を文字通りに解せずして適當に受くるの必要あらば『怒』及び『憤』てふ言も亦同樣なるや明けし。感覺的の表言は頑固なる聽者を感動せしむるが爲に用ひらる、何となれば預言者は前に述べられたる表言を以てすら滿足せず、乃ち尙人事的表言を附加ふるは其惹起し、畏を強めん爲なり。預言者は神を以て劒を有てる者としてのみならず、武具をも着る者として顯せり。劒は彌がるといふを聞き、或は弓も既に手にありといふを聞くも衆人の一樣に畏れざるに依り、預言者は人事的表言を以て聽者の靈を震動せしめんと欲して『其弓を張りて之を向け』と云へり、是れ聽者を畏れしむると同時に神の寬忍と其怒とを示すなり。彼は放てり、或は發したりとは云はずして『張りて之を向けたり』即ち放たんとしたりと云へり。然れど新約に於てイオアンはイウデヤ人と談話しつゝ、或る之に似たることを云はゝ、舊約に於て斯くの如く話されしは驚くべきことにあらざるなり。『既に斧も樹の根に置かる』（ルカ三の九）。如何にして置かるゝか。

神は斧もて樹を伐る樵夫に倣ふか。爰にも斧と樹と多其儘に會得せざるべからざるか。否『其箕は其手に在り、其禾場を淨めて其麥を倉に斂め、糠を滅えざる火に燬かん』（マトテイ福音三の十二）と云ふ時は、糠と麥とを共に文字通の意味に受くべからず。斧は何を意味するか。人々なり。糠は何を意味するか。惡人なり。罰と苦となり。樹は何を意味するか。善人なり。吹くことは何を意味するか。惡人なり。麥は何を意味するか。斯くの如く爰にも所謂刀劒弓矢は罰と苦とを示すなり。次に預言者は『張りて之を向け』てふ言を以て、罰の猶豫及び遲延而も長からず、乃ち將に終らんとする遲延を表す。又彼は矢を『死の器』と名づく。耕作の爲に必要なる器を農具と名づけ、航海の爲に必要なる器を航海具と名づけ、織物を製造する器を機織器械と名づくるが如く、彼は死を致す器を死の器と名づく。次に死の器を如何なるものと會得すべきかを解明して、神之を欲する時は罰の速なるを表しつゝ『其矢』と云ふ言を附加ふ。『火箭』とは何を意味するか。罰せられたる者苦に服したる者の意なり。火にては足らずして尙箭を要するか。爾は此等のことが寓意的にして、斯くして一層畏を起さしむるが爲に言語を強められたることを見ざるか。而して彼の言の意味は左の如し、神は罰せ

らるべき者の爲に罰を準備へたり。彼若し別に言はんか、斯る畏を起さゞりしならん、然るに今彼は矢・劔・弓・之を張ること、之を發つこと、死の器と焰とを示し、斯る異樣なる名稱を以て聽者に畏の感情を强めたり。次に此畏を減じつゝ『火箭と爲す』てふ言を附加ふ。或無智者が神は其手を衆人の上に伸し、衆人に對して武裝すと思はざるが爲に『火箭』てふ言を附加ふ。パウルも主權者に就きて『彼が劔を佩ぶるは徒然ならず』(ロマ書十三の四)と云ひて同一の意を表せり。若し主權者の劔にして之を用ひて畏を起さしむべくんば、況て神の劔に於てをや。然れど神は罰の實際に行はれざるが爲に、言語の上に於て罰を强め、之を畏れしむるも亦其非常なる仁愛を顯すなり。彼は人々をして罰に近づかざらしめん爲に、弓を張りて準備し、矢を置きて罰せんとす。

十二。預言者は『礪ぐ』てふ表言を以て語氣を强めて、罰の勢力と其速力とを示し、『張る』てふ表言を以て罰の切迫せるを示し『向け』てふ表言を以て若し矯正せざれば罰を免れざることを示し『火箭』てふ表言を以て彼等の最も罪過ある者なるを示す、是れ彼等が此等のことにより、悟りて不虔を棄てん爲なり。又もし爰に憤と怒との作動きたらんには、神は罰せらるべき者に此事を預告せざりしならん。

怒にして若し特に充分なる力を以て罰と苦とを與ふるに進まば、斯くの如く作動かずして却て之に反せん。敵及び凡そ人を罰せんと欲する者は、其罰することを云はざるのみならず、剩へ密かに攻擊す、是れ罰せらるべき者が、之を知りて預戒せざらん爲なり。然れども神の行ふ所は否らずして全く之に反す、即ち神は預め之を告げ、之を延期し、言を以て之を畏れしめ、又凡ての方法を講ず、是れ其の威嚇の實行せられざらん爲なり。神はニネヴヤ人に斯くの如く行へり。又彼は彼處に弓を張り、劔を礪ぎ、矢を備へたるも、之を以て攻擊せざりき。爾はイオナが『四十日を歷ばニネヴヤは滅亡さるべし』(イオナ書三の四)と云へる其言の、弓なり、矢なり、礪がれたる劔なることを見ざるか。然れども神は此等の矢を放たざりき、此矢は放たんが爲に備へられしにあらず、罰を猶豫せんが爲に備へられしなり。軍士は敵を罰するが爲に武裝さるゝも、神にありては然らず、乃ち畏にて人々を悟らしめ、以て己の手を罰より止めん爲なり。吾人は心を亂さゞらん、言を以て起されたる畏は大なる仁愛の記號なり、而して神が最も畏るべき表言を用ふる程其言は神の豐富なる善心より生ず。又兩親の子女を罰することを欲せざるや、言を以て最も强く怒を表すが如く、神も亦罰することを欲せざる時は、言を以て最も强き畏を起さしむ。

彼が『ゲエンナ』(地獄)を備へたりと云ふは、吾人を地獄に投せざらん爲なり。故に福音の中には天國のことよりは寧ろ罰のことを多く言へり。無感覺の人々を敎へて之を善行に向け、惡癖を避けしめんには、之に幸福を約束するよりも、苦の畏を示すを可とす、神が特に後者の方法を數々用ひたるは之が爲なり。吾人は畏るべき表言を聞くも悲まざらん、斯る表言は神の寛忍と義鞫とを顯しつゝ大なる益を來たせばなり、吾人は救に失望せざらん、神は寛忍なればなり、不安に陷いらざらん、神は義なればなり、此處に神は大なる寛忍を示すも、之を利用せざる者は彼處に於て罰に渡されん　吾人は斯る事に遭遇せざらん爲に、尙現世に於て神の罰を避けん。『視よ、惡者は不義を宿し、殘害を孕み、己の爲に僞詐を生めり』(十五節)『阱を掘り、之を掘り竣りて、自ら設けし穴に陷れり』(十六節)。預言者は神罰せんとすと云ひて、上より來る怒の彼等の上に懸ることを示し、以て聽者を悟らしめたりしが、今や神は實行を以て聽者を敎へ、尙之を罰する前に不虔その物の罰なることを示せり。パウルも之を表言しつゝ『其迷謬に當れる報を已の身に受けたり』(ロマ書一の二十七)と云ひ、又不虔によりて非常なる艱難を受くる者の例を示せり。多くの頑迷なる人々は特に他人の罰せらるゝを見て悟るを常とするが故に、預言者は之をも顯せり。然ればパリストスも「ゲエンナ」に就きて多くのことを言ひ、且つ「ゲエンナ」に投入れられたる者をも示せり、例令ばラザリの時に在りし富者無智なる童女、「タラント」を地に藏せし僕、現在此世に於て苦を受けたる者、例令ば倒れたる塔下に壓潰されたる者、ピラトが其血を其祭物に雜へしの者の如き是なり(ルカ福音十三の一、四)。ペートルも「ゲエンナ」に就きて多くのことを述べつゝ、罰せられたる者の例を示し、彼等の眼前に於てアナニヤサプヰラを罰せし時は特に聽者を驚せり(使徒行實五の一)。パウルも博士等に斯くの如く行へり(使徒行實十三の十一)。又彼は曠野に旅行したる者のことを記憶して『兄弟等よ、我爾等が知らざるを欲せず、我等の先祖は皆雲の下に在り、皆モイセイに於て洗を受けたり、皆同じき屬神の食を食ひ、皆同じき屬神の飲料を飲めり、然れども神は彼等の中の多くの者を悅びしに非ず』(コリンフ前書十の一、五)と云ふは、唯或狀態を以て勸告するなり。乃ち彼等は滅びて倒れたり。彼は來世のことを、即ち「ゲエンナ」罰及び苦のことを言ひて、罰せられたる者を之が證據として示し、或者が蛇を以て或者が亡滅的死を以て罰せられたる事を示しつゝ過去のことより引けり。爰にダヰドは又アヒトフェリ或はアビサロムを眼前に置きて同じく行せり。或人々は此事を以てダヰドがアヒトフェリに就きて話された

るものなりと確定す、何となれば同一の人に對して、前には『少年アビサロムを寛かに待へよ』と云ひ、又其死後に『我爾に代りて死たらん者を』(第二列王紀十八の五、廿三)と云ひながら、今彼が云ふが如き言を發するは不適當なるに由る。然れども彼は前者をば天性自然の動機によりて云ひ、後者をば今神の感應によりて云へるなり。然れど是れアビサロム或はアヒトフリに就きて云はれたるなり、爰に述べられたる事實を推究するを要す、其何人に關係するかに就きては多く判斷せざらん。

十三。吾人は此個所より何事を教へらるゝか。預言者は隣に對して穴を掘る者は自ら之に陷り、また產婦が出產の苦痛にて煩悶する如く、奸計を企つる者もまた人を辱むるの前既に自ら煩悶苦痛し、而も其苦痛や輕少ならざることを告ぐ。彼は此苦痛の勢力を顯さんと欲して此苦痛を產苦と名づけたり。愍じて聖書が吾人に堪ふべからざる悲哀を示さんと欲する時は『產苦』てふ名稱を以て之を表せり。然れば他の個所に於ても『オリステムに住む者畏懼を懷く』(出埃及記十五の十四)と云ふ、即ち畏懼戰慄勞苦悲哀を懷くことなり。又バビルは曰へり『蓋人が平安無事なりと謂はん時滅亡は忽彼等に至らん產苦の妊める婦に於けるが如し』(ソルン前書五の三)と。爰に彼は二の事情を示せり、即ち苦痛の堪ふべからざることゝ其意外なることとなり。ヱ

ゼキヤも亦『子生れんとして之を生み出すの力なし』(イサヤ書三十七の三)と曰ひて、產苦を以て己の堪ふべからざる畏と不安とを顯せり。預言者も亦爰に之と同一なる表言を用ひたり。人如何に無量の罪を犯さんも、良心の審判は滅されず、何となれば良心の審判は生れながら神の吾人に感得せしめたるものなればなり。吾人は如何に、力を盡して良心の審判を免れんとするも、良心の審判は高く叫び審定懲罰して止まざるなり、惡しき行をなして渡世する者は其惡事を追想し、又其企圖を實行しながらも(內心には)千万無量の苦痛を感せざる者なし。誰かアハウより惡しき者ありしや。然れども記憶せよ、彼も亦葡萄園を得んことを望みて如何なる苦を受けたるかを。彼は王にして裕福者たりしより何人にも反對されざりしが、良心の譴責に堪えず、審定する所の良心の苛責を己の顏に顯し、その靈の中にありし悲哀を隱し得ずして悲み、心を搔き亂し、澁面を作り、首を垂れて歩行し、爲に妻の認むる所となれり(第三列王紀廿一の五)。夫の畏るべき惡行を決行したりし實主者は良心に責められ苦に堪えずして縊殺の最後を遂ぐるに至れり。然れども惡しき行をなして生活する者の苦を受くるが如く、善き行をなして生活する者は安全と靈の平和とを以て樂ひなり。視よ、何人にか復讎せんと欲する者、或は如何樣なるかの不正を行ふ

者は幾何の苦痛を受くるかを。彼は怒に充され、憂悶より心を引裂かれ、思慮亂れ、岐路に迷ひ、恐懼・戰慄・驚愕を感ず、彼は己の企圖に於て成功するか、復讎を果すか、然れど怒は制されずして彼を攪亂す——而して視よ、彼は人を辱めんよりも、先づ自ら己を滅ずを。之に反して怒を抑ふる者は此等のことを免れ、又頗る自適す、何となれば彼は自ら己を治め、自ら凡てを處理すればなり、然れど惡しき行をなす者には、時も場所も必要に、狡猾・奸計・武器・準備・勇敢・諂媚・卑屈・僞善も亦必要なり。爾は善行をなすの如何に容易にして、惡癖をなすの如何に困難なるを見るか——如何に前者の平安にして後者の紛擾に充さるゝを見ざるか。

預言者は之を畫きつゝ曰へり『視よ、惡者は不義を宿し、殘害を孕み、己の爲に詐僞を生めり』と。之によりて不義は吾人の天性にあらず、吾人に對して其外物たるを見るべし。故に不義は吾人が之を脫却せざる間吾人を苦め、吾人に產苦を蒙らしむ。然れば胎兒の全く發育せざるや、母の胎內に止まるは自然にして、妊婦は爲に痛苦を受けざるも、其發育するや、胎兒の胎內にあるの不自然なるによりて產苦を生ずるなり。胎兒の全體を完全に發達せしめ、次に之を胎內に保持ち得ざる程發育する時は、自然に之を壓迫して產出することを力むるものなり。

而も此處には前以て孕み、孕みて後產苦を生ずるも、彼處に於ては前以て『宿し』然る後『孕みて生めり』。是は何を意味するか。愛に產苦は唯出產時のみなるも、彼處には始より存す。人の何事か惡事をなさんと欲するや、己の思想を以て惡事に關係するよりも先づ其靈に混亂と不安とを生ず。嘗て婦人の胎に置かれたる種は發育して自ら生るべき者となり、又奸計を企つる人々の念慮に、今日一の思念生ずれば明日は他の思念を生じ、而して千百の惡しき種は交々投せられ、每日新しき懷妊と產苦とを顯し、之を生ずる所の靈を搔裂くなり。愛に所謂出生は通常婦人にあるが如きものにあらず、母の胎を破り脇を毀ちて生るゝ所の蛾の出生に似たり、奸計及び不義も亦斯くの如し。然れども吾人は如何に盡力すとも、惡人が試むる其苦を言語もて像ることを得ざるなり。故に或者は云へり、惡人は『獨り惡を負ふ』(箴言九の十二)と。實に何ものか人を嫉み、奸計を廻らし、人の所有物を强請する人の狀態より堪ふべからざるものあらんや、又之よりも慘憺たるものあらんや。此等の情慾は凡ての殺手よりも殘酷に靈を搔裂くなり。

十四。然れば預言者は正しく斯る思想を產の苦と名づけたるなり。然れども婦人の男と交合して子を生むや——彼等の身體强壯なる時は其所生の子女强壯なるも、

其不健康なる時は其生るゝ子女亦生來兩親の不健康に似るが如く、思想に於ても亦同樣なりとす。爾若し善人と交らば爾等の行狀も亦善人に似るべしと雖も、惡人と交りて注意せざれば、之によりて大なる害を受けん。預言者が『我等は孕み又苦みたれども救を地に施さず』(イサイヤ書廿六の十八)と云ひ、又惡魔の產出物に就きては『彼等は蝮の卵をかへし蛛網をおる』(イサイヤ書五十九の五)と云ふを聞け。吾人は惡人を避けん。神の誡に從ひて孕み又生み得るに、之を欲せず、又王妃となり得るに之を欲せず、其代りに盜賊强盜と配偶することを選びたる婦の如く振舞ひつゝ、惡人等の仲間と馳驅するは無智ならざるか『陷を掘り、之を掘り竣りて、自ら設けし穴に陷れり』。爰に預言者は再び寓意の表言を用ふ、彼は產の苦を以て悲哀を顯すが如く、陷を以て惡癖を解脫することの困難を畫けるなり。『自ら設けし穴に陷れり』或は他の者の云へるが如く『坑を掘るものは自ら之に陷らん』(箴言二十六の二十七)。諺語に對して、網が詭譎はる其人々を包むが如き運命を定むるは、是れ亦神の仁愛の所爲にして、之をもつて惡人等が隣に對する仇怨を止むべきことを悟らしめん爲なり。モイセイに就きて同樣なることありき。人々の殺さんと欲したる嬰兒は救はれしも、嬰兒を害せんとしたる者は其方法を以て自ら己を滅せり——何となれば彼は諸嬰兒を殺さんことを命じ、モイセイの母を畏れしめて子を河中に置かしめたりしも、ファラオンの女は嬰兒を入れありし籠より拔出して之を養ひ、其子は成長して悉く彼等を滅したればなり(出埃及記二の三)。之よりして神の仁善なる照管は明かに啓示せられ、惡人には强き開悟を與へ、惡癖を避くる者には安慰を與ふ。美善なるイオシフも亦斯くの如きことに遭遇せり。イオシフの兄弟等は彼を奴隸に賣りて忍ぶべからざるを忍べり、イオシフには如何なる害をも蒙らしめずして利益をさへ來せるに、彼等自らは悲哀の結果を嘗めたり。斯くの如きの例甚だ多し。他の例を見よ。誰か他人の所有物を取らば自ら己を滅したるなり。人に辱められ、其淩辱の利益となることは數々あることなるが、之を辱めたる者は却て己の靈に害を受く。誰か他人を辱むるあらんか。是れ自ら劒を以て己を刺貫けるなり。惡を忍耐せずして惡を爲すは其の艱難を作るなり。故にパウルは辱めんよりは寧ろ辱を忍ぶべきを誨へたり(コリンフ前書六の七)。ハリストスも亦頰を打つ者あるとも之に復酬せずして却て己を其前に立てゝ打たしむべきを敎へたり(マトフェイ福音五の三十七)。是れ最も大なる勢力の徵表なり、忍耐を生じ、靈を堅固にし、靈を情慾の上に立つるなり。人を辱め、人を打ち、人を誹る者は先づ自ら情慾に捕はれ、その虜となりて遂には人

に害を蒙らしむるに至るも、自らは既に己を極端なる怒隷に渡して最も殘酷なる惡に服するなり。『其殘害は其首に歸り、其暴虐は其頂に落ちん』(節十七)。是は人々の云ふが如く、アヒトゼルに就きてもアヒサロムに就きても云はれたるなり、何となれば彼等は偖に己の首を亡ひたればなり。前者は縊りて最後を遂げ、後者は樹下に乘入りて樹に頭髪を懸けて久しき間樹の上に懸りたればなり。然ればイウダも己の首を亡ふが爲に凡てを爲したるを見、縊りて最後を遂げたり。アヒトゼルも亦ダヴィドの必ず勝利を得べきを悟り、行きて縊れり。又アヒサロムは圖らずも樹の上に懸りて直ちに死することを得ず、先づ裁判所の前に引出されたるが如くに樹に吊下げられ、良心の苦痛を受けつゝ至高き神の裁判によりて久しく樹の上に懸れり。アヒサロムは父の血を以て己の手を洗はんと欲したりしも、父は尚軍士に之を寛待すべきを請ひ、而して其死後にすら彼の爲に哀み哭きたる程高慢を遠ざかりき。爾が此ありし所のことの人爲にあらずして、全く神の定めし所なるを承服せんが爲に、視よ——毛髪と樹とは彼を結び付け、無言の動物は彼を付し、髪は繩の代り、樹は絞臺の代りとなり、騾馬は劊手に代りて彼を此處に導けり。尚此にありし事の奇異なるを見よ。彼が斯る不幸の狀態にありし時に際して、之を引下すべき機會ありしも、敢て一人の臣下の彼に近づき來りて之を引下す者なかりき。彼が下されず、又縛られて父の處に送されざりしも神の所爲なり、何となれば父の愛は極めて彼を惜みたればなり、彼を父と和せしめたる者(第二列王紀十四の三十)自ら彼の强き讎責者の如くなりて彼を殺したるも歎くに堪へたり。然り彼は之を殺したるも、斯く定めしは神なり。

十五。實に預言者が此上より定められし事を如何に表言すを聞け。彼は『其暴虐は其頂に落ちん』と云ひて『我主なる主の名を讃め歌ふ』(節十八)と云ふ。言ふ意は、吾人は人を攻擊することを喜ばず、神の定を認めつゝ主を感謝せんとなり。然れども誰か主の義に因りて主を感謝し得る者ある。誰か當然に主を讃揚し得る者ある。一人もあるなきなり。『主の義に因りて』とは何を意味するか。之を換言ふれば『主の義の爲に』の意なり。彼謂らく、我は至上なる主の名を讃め歌はん、蓋し勝利と戰利品とは彼のものにして我がものにあらざれば也。王の戰爭に勝利を得るや、群臣は隊を組みて彼を讃頌ふが如く、我も亦斯くなれず、無分別なる者とならず、乃ち神之を要するに因りてにあらず、其吾人の爲に登

ありて且つ善なるに因りて自覺警醒すべきを示しつゝ『(彼等)崇め讃む』とは云はずして『(我等)崇め讃む』と云へり。神は『我縱令飢うとも爾に告げざらん』(詩篇四十九の十二)と云へる如く、自らは献祭を要せざるも、人々をして神を尊ばしめんと欲して献祭を受くるなり、斯くの如く神は吾人に讃美さるゝ必要なきも、吾人の救はれんことを欲して讃美の歌を受く。神は甚く吾人の善行に進まんことを欲し給ふに由る。

何事も屢々神と談話し、常に神を感謝し、神を讃揚するが如く善行に進歩することを助けざるなり。預言者は神の義鞭と寛忍とに慄きて神を讃美す。然れども爾は云はん、若し暴虐者殺されたらんには神の寛忍何處にかあると。爾にも神の寛忍は大にして永かりき。神は久しく彼を生者の中に止めたるは、其をして悔改めさせん爲なり、彼に王の寶藏をも領せしめたるは、彼が生れたる家養はれたる家、父に就きて記念する所の物を見て、之をして改悔に至らしめん爲なり。彼若し眞に猛獸にあらず、石の如き心を有たざりせば、此等のものは皆彼を開悟せしむるに足れり、即ち彼が父と偕に坐し、食卓、彼が殺人を行ひし時彼に訓誨を授けられし座位、其他凡てのものは皆彼の心を柔ぐることを得たりしなり。彼は父が放逐者逃走者として流離したること、又その非常の艱難を受けしことを聞けり。縱ひ此等の事にして彼の心を柔げずとも、アビトフルの遭遇したること、即ち係踵と死とは彼を開悟せしめ、彼を改悔に導かざるべからざりき。爾等の知れるが如く、彼は其友の遭遇したることを知らざりしにはあらず。此事の作りし時彼は何事をもて父を訴ふるを得んや。父が彼を己の目前より遠ざけたることにあるか(第二列王紀十九の三十二)。然れども之が爲に彼が兄弟を殺したる者を、斯く穩かに受けたるを慄き、かつ感謝せざるべからず。彼は毫も父を訴ふべき事なくして、無分別なる希望もて誘惑されたり、而も父は其時既に老人にして、彼の希望の將に成就せんとしたる時に、少時たりとも、忍耐せざりしなり。彼は勝利を得るとも如何にして其戰利品の爲に不潔なる者となり、詛はるべきものとなりて、最も憐むべき生涯を送ることを考へざりしか。

十六。艱難を憐む所の人々今何處にかある。此等のことは如何なる艱難疾病及び悲哀よりも重からずや。然れども ダヴィドは毫も斯ることを思はざりき、憂悶せざりき、泣かざりき、又我は晝夜神の法を學び、斯る位にあり、凡ての人々よりも困難にして善き報を受く、我は敵を憐みて自ら破廉恥なる子の手に渡されたりと云は

ざりき。彼は毫も斯ることを云はず、又思はざりしも、千辛万苦の中に一の慰を有しつゝ、智を以て凡てを忍耐し――此等のことは皆神の識り給ふことと思へり。三人の少者は云へり『假令然らざるも、王よ、知り給へ、我等は爾の神々に事へず、また爾の立たる金像を拜せず』(ダニイル書三の十八)と、又若し人あり彼等に對ひて、爾等は如何なる希望を以て死し、何を待ち、死後に、又身體を燒かれし後に(何となれば當時衆人には復活の希望あらざりき)何事を望むかと問はゞ、神の爲に死するは吾人に取りて大なる報なりとの答を彼等より聞くならん――斯くダウドも亦神は今己の遭遇する所のことを知りつゝ、之に妨げざりしと云ふことに於て至大なる慰を發見せり。然れば愛されたる者は己を愛する者の爲に、縱ひ死後彼より何ものをも待たざるも、千回も彼の爲に死することを厭はざるなり。然れば吾人も亦天國を受くるが爲にあらず、來世の或他の幸福を得んが爲にあらず、乃ち神自らの爲に凡てを忍耐せざるべからず。然るに多くの者は善行、剩へ善行の報賞を得るに執着せざる程不注意且つ怠慢なり、彼等は天國を約する神に聞かずして、地獄に誘引する惡魔を愛す。何事か斯る無智より畏るべきものあらん。然れども我は地獄に就きて何を云はん。惡魔は地獄よりも、先づ此世に於て吾人を悲哀、恥辱、嘲笑及び無數の苦に服せしむ、然れど多くの者は惡魔の許に進み行くなり。姦淫者を想像せよ、彼は如何に憐むべき生活を强ひて送るか、彼は未だ地獄に入らざるに、既に嗜鬼を生じ、陰を畏れ、人を直視することを得ず、乃ち知人及び不知者其他凡ての人々を危ぶみつゝ、到る處に頭上に懸る所の利劍、死、殺手、裁判所を見る。貞潔は千百の困難を伴ふも、何ものか之に似たるものあらん。貞潔は常に心の樂しき狀態にあるも、姦淫者は常に憂悶と暗黑の中にあり。己を怒に付す者及び怒を抑ふる者、人のものを奪ふ者及び人に與ふる者(或は之を尙善く云へば、神の爲に己の所有を費す者)に對しても亦同樣に見ることを得。後者は穩かなる港にあるも、惡の渦中に誘引されたる前者は、毎日轉々し居るなり。加之、己を貪慾に付す者は、老衰に至りて情慾も彼に快樂を與へず、近づく所の死畏を惹起す時は、爾は思へ、彼は如何なる苦を受くるかを。然れども善人にありては然らず、却て其老境に達する時は、特に喜樂を覺ゆ、何となればその快樂は老境に及んで凋まずして一層花咲けばなり。姦淫者、放蕩者、貪慾者、口腹を樂ましむる者の爲には、老年は快樂に終を告ぐるも、善き行を爲して生活する人々の爲には、快樂を增殖するに力む。然れば吾人の靈を感動せしむるが爲には、地獄及び彼處の苦の前に此等のことにて足れり。吾人は之を記

憶しつゝ、惡癖を避けて善行に執着し、神より幸福を受くるが爲にあらずして神自らの爲に神を愛せん。斯くして吾人は皆現世の生活に於て其道は狹きも旅行者の善良なる意志によりて廣きものとなる所の善行の途を歩み、世々に光榮の歸する吾人の主イエスハリストスの恩寵と仁愛とを以て其途の絶頂に達することを得ん。アミン。

第八　聖詠講話

伶長にゲフの樂器を以て歌はしむ。ダヴィドの詠

主我等の神よ、爾の名は何ぞ全地に奇異なる。他の譯者は曰く、「爾の名は何ぞ大なる」（譯者不明オリゲンの「エクザプルイ」參看（一節）（二節））

一。預言者は前の聖詠に於て「我主の義に因りて主を崇め讃め、至上なる主の名を讃め歌ふ」（聖詠七の十八）といへり。彼は爰に讃歌を神に獻りつゝ約束を果すなり。彼は前の聖詠に於ては唯一人にて「主我が神よ、我爾を頼む」（七の二）と言ひしも、此聖詠に於ては多くの人々にて「主我等の神よ、爾の名は何ぞ全地に大なる」と言へり。然れども默して謹聽すべし。かの演劇に於てサタナの歌隊歌ふ時は、此等亡滅的唱歌を聽くが爲に非常に靜肅なることあり、然れど彼處の歌隊は潛稽者及び舞踏者より成り、或る普通の伶長之を率ぬ、サタナの唱歌及び亡滅的唱歌を歌ひ、汚鬼及び惡鬼を讃頌するなるに、爰に歌隊は聖人より成り、預言者之を率ぬ、其歌ふ所はサタナの勸告によらずして神の恩寵によりて歌ひ又讃頌さるゝは鬼にあらずして神なるにより、沈默を守りて戰慄ぎ、敬虔にして聞くべきにあらずや。吾人の歌隊には天軍も亦關與す、何となれば天の歌隊なるヘルヴィムセラヒムは吾人と同一なることを行ひて斷えず神を讃頌すればなり。此等の歌隊の或者は地上にも顯れて警醒したりし牧者等と偕に歌ひしことあり（ルカ福音二の十三）。吾人も亦此唱歌を聽かん。地の王を讃頌する者は彼等の權柄、戰利品、勝利に就きて云ひ、彼等によりて征服されたる人民の數を數へ、彼等を以て勝利者及び征服者など名づく。福たるダヴィドも亦斯る歌を歌ひぬ。彼の言ふ所は、勝利又は戰利品等のことにあらずして、一層危險なる敵を征服したることに關す。然れば見よ、彼は如何に始むるかを、曰く「主我等の神よ」と。神を信せざる人のためには神は只一の關係に於て主なるも、吾人のためには、二つの關係、即ち神は無より吾人を造りたると、吾人が神を知るに由りて主たり。爾は如何に預言者が其始に於て主の大なる

仁慈を言ひ出すを見ん。爾若し神が如何に爾の主となりしか、神が如何に己を遠ざかり、己の敵となり、及び死せし者の如くなりし吾人を己のものとなして活動せしめたるを知らば、明かに是れ神の大なる仁慈なるを見ん。

預言者は之に驚きつゝ『爾の名は何ぞ奇異なる』と言ふ、奇異なるとは非常に驚くべしとの意なり、然れど彼は其如何に驚くべきかを言はざりき――之を測ること能はざればなり――唯強く高尚に表言したり。主の本性を研究し得る者何處にあるか。預言者若し彼の名を云ひて驚き、彼の名の如何に驚くべきか、夫さへ知ることを得ざりしに、恰も神の本性を知り得るが如く言ふ者は如何で恕すべけんや。『爾の名は何ぞ奇異なる』。此名を以て死を破り、鬼を縛り、天および地堂の戸は開かれ、神は遣され、奴隷は自由にせられ、敵は子となり、他人は相續者となり、人々は天使となれり。我は何をか天使と云ふ。神は人となり、人は神となれり、天は地の性を受け、而して地は天軍の間に於てヘルヰムに坐する者を受けたり、間隔の壁は取去られ、墻は破壞され、分たれたるものは合せられ、暗は散らされ、光は輝き、死は呑まれたり。預言者は此等のことを想像しつゝ、之よりも一層大なることを高聲に曰へり『爾の名は何ぞ全地によりて奇異なる』と。破廉恥にして眞理を排斥するイウデヤの諸子今何處にか在る。我は好んで之が何人に就きて云へるかを彼等に問はんと欲す。彼等は全能者に就きて云ふか。然れどもイサヤも『我が名は常に終日瀆さるゝなり』(イサヤ書五十二の五)と云ひて證するが如く、彼の名は全地によりて『奇異』ならざりき。若し主に務むる者にして之に對して非謗の原因者たりしならば、其名は如何で奇異ならんや。其名は疑ひもなく本質により て奇異なりしも、當時の人々の間に奇異ならずして剩へ輕蔑されたり。然れども今や然らず、神の獨生子の來るや、神の名は到處パリストスと偕に奇異なるものとなれり。預言者曰く『日の出る處より沒る處までの列國の中に我が名は大ならん』(マラヒヤ書一の十一)と、又曰く『何處にても香と潔き献物を我が名に献げん、然るに爾等之を褻したり』(全上一の十二)と、又他の預言者曰く『主を知るの知識地にみつ』(イサヤヤ書十一の九)と、又曰く、彼等『來り、我等の先祖の嗣げる所の者は惟謊と虚浮事なりといはん』(イエレミヤ書十六の十九)と。

二。爾は此等のことが子に就きて話されしことなるを見るか。彼の名は全地によりて奇異なるものとなれり。『爾の光榮は諸天に超ゆ』。他の譯者は曰く『爾は諸天の上に爾の光榮を置ける者なり』(シムフ)と。預言者は地のことを云ひて全世界を以て己の主宰を讃揚する者と顯す時に通常行ふが如く、天

に對しても談話を向く。彼は此にも同一のことを表言しつゝ、卑くきに奇異なり、高きにも奇異なりといへり。啻に人々のみならず天使等も亦彼等が初めその歌隊を地上に組織して行しゝが如く、神の爲し給へることを讃美し及ひ神の人々に顯されたる仁慈を感謝す。斯くの如く彼は天使も讃美する所のことを言ひ、或は神の威嚴を畫かんと欲するなり。聖書が何事か大なるものを顯さんと欲する時は、その事物の相互間の距離を示す、例令ば『天の地より高きが如く』(聖詠百三の十二)と云ひ、又『東の西より遠きが如く、斯く主は我が不法を我等より遠ざけたり』(仝上三の十二)とある が如き是なり。然れば爰に預言者は行はれたることの如何に大なるか、如何に重きかに驚異す、何となれば神は凡てのものよりも卑くきにある者を凡てのものよりも高く立てたればなり。『爾は嬰兒と哺乳者との口より讃美を備へたり』(節三)。他の譯者は『嬰兒の口より權威を基せり』(アキラ)となし、第三の譯者は『能力を成せり』(シムマフ及び不明の譯者オリゲンの「エクザプルイ」參看)となす。而して此言の意味は左の如し、爾は動作かざる才能を動作かしめ、又調へたる舌を明瞭に讃美するものとなして、特に己の能力を顯したりとなり。爰に預言者は聖堂にありし嬰兒の讃美を預言せり(マトヲイ福音廿一の十五)。然れども何によりて神は他の奇蹟即ち死者を復活せしめ

癩者を清め、鬼を逐ひしことを遣てゝ子供等に行はれし此奇蹟を述ぶるか。其等の奇蹟は縱ひ斯くの如く感動すべきものたらざりしも、以前にも數々ありき、即ち其行はるゝ方法の似ざるも、之に似たる奇蹟の數々ありしによる。然ればエリセイは死者を復活せしめ(第四列王紀四の三)ダウヒドは(第四列王紀五の十四)サウルが鬼に憑られし時其鬼を逐出せり(第一列王紀十六の廿三)然るに當時哺乳の嬰兒隊は先づ第一に言へり。是れ預言者は破廉恥なるイウデヤ人が、之は舊約の奇蹟に就きて話されしものなりと固めざらん爲に、當時先づ最初に行はれし休徴を選べるなり。他方より言へば、此事件は使徒の預象なりき。然れば彼等は全く嬰兒の如く、また魚其物よりも無言にして全世界を漁れり。神の能力も特に此事に於て顯さる、視よ、預言者等が舊約に於て神父に就きて言ふ所を。神はモイセイと談話しつゝ曰へり『啞者・聾者・盲者などを造る者は誰なるか』(出埃及記四の十一)と。又曰へり『啞者の舌は歌うたはん』(イサイヤ書十五の五、六)と。又曰へり『主は教を受けし者の舌を我に與へ、言を以て疲れたる者を扶支ふることを知得しめ給ふ』(イサイヤ書五十の四)と。又始に云へり『去來我等降り、彼處にて彼等の言語を淆さん』(創世記十一の七)と。然れば此休徴は大にして強し。破廉恥なる人々は他の休徴に關し、故なくして疑を挾むことを得たるも、爰には何事をも云ふこと

を得ざりき、何となれば爰に質朴なる自然は自ら之を證明すればなり。是に由りて預言者は人或は嬰兒の下に、質朴温柔なる人々を理會せざるが爲に、單に『嬰兒』と云はず、彼等の年齢を定めつゝ食物を指示して『哺乳者』てふ言を附加へたり、即ち啻に『嬰兒』と云はずして、未だ啻て固形物を食はざりし『哺乳者』と云ふ言を附加へたり。實に彼等が言を發し、而も明瞭に之を發したるのみならず、無量の美を表言したることも亦驚くに堪へたり。嬰兒は使徒等の尚未だ知らざりしことを讃美せり。加之預言者は爰に或他のこと即ち神聖なる教に近づく者は、己の靈の嬰兒たるべきことを勸告す。主曰へり、誠に嬰兒の如く天國に向はざる者は天國に入るを得ず（マトフェイ福音十八の三）と。『爾の敵の故を以て』。是れ如何なる理由により此奇蹟の生じたるをも示すなり。他の奇蹟は敵の爲にありしにあらず、近づき し者は仁慈を受け、而して他の者の教へられん爲なり、然るに此奇蹟の生じたるは、啻にそが爲のみならず、敵の口を蔽はん爲なり、此敵に對して他の譯者は最も正しく『爾を縛する人々の爲に』（アキラ及びヒオドチオン）てふ言を以て示せり、これ彼等は主を捕へて十字架に導きたるに由る。『敵と仇を報ゆる者とに言なからしめん爲なり』。他の譯者曰へり『敵と己の爲に仇を報ゆる者とを止めしめん爲なり』（アキラ。シムマフ及び不明の譯者オリゲンの「ユクザブルイ」註釋）と。預言者は爰にイウデヤ民に就きて言ふなり、何となれば彼等は恰も之を父（神父）の爲に復讐をなしたるが如き口實の下に、敵の如くハリストスを窘逐したればなり。是に由りて主は斯る辯解を彼等に遺さずして『我を惡む者は我が父をも惡む』（イオアン福音十五の廿三）と云ひ、又『我を信ずる者は我を遣しゝ者を信ずるなり』（イオアン福音十二の四十四）と云ひて、名譽なる時にも、不名譽なる時にも、常に父を己と同一なるものとなせり。而して視よ、預言者の表言の如何に正確なるかを。彼は『罰す』とは云はずして『言なからしむ』と云へり、他の譯者は之を最も明瞭に『止めしむ』てふ言を以て彼等の破廉恥を止めしめ、且つ其教ふべからざるを表言せり、彼等は癒すべからざる病者なれば也。故に彼等は斯る奇蹟を見るも之に對しては何事をも云ふを得ずして、ハリストスに向ひて『爾此の輩の言ふ所を聞くか』（マトフェイ福音廿一の十六）といへるのみ。彼等はハリストスに叩拜すべく又驚くべかりしに却て大なる疑を懷けり、また各人は互に己の隣に『爾等は此の輩の言ふ所を聞かざりしか』と云ふの代りに――彼等は自ら己に向はずして、ハリストスに對して之を言へり。然れども何故に天使の聲は聞えざりしか。彼等は唯斯くの如く聞ゆと思ふならん、然れども、其奇蹟に對しては何事をも言ひ得ざりしなり。

童兒等は何を言ひしか。彼等は毫も奇異なることを云はず、反對なることを云はず、彼等を辱むることを云はずして、甚だ明に子の父と合一することを表言せり。彼等は曰へり『主の名に因りて來る者は祝福せらる』(マトテイ福音廿一の九)と。

三。然れば當時主は彼等の破廉恥を規責して、然る後に彼等の市をも破壞せり。故に世界中イウデヤ人の艱難を知らざりし所なし、唯身體の不具にて苦む者は到る處に己の傷を示して彷徨するが如く、又裁判官が多くの殺人者に死刑を宣告して彼等の中の或者を絞臺に立たしめたることは、彼の上に今や行はれたる許の刑罰が、その死後尙生者を悟らしむる如く——神はイウデヤ人を散在せしめて其死者のみならず生者をも衆人の例となしたるなり、即ち以前には一國に住居したりし彼等は、今や全地に散在せしめられたり。爾若し其理由を問はゞ、彼等がハリストスを十字架に釘うちしことの外何等の理由をも知らざるならん。我に告げよ、何故に此ことは、以前になかりしか。嘗てありたるも、彼等は數年間或人民に連れ行かれたりしのみ、然れど今や然らず——乃ち彼等は終なく罰せるゝなり。而して爾若し彼等に『何の爲に爾等はハリストスを十字架に釘うちしかと問はば——彼等は云はん、彼は欺騙者たりしが爲、魔術者たりしが爲なりと。然れども爾等は彼を釘うちしが爲に神に喜ばれ、大なる榮譽を受け、最も廣大なる國を領有することを得べかりしならん。欺騙者、魔術者、神を畏れざる者を殺したる者は、神の敵を殺したるなり、而して神の敵を殺したる者は、正しく彼の仁慈を受くることを得たりしならん。オチースは放蕩なる一婦を殺して祭司職と斯くの如き名譽を受けし程神の悅ぶ所となれり(民數紀五の十二)然れど爾等欺騙者を殺しゝならば、一層大なる仁慈を受くべかりしならん、然るに爾等は追放者の如く、流浪者の如く到處に漂泊す。否爾等の斯る艱難を受くるは、中保等、恩者及び眞理の敎師たる主を十字架に釘さたるに由る。彼若し欺騙者たり神を畏れざる者たりしならば、又彼は神にあらずして神たらんと欲し、及び父に屬する名譽を奪ひしならば、爾等はフィチースサムイルの及び其他律法に就きて斯る熱心を示したる多くの者よりも、一層多く神の仁慈を受くべかりしならん。然れど嘗て偶像を拜し、不虔に陷いり、子を刺殺しゝ時も受けざりし所のことを、今爾等は之を受く、爾等は己の艱難の終を見ず、追放者、逃走者、流浪者及びロマ法の奴隷の如く漂泊す、市をも家をも有たざる移住者、奴隷にせられたる者、自由と生國と祭司職と以前の凡ての財產を奪はれたる者——野蠻人及び無數の人民の間に散らされたる者、凡ての人々に惡まるゝ者、凡ての人々に輕蔑さ

れ凡ての淩辱に渡されたる者として陸と海とを逼歷す。勿論爾等の賞を受けざりしは、神の敵を殺したるが爲にあらず——是は無分別且つ愚なることにして——却つて今爾等が受くる所のことは、神の敵を殺さずして神の友を殺す者に適當なり。然れども彼等は曰ふ、吾人は之を云はざらん、吾人の罪の爲に此等のことを受くと。然れば不信者よ、今爾等は認るか。我に告げよ、是は如何なる罪の爲なるか。爾等は今罪人となりし許なるか。却て爾等は今最も順從なる者となれり。然れども我が此事を云はざる先に爾等は何によりて前には常に罪を犯しながら神の憐を受け、而して今や已に之を受けざるか、而も特に奇とすべきは、今爾等が罪を犯すこと少きに、何故之を受けざるかを爾等に問はんと欲す。當時爾等は而も斯くの如き休徵を見つゝヱーリヱゴルにも犧牲を献じ、犢牛に叩拜し、己の子をも刺し殺し、己の娘をも殺したりしが、今や分るゝ所の海をも見ず、開く所の石をも見ず、爾等に顯るゝ所の預言者をも見ず、爾等に就きて神の通常の照管をも見ざるも、一層順從なる者として顯はる。何故に爾等に罪少なく、智の多かるに、爾等は最も大なる罰と苦とを受くるか。現今吾人の罪が以前のよりも一層大なることは、至て無智なる人々にすら明瞭なるにあらずや。爾等は石を以て預言者等を擊ち殺しながら

（僕に對して罪を犯しゝ間は）敵免されしも、其手を主宰に擧ぐるや、爾等の傷は癒すべからざるものとなれり。且つ視よ、爾等の市の其基礎の破壞され、祭司職は奪はれ、國は亡され、種族は混淆せられ、吾人にある光榮にして高貴なるものゝ悉く消滅せられし時より既に殆んど四百年を經過したるを以て、以前に嘗て存在せざりしが如く其痕跡をも留めざりき。往昔聖堂の破壞さるゝや、預言者等も存し、神の明も存し、奇蹟もまた存したりき、今爾等をして神が常に爾等より避くることを明かに見せしめんが爲に、此等のものは皆取除かれ、奴隷となり、捕虜となり、諸の幸福は剝奪されたり、而して何事よりも重きことは——爾等が神に遣てられたることなりとす。

四。若し數々罰せられて矯正せざりし奴隷ある時は、其衣服を奪ひて之を裸にし、流浪者と同一視し、之を放ちて施を乞はしめ、四方より窘逐せしめたるが如く、神は爾等に斯くの如くにてはあらざりき、爾等にはエギペトに於ても、ワヲロンに於ても、曠野に於ても亦預言者ありき——エギペトに於てはモイセイあり、ワヲロンに於てはダニイル、イエゼキイリあり、エギペトに於ては又イエレミヤあり——且つ奇蹟の後に奇蹟ありき。爾等の中より出でし捕虜

の王に勝る者ありしによりて、爾等の民は最も有名なりき。今や此等のこと一もあるなし、唯存するものは、時の永きによりてのみならず、非常なる排斥を受くることによりて以前よりも一層重き罰あるのみ。何故に爾等が最も多く罪を犯しゝ時に寛待せられ、而して爾等の云ふが如く、律法に就きて熱心を示したる時に最も重き艱難に服したるかを我に語げよ。爾等は之を以て神を不正なる者、即ち罪を犯す者に名譽を得しめ、善事を行ふ者を不名譽に服せしむるが如き不正なる者として訴ふるか。爾等若し爾等の云ふが如く、欺騙者を殺しゝならば、爾等は善事を爲したるなり、又神若し正しくして、如何にも實に正しければ、爾等を賞するとも罰すべからず、彼若し罰じなば爾等の現在の罪は以前のよりも重きや明かなり。若し今爾等が己を不虔に渡さず、又以前の如く兒を刺殺さずして最も重き艱難に服するは、是れ他の或罪によりて然るか。十字架に釘したる惡行の、他の犯罪より重きことは明かなるにあらずや。此惡行は偶像を崇拜し、犢牛を鑄造し、兒を殺すことよりも多く爾等を滅せり——何となれば己の兒を刺殺すと己の主宰を十字架に釘するとは同しからざればなり。視よ、何に由りて爾は己の兒を刺殺しゝ時は赦され、神の子及び爾の主宰を刺殺したる時は既に何等の容赦なくして罰せられしかを。

（イズライリ民が）エギペトを出でしよりパリストスの降臨まで幾年なりしか。思ふに一千五百有餘年ならん。何故に神は斯く永年の間爾等の罪を忍耐し、而して今（爾等が他の多くの罪を行ひしとは雖ども）特に爾等に榮冠を蒙らしむべかりしに却て爾等を擯斥するか。爾等若し欺騙者を殺しゝならば、爾等の行爲は偉大なり、而も爾等は今外見上「スボタ」をも守り、偶像をも崇拜せず、力めて他の規定をも守らんとす。斯く爾等の生活は以前に勝り、又爾等の云ふが如く、爾等の行ふことの美麗しき時に際して、爾等は非常なる艱難を受く。何ものか斯る無智より惡しかるべけんや。何ものか爾等の如く、己自らを義とせんと欲して神を誹謗するより無智なることあらんや。實際パリストスに對する罪にして他の諸罪よりも大ならず、剩へ爾等の云ふが如く、正しく且つ善行なりとせば、神豈善をなしゝ爾等を罰して、罪を行ひし者を赦さんや。斯くの如きことは是れ單り神のみならず少しく常識ある者の決してなさゞる所なり。然れども彼等は之に對して何事を云ふか。彼等は云ふ——吾人は世界の教師となるが爲に散在せりと。是れ愚なることなり、空しき言なり。後來の教師たらん者は、預め自ら善行者となり、然る後預言者及び

使徒等の如く此事業をなすに出行かざるべからず。自ら放蕩にして凡ての惡癖に充されたる者は如何で人々を教ふるに遣されんや。吾人は彼等の以前の生活の如何なりしかを觀察せん――然らば吾人は彼等が野獸よりも惡かりしことを見出さん。彼等は父殺たり、子殺たり、偶像崇拜者たり、又貪慾者たりき、預言は此事に關する物語にて充されたり。イエレミヤは彼等の色慾を畫きて『彼等は肥たる牡馬の如くに行めぐり、各々嘶きて隣の妻を慕ふ』(イエレミヤ書五の八)と云ふ。何ものか斯る不潔より惡しきとあらん。彼等は妻と相互に交合するに人の如くせざるが故に、預言者は彼等の斯る狂暴を『嘶き』と名づけたり。又彼は當に彼等の放蕩を咎むるのみならず、而も無言なる動物の如く破廉恥にして行ひし姦淫をも罪したり。他の預言者は曰ふ『彼等は衣服を敷きて、父子ともに一人の女子に行けり』(アモス書二)と。神爾等を教師として遣したるは、吾人が放蕩姦淫を學び、父子一の臥床を有するが如きことを學ばんが爲にあらず。イエゼキエリは何を云ふか。曰く『異邦人の法の如くに行ふことすらもせざるなり』(イエゼキエル書五の七)と。我に語ばよ、神は異邦人よりも惡しき者を教師として遣しゝにはあらざるか。又誰か彼等の排斥すべき殺人罪を忍耐し得んや。彼等は惡魔を祭つるに、己の子女を刺殺し、又之を燔けり。ダヴィド

之を示して曰く、彼等は『己の男子己の女子を以て惡魔に獻祭せり』(聖詠百五の三十七)と。神の爾等を遣しゝは、人類をして子女を刺殺すべきことを學ばしめん爲にはあらざるか。爾等も亦斯る愚なることを思ひて恥ちず、又心を亂さゞるか。他の預言者も曰へり『たゞ詐ひ、僞り、凶殺、盜み、姦淫のみにして血血につゞき流る』(ホセヤ書四の二)と。又他の預言者は曰へり『爾娼妓の額あれば貴て恥ぢず』(エレミヤ書三の三)と。又他の預言者は曰へり『爾等の牧伯等は夜の狼の如し』(ソフォニヤ書三の三)と。又曰く『智の明にして神を求むる者なし、皆迷ひ、均しく無用となれり』(聖詠十三の二、三)と。

五。爾等は此破廉恥、無智、放蕩、姦淫、凶殺及び諸種類の惡癖を學ぶに出でざりしか。然れども爾等は吾人をして爾等の犯罪を說明することを止めしむるか。爾等は『腹を出でしより我に負はれ、又爾等の年老ゆる迄我に擡げられし者なり』(イサヤ書四十六の三、四)爾等は互に坑に陷いる所の譬なり、即ち主曰へり『若彼にして彼を導かば二人ながら坑に陷いらん』(マトテオ福音十五の十四)と。爾等は毎日預言者を利用して何時も以前より善き者とはならず、爾等も亦人の教師たらんと欲するか。爾等は何れの時か虛僞を言ふを止め、又己の惡癖を認むるか。艱難の原因を己が罪中に認むるを欲せざることは常に爾等を亡さん。然れば視よ、裁判官が刑罰に宣告さるる者の爲に罰の理由

を説明する所の告示者に、彼等が竊盗たるか、將た强盗たるかを審理すべきを命じて裁判するが如く、神も亦到處に於て吾人の爲に告げんと欲して吾人の罰の理由を説明する所の預言者に吾人の爲に審理すべきことを命じたり。彼等は爾等と離れずして全世界にあり、今に至る迄も尙爾等に對ひて云はん。爾會堂に入らば、預言者が常に此事に就きて云ふを聞くべし。ダウィドはカイアファの盗賊的裁判所に就きて書き記しつゝ、爾等は即ち之が爲に亡びたりと云ふ。彼は『我等其繩を斷ち其鎖を棄てん』と云ひて『其時憤りて彼等に言ひ、其怒を以て彼等を援さん』(聖詠第二の三、五)と附加ふ。又イサイヤは『屠場に牽かるゝ羊羔の如く』と云ひて『その墓はあしき者と偕に設けられたれど、死るときは富める者と偕になれり』(イサイヤ書五十三の七、九)と附加へ、又他の個所に於て葡萄園のことを述べつゝ『これに公平を望み給ひしに、反りて血を流し、これに正義を望み給ひしに、反りて號呼あり』(イサイヤ書五の七)と云ふ——如何なる號呼なるか『十字架に釘せよ、十字架に釘せよ』(ルカ福音廿三の廿一)是なり——彼又附加へて曰ふ『その垣を毀ちてその踐み荒さるゝに任せん、又雲に命じて其上に雨降ることなからしめん』(イサイヤ書五の六)と。然れば爾等の散らされたるは其の爲にあらず、乃ち預言者の言によりて知らるゝが如く、十字架に就きての己の狂暴はしき犯罪の爲なり。又爾等がハリストスの能力を識り、かつ預言者より學ばざりしことを爾等自ら學ばんが爲に、爾等の事實が如何に預言の應せしことを證するかを見よ、律法が爾等に教へざりしことをハリストスの能力は裕かに爲せり。爾等が律法を有し、爾等が凶殺を行ひ、幼兒を刺殺し、姦淫したる間に、義の太陽は耀けり、之によりて爾等の惡行も非常に減じ、又吾人に對する競爭を止めて最も温柔なる生活をなすに至れり。神が爾等を散したるは爾等をして如何なる生活を地上に殖したるかを知らしめん爲なり、聖堂の破壞されたるは爾等の意志に反して爾等を惡癖より避けしめん爲なり、又聖堂の破壞されたる所にハリストスの葬られたるは、彼の墓の在るに由りて、爾等が其處より遠ざかりつゝ、ハリストスの能力ある戰利品をも見、かつ彼が『此には一の石も石の上に遺らず』(マトフェイ福音廿四の二)と曰ひし言の確實なるを見ん爲なり。然れどハリストスの戰利品と、彼の能力ある記念碑とは到處にあり。爾等の云ふが如く、彼若し不虔者たり、又神を畏れざる者なりしならんには、縱ひ爾等無數の罪を行ふとも爾等を罰すべからざりしなり、もし亦罰すべしとするも、其時に於てすべからず、何となれば人が爾等の罰を受くるはハリストスの爲なりと思はざらん爲なり。爾等が虜にありし時、神は『我爾等の爲に之を爲すにあらず、爾等が汚せし

我が聖き名の爲になすなり』（イエヒキイル書三十六の廿二、三十二）と云ひしを爾等は聞かざりしか。當時爾等の惡は頗る大なるものなりき、然れども彼曰ふ、偶像崇拜者をして我を無力なりと思はざらしめん爲に、我は爾等の罪を免し、爾等を救ふと。若し當時彼は爾等が彼の名を褻瀆さゝるが爲に不法を行ひし爾等を救ひたらんには、何故に彼は今之を爲さゝるか。縱ひ爾等無數に多くの罪を犯したりとも、若しパリストスにして欺騙者たりしならば、爾等が彼の爲に受くると人の思はざるが爲に、斯る艱難を受くべからず、否却て救を受けざるべからず、若し受くべしとせば、我が述べしが如く、其時に於てせざるべし。然れど此等のことは偖に行はれたり。十字架の顯るゝや否や、及び使徒等の去りし後若干時を經て殘酷なる戰爭は直に其市に始り、而して福音の中に『妊める者と乳を哺まする者と禍なる哉』（マトスイ福音廿四の十九）と云はれたることゝ、其他凡てのことゝは應じ『其時大なる患難あらん、今日に至るまで未だ此くの如きはあらざりき』（全上廿一）てふ言も亦應じて實際に行はれたり。其時婦人は己の幼兒を食ひ、敵は死體を引裂き、兵火は到處に荒敗を來たし、凡ては血と從來未だ嘗てあらざりし艱難とを以て充され、而して全世界はイウダヤ人の不幸に就きて聞けり。此事を推究して爾等の主宰を認めよ。爾等は預言者を殺しゝにあらず

や―然れど毫も之に似たることを試みざりき。爾等は祭壇を破壞したるにあらずや―然れど爾等は斯る艱難に遇遭はざりき。爾等は犢牛を崇拜し、ヱーリヱゴルに奉事め、天性に反して起ちしにあらずや―然れど斯る敵に陷らざりき。爾等は神の仁慈の中に在りて忘恩者となりしにあらずや―然れど救はれたり。何故に今無限の艱難は爾等に及びたるか。是れ爾等が奴僕に對してにあらず、乃ち主宰に對して敢て罪を犯したるに由ることは明なるにあらずや。是故に爾等は爾等に及べる艱難より救はれず、今後も亦救れざらん、若し之あるを得んには、預言者等は其事に就きて預言したりしならん。然れど彼等は此虜に就きて預言するや、常に威嚇の中に慰籍を示し、又威嚇の時限を定めたりしも、其虜より避くることに就きては何時も曰はざりしなり。然ればイエレミヤはバビロンの虜の年限を七十年、と定限し（イエレミヤ書廿九の十）ダニイルは六十週となし、又爾等は四百三十年の間エギペトに奴隷たらんと云はれたり（創世記十五の十三、出埃及記十二の四十）。此虜のことに關しては、何時も其時限をも、其終期をも定められず、乃ち『爾等の家は虛しくして爾等に遺さる』（マトスイ福音廿三の三十八）といへり、爾等の事情は日々に非ならんとす。爾等は注意して此等のことを想像し、及び之より最も遠き決定を引出しつゝ

〔聖書に曰らく『智慧ある者に授けよ、彼は益々智慧を得ん』(箴九)〕イウデヤ人の破廉恥と妄恩とを責むるを得べし。『我爾が指の作爲なる諸天を觀』(節四)。他の譯者は『蓋我諸天を觀』(不明の譯者オリゲンの「エクザプルイ」參看)となす。『爾の建てし月と星とを觀れば』。他の譯者は「建てし」を『準備せし』(アキラ及びフェオドチオン)となし、第三の譯者は『固めたる』(不明の譯者オリゲンの「エクザプルイ」參看)となせり。預言者は「爾は諸敵を倒せり」と言ひて、斯くの如き光榮なる勝利の確實なることをも顯せり。預言者謂ふ、十字架に釘うたれ死に付されたる爾は世界の創造者と顯れたりと。是に依りて預言者は前には少數の人之を知れるも、後には衆人の知るべきことを表言しつゝ『諸天を觀る』と云ふ。然れども彼は何によりて世界の凡ての部分を數へざるか。見ゆる所の最も重なる事物に就きて記憶する時は、其他の諸物に就きて云ふの必要なかりしに由る。諸敵に窘逐せられ、死に付されたる者は、凡そ見ゆるものゝ創造者と顯れて諸敵を倒せり。而して彼は何故に「爾の手」と云はずして『爾が指』と云ひしか。是れ凡そ見ゆるものは、彼の能力の爲に容易の作爲たることを示さん爲、又星辰は天に懸けられつゝ落ちざる創造の奇蹟を示さん爲なり。假令ひ『建つるには』上に懸けんより下に置くの適當なりしにも拘らず、巧者なる工藝家、奇異なる事業の成全者たる造物主は、万有の通法に由らずして多くのものを見ゆる世界の中に造れり。預言者は何故に毫も無身の軍に就きて云はず、又此事に於て主の創造力を示さゝるか。是れ預言者の目的は見ゆる世界を以て聽衆を教へんとするに在ればなり。是に由りて彼の父(神父)は屢々イウデヤ人に語げて「我は天使及びヘルウィムを造りたり」とは云はずして『我が手は地の基を置き、我が右の手は天をのべたり』(イサヤ廿四十三)と云ひ、又彼は凡てのことを聽衆を救ふことに向けつゝ、常に見ゆるものに就きて述べたり、何となれば聽衆は野鄙にして見えざるものよりは寧ろ見ゆるものに誘引されしに由る。是故にバウルも、己が說話の序言に於ては常に見ゆる萬物を以て始む『世界及び其中の萬有を造りし神』(使徒行實十七の廿四)と云へるが如き是なり、又常に每年の雨と人類とに就きて記憶せり。故に我若し神ヘルウィムを造りたりと云ふ時は、二の事實を證明す、即ちヘルウィム等の存在すること、神の之を造りたること是なり、然れど見ゆるものに關しては、我は唯神の之を造りたることを示さんとす。見ゆるものに就きて云ふは最も便利なり、見ゆるものは說話の證據となればなり。聽衆は此事物の威嚴と美と利益と堅固整全なることを見、而して我は唯神の之を造りたるを示さんことを要す。何故に彼は太陽のことを云

はずして、唯月と星とのことを云ひしか。彼は此等のことを云ひて、太陽のことをも思はしめたるなり。或人々は、夜は神の創造したるものならずと云ふが故に、月を以て夜を示して、神は夜をも造りたることを顯すなり。然れど星に於ても、月の運行の現象に於ても異ること少からず。『則ち人は何物たる、爾之を憶ふか、人の子は何物たる、爾之を顧みるか』(節五)。他の譯者は『各人は何物たる、爾之を憶ふか』(不明の譯者)となせり。預言者は受造の萬有に就きて說話し、及び部分を以て完全なるものを示して、今や話頭を人々に於ける照管に轉じたり。縱ひ前に陳べたる造物が、吾人人類の爲に存在し、又造物の存在は、人類が神に照管さるゝ證據——凡ての造物は皆人の爲なり——なれども、預言者は直に人に就きて云はず、非常なる先見を以て世界の爲に感謝を献げ、一般の仁慈に就きて云ひ、然る後人に關する配慮の偉大なるを顯しつゝ、照管の他の狀態を述ぶるなり。人は前に微弱なるものなりしが、斯く多くの重き罪を犯したる後、即ちハリストスの降臨したる時は一層微弱なるものなりき。斯くの如く預言者はハリストスの降臨は啻に慈悲たるのみならず、其大なる仁愛の事業たりしことを示せり。眞に巧者の醫師たる神は、强壯者を遣てゝ微弱多病なる吾人に來れり。預言者は之を思ひつゝ『人は何物たる』と云へり。之を言ひ換ふれば、人は微弱なるもの、些の價なきものなりとなり。預言者は神が人類を救ふが爲になしゝ所の斯る照管、斯る配慮、斯る處置を見て、何故に神が人を斯る照管に堪へしめしかを極めて驚き異めるなり。凡そ見ゆるものは人の爲、アダムよりハリストスの降臨に至る凡ての配慮は人の爲、律法時代に於ける地堂、誡命、刑罰、奇蹟及び罰と仁慈とは人の爲、神の子が人となりしも、亦人の爲なることを思へ。而して來世の福樂の人の爲なることは云ふ迄もなし。預言者は是等のことを思ひつゝ、斯る幸福に堪ふる所の人は如何なる者なるかと云ふなり。

七。實に神が人の爲に爲しゝこと、爲しつゝあること、將に爲さんとする所のことは幾何なるか、之を想像する者は大なる驚に充たされ、又明かに神が如何に此造物に就きて慮るかを見ん。『爾彼を天使等より少しく遜らしめたり』(節六)他の譯者は『神より小なる者として』(アキラ。シムマフ。ヂオドチオン)となし、第三の譯者は『神より少しく、』(不明の譯者オリゲンの「エクザプルイ」參看)となし、エウレイ語には『爾彼を神の前に少しく卑うせり』とあり。愛に預言者は死を示しつゝ、罪を定むることと及び舊き罪に就きて記憶す。然れども獨生の子は來りて死をも破壞せり。『彼